

ば、百千萬劫にも取かへしはあるまひ。

歌 いくおも定めなき世と知りぬれば  
家をも旅の心地こそすれ

生の前には生あり死の後は死あり、春の夏となり、秋の冬となるが如し、人の一生は過去世より未来にいたる道中の旅館に宿する様なものである、支那の先賢も「人生は逆旅の如し」と云ひ、アルガザリは「靈魂は旅客にして世界は一夕の旅館なり」と云はれた、上に掲げた和歌も亦その意味なのである、さて人生を旅館とすれば、われ／＼が此世の中で、人の爲め世の爲めに働くは、此旅館に拂ふ宿泊料である、人生に處して何の爲す所もなく、醉生夢死と云ふやうに死ぬる人がありたならば、それこそ宿泊料を支拂はずに出立

した無銭飲食、食ひ逃げである。

歌 秋の田の蒔穂の上の稻雀

求めある身のさはがしきかな  
淨影の大經疏に世間の財寶に五種の苦あることを示されて、一には求財の苦、二には守護の苦、三には散失の苦、四には失命の苦、五には未來の苦で、我身を安穩にして暮そうと思ふたことが、却て苦みの媒介者となりて有田憂田有宅憂宅と、苦の上に苦を重ね憂の上に憂を増すので、一生涯ア、樂しやと思ふことの一寸もなるが凡夫のありさまちや、されど世の中の事もよい加減にしておいて、後生の一大事に心をかけたものちや、淨土にあらざれば心に叶ふ樂なし、聖衆に非れば心にかなふ友はなるほごに、世の中の事はよ

かれあしかれ、急いで後生の一大事を心にかけて、我人一同に往生極樂の素懷をたげよとあるが朝夕の御勸化である。

歌 夢の世に夢みてくらす夢人の  
夢物語するも夢なり

菅 亟相が身儒生の中より選まれて、位右大臣の榮を得たりしも、やはり夢であつたと見えて、時平と云ふ悪者が撞いた鐘に目を覺ましてみれば太宰府へ左遷せられねばならぬ身となつた、奈拿翁と云ふは佛蘭西の豪傑にして歐亞の天地を震動し、威風堂々、鐵蹄の過ぐる所、草靡き腰間三尺の劍、人を斬り馬を斬りし豪傑も今影だになし、豊公は鞋奴より起つて身關白の貴きに登り、皇風を海外に輝かした英雄であれど、今其冷骨は東山一片

の暮畔に眠りて居る、陶朱猗頓の富貴も、揚妃西施の美貌も、皆零落して殘すものはなる古人が、  
英雄畢竟馬前塵 美人多是水上泡  
が云はれた如くで、萬事皆夢の浮世である。

歌 昨日まで乗りて遊びし竹馬も  
今日はや老の杖となりぬる

「五歳にして鳩車の樂みあり、七歳にして竹馬の歡びあり」と申して、七つ八つ頃までははいしごう／＼と竹馬に乗りて遊んだに、光陰矢の如く、今はハヤ老人の相となり、竹馬の頭を抜いて老の杖とすると云ふ歌の意、そこで蓮如上人は「それ人間の浮生なる相をつら／＼觀するにこの世の始中終まぼろしの如くなる一期なり」と仰せられた。

歌 長生て甲斐も渚のすて小舟

訪ふ人もなく汚やはてなん  
此世に生れては、尊も卑も身分相應の望みがあつて天晴本意を達し、人にも用ひられ世にも名を顯はしたひと思はぬものはなけれども「事興願違樂 興苦俱ナリ」思ふやふにゆかず、願の通りにならぬが、婆の堪忍士のありさまなれば、用ひらるゝは二段、却て世に損られて、一生を空しく過す人が多ひしかしながら「功名富貴若長在 漢水亦應西北流」いかばかり功名をあらはし世に用ひられ、富貴榮花思ふさまの事なりとも、高で夢幻の浮世、五十年六十年の樂しみ、いつまでも持つべき事ではなひ、殊さら婆に運を開くは後世のすてもものと聞く時は萬事

が心に適はず、思ふにならぬば却つて後の世の樂 設今生むもれ木で朽はつることも、追つけ浄土に往生して、安樂自在の身とならふものをと思ひめぐらせば、老後の思出生涯の樂しみ、是に超たる喜びはなひ

明日よりはあだに心を持つまじと  
思ひし今日もあだに暮しつ  
さて／＼今日まではうか／＼と仇に月日をおくつて居た、明日よりはキツト心を改め、精神を入れかへて……と思ふても、さて夜が明けると世事に取り紛れ、又空しく一日も立つてしまふ。

百年三萬日 一別幾千秋  
凡そ人間の壽命を百年としても、日數につもれば三萬六千日、八十の人が二萬八千八百日

たさひ百年いきても程がしれるのに「今に至りて誰か百年の形體を持つべきや我が先き人や先き今日もしらず明日もしらず」と云ふが人生の常態ではありませんか

句 うきことになれて雪間の嫁菜かな

これはすて女の詠じた句である、性質の曲んだ姑や、鬼千疋の小姑にいちぢられながら、彼方の機嫌を取り此方の意を迎へて、日暮をする有様をよんだものです、憂き艱難の中にある事は、雪の中にある嫁菜の如く、中々並みや大抵なこころではなけれども、只堪忍を唯一の護符と心得、蔭で泣いても表面はにこにこ顔で居ると云ふ意ぢや。

句 蜻蛉や飛び直しても元の枝

これは獨歩庵超波の句である、此處に志を

得ずとて彼處に走るも亦志を得ず、眼のみ高くて自身の器量知らぬものを諷諫せられたのである、一升入る徳利は一升より入らず古歌に、  
此處もうし彼處もうしと嫌ふなよ  
いづくも同じ秋の夕暮

句 二葉よりいろ／＼となる落葉かな

これは、僅か十七文字の中に、人生五十年のありさまを詠じたものである、赤ん坊の間は二葉同様である、それから小學校中學校とおい／＼勉強して、種々雑多の方面に活動しついに落葉の如く、死の關門に向ふのであるから、人間一生五十年といへば長い様なものゝ、亦一面よりみれば短いものである。

**格言** 月の満つるは虧くる爲め  
虧くるは月の満つる爲め

これはポーブ氏の云はれた格言です兎角世の中の人は、一事一物皆幸福であれと祈りますが、退いて考へてみますると、失望、不満に陥るのが却つて其人に取つては、遠大の理想を追及する動機となり、大なる満足を得るの端緒ともなれば、寧幸福と云はねばならぬ人間萬事塞翁が馬で、はかりしられぬは我等の運命であります。

**格言** 君子は財を惜む之を用ゆるに道あればなり。

シヨン、ラスキンと云ふは英國著名の文豪にして、且つ慈善家改革家道德家として全世界にかくれなき人物である、ラスキンの父の

遺産は約百六十萬圓の巨額に達したるも、自ら用いし所は僅かに其十二分の一に過ぎずして、餘は皆公共の博物館美術學校圖書館等を起し貧民救護所を設け、貧家の子弟に學資を投じ自ら慈善事業を經營し、産業組合の主義によつて資本と勞働との調和をはからん爲め十四萬圓の資金を投するなど、其嘉言善行あけて算ふべからず、財を用ふること、ラスキンの如くにしてこそ、初めて、君子は財を惜む之を用ゆるに道あればなりと云ふ格言にかなふものであります。

**格言** 借金は人生の災難なり

借金をすれば、己れの權力が減じ、幅がきかす、頭があがらなくなる、つまり獨立を失ふに至る、其上に、借金の穴を埋めん爲に、

色々の苦慮をせねばならぬ、若し百方工夫を運らしても方法の立たざる場合には、約束を破り廉耻を缺き、面目を失ひ、世間一般より擯斥せらるゝに至る、是れ皆奢侈の結果である、故に古來奢の字に就きて俗解を下し、奢るものは久しからず、離して見れば一人者といふ、其意味は、奢の字を解剖すれば一人者となる、一人者とは、世間の廣きも、誰れも皆其人に近づくを嫌ひ、社會より擯斥せらるゝ故に、結局孤立の態となり、一人にて世を渡る様になるをいふたのである。

**俗語** 十歳で神童十五歳で才子

二十歳すぐれば普通の人が六つか七つの子供、幼稚園から小学校へうつりたばかり位の小供で居ながら、お父さん

の代りに手紙をかいたところが、字と云ひ文と云ひ、成年者も及ばぬほど上手に出来たといつて、人をびつくりさせたり、或は十歳が十一歳で居ながら、論語や孟子の講釋を苦もなくやつてのけて、老先生の膽玉を冷させたとかいつた處の神童が、成長の後に至つて普通の人と同じくなり、若しくはそれより一層つまらないものになつて居ることは、世間に澤山にあるならひちや、百人の中から一人、千人の中から十人、ゑらい人が出れば、まづ上出来なのです。

**譬喻** 瀛車旅行

世の中は丁度瀛車に乗つて旅行するやうなもので、例へば新橋の停車場から、大阪なり京都なりに行かうとして、どうも新橋では人

が澤山で窮屈である、併し少し辛抱して居る中には幾らか降りて楽になるだらうと思つて居ると、平沼邊で少しは降りる人があるが、又乗る者があるから矢張窮屈である、事に依つては乗る方が餘計なことがある、國府津へ行つても駄目だ、箱根を越えたら少しは楽になるだらうと思つて居ると尙又乗る人がある沼津でどうだらう矢張いけない、静岡ではどうかまだ楽にはなれない、丁度人間の一生が此通りで、今年に實に苦しかったけれども来年はもう少し楽になるだらう、来年は楽になるだらうと思つて居る、次ぎの停車場に行つたら少しは人が減るだらう、来年は楽になるだらうと言つて、漸く楽になつたと思ふ時分には自分の目的地大阪なり、京都なりになつ

てもう、降りねばならぬ、今年に斯うでも来年は、来年はと言つて居て、漸く楽になつた時分はもう片足を棺桶に入れて居るのである

四人の妻

富有なる人が四人の妻をもつて居たと云ふ御諭が雜阿含經の中に示されてある、第一の婦人は夫の最も大事に最も寵愛する所で行住座臥暫くも側を離さず、衣服飲食は勿論器具粧飾の品に至るまで、彼が意を満すことに餘念なく日夜擁護して居た、第二の婦人は、最初に手に入るゝに當りて大に苦心せしゆへ、其重んずることは決して第一の婦人に譲らぬのであるが、さりとて、朝夕我側を離さず置きと云ふ都合にはゆかぬ、彼れは往々其夫に遠らんとするの傾向あれど、夫は身も心も

彼れにうちこみていつも垂涎三尺なのである第三の婦人は、求むるに苦勞を用ゐざりしと同時に愛情も亦甚しからず、時々會合を喜ぶも敢て重んずることはなかつた、第四の婦人は妻たるの務めをつくして最も懇切に世話をしてくれるなれど、夫は一向之を顧みず、三度の食事さる碌々與ゑずに放棄しておる云ふの有様である、斯くの如き四人の妻を持つて居た夫が病にかゝり死に瀕するの悲境に陥りたにつき、四人の中、せめて一人なりとも冥途の旅の道連れにせうと思ひ、四人の妻を集めて之を促した、第一の婦人曰く、妾は卿と生を俱とするを盟ひたれども死を俱にするの約をなさざりしと、第二の婦人曰く、卿の最も愛し玉ひて日夜側をも離し玉はぬ婦人

すら随はず、況んや離合常なき我等に於おや又卿が妾を求むるに心肝を摧きたまいたるもソハ卿自身が餘りに貪欲深くして強いて妾を求め玉ひたるのみ、妾の喜びて隨ひたるに非ずと云ふ、第三の婦人曰く、淺からざりし因縁であるからは冥土の御伴も致したけれども遠き未來は心に任かせず、せめて郊外までは見送りなすべしと云ふ、第四の婦人曰く、妾と卿と因縁淺からず、無始以來の關係にあれば、生きて偕老の契りを結びたるもの、いかに死して同穴の約に背かん、必ず卿の至る處に至るべし、以上にて釋尊の説話は終りてある、これは唯女子の薄情を誡めたるにあらす、第一の婦人と喩たるは我等の身體である身體は命終るとき隨ひ來らず、焼けば灰とな

り埋めば土となる。第二の婦人と喩たるは、金銀財寶である、身を亡ぼし命を失はんとする程に全力を傾けて求めたるなれど「かねてたのみおきつる妻子も財寶も我身には一つもあひそうことなく」の有様である、第三の婦人とは、親類眷屬のことで、野邊の送りはしてくれても冥土の旅の道連にはならぬのである、第四の婦人とは、心である、我等は最も重んずべき心の養を放棄して徒らに身體や金錢に耽愛することを誠めたまひたることである。

**譬論** 塞苦鳥

天竺の雪山に塞苦鳥と云ふ鳥が居りて、晝の間は暖かき天氣に浮かれ出てうか／＼と其日を送り、日暮になれば寒さ身にしてみ、終

日遊惰に流れたのを悔ひ、明日こそは必ず巢を造らねばならぬ、夜明造巢々々々泣いて悲んで居る、然るに夜が明けて四方の景色が面白くなりてくる、前夜非常に困難せしことを忘れて、今日も亦彼の林に入りては美しき花に戯れ、この野に出で、は軟かなる草の間に遊びまわりて、いつしか時を費してうか／＼と其日も暮しはて、夜になれば亦寒さにせめられて、後悔の涙禁じ難く、今度こそは、巢を造らねばならぬ、夜明造巢々々々泣いて、能く人間の状況を描き寫してある我々人生のありさまをつく／＼考へてみることも、能く毎日、塞苦鳥の日暮をくりかへすばかりである。

**譬論** 細胞

人間の社會は一の生物の如きもので其中に住する我々は細胞のやうなものであります、人間の身體は全部細胞から成り立つておる、眼の細胞は常に見ることを掌り、耳の細胞は常に聞くことを司り、乃至、手の細胞は採り足の細胞は歩むことを司りて分業法を行ふておる、されど各細胞は決して孤立して働いて居るのではない、五官も内臓も協同一致して働く所から一の社會が完全に成立するのであります、政府の要路に立つ人々は社會の頭腦の形成する細胞の如く地方官は神經の如くでありませう、警官が悪漢を退治するは白血球が全身を遊回して微菌を食ふが如く農夫が食物を生産するは胃腸が身體に滋養分

を供給する如くである、人身に於て胃も腸も眼も鼻も手も足も、全體の爲めに寄與し貢獻するが如く、社會の細胞たる我等は、社會の爲めに寄與し貢獻する所がなくはなりません。

**譬論** 八右衛門と人生の目的

或人が八右衛門と申す男に向ふて、人間は何の爲めに此世に生れたのちや、世間のものを見なされ、茶碗は茶を飲む爲めに生れ、鐵瓶は湯を沸す爲めに生れ、稻は米を實る爲めに生れ、櫻は花を咲かす爲めに生れ、鶏は時を告ぐる爲め、犬は夜を守り、猫は鼠を捕ふる爲めに生れたのである、人間は何の爲めに此世に生れたのちやと問ひましたら、八右衛門は暫く考へて、人間は食ふたり寝たりし

て、不平を言ひに生れたのぢやと申したそう  
です、人生の目的の何たるに心つかずして、  
空しく一生涯を遂る人は、八右衛門の言ふ通  
り、食ふたり寝たりして、其上不平を言ふの  
みが藝である、なんと御互に耻けしいこと  
はありませぬか。

雑録 閑通禪師の教訓

閑通禪師と云ふ人が云ふておかれたことが  
ある、

それ人この世にすみけるは客に来るがご  
とし、客とおもへば世話もなし、朝夕心  
に合はぬ食物でも客なれば御馳走なりと  
褒めて食ふべし、夏の暑さ冬の寒さも客  
なれば無禮なる形貌もならず、孫子 兄  
弟も相客なれば、挨拶よくて、暇まうす

べし、  
父母によばれてかりに客に来て  
心のこさずかへるふるさと

雑録 人生の八好

- 一 清貧は常に楽しく濁富は憂多し、房  
屋は高堂にあらず漏れざれば便ち好  
し
- 二 衣服は綾羅にあらず和暖なれば便ち  
好し
- 三 飲食は珍饈にあらず一飽便ち好し
- 四 女を娶る顔色にあらず賢徳便ち好し
- 五 親族は新舊を擇ばず往來便ち好し
- 六 隣里は高低にあらず和睦便ち好し
- 七 朋友は酒色にあらず扶持すれば便ち

好し  
八 官人は大小にあらず清正なれば便ち  
好し

シンゾクニタイ 眞俗二諦 【術語】

眞は眞實俗は世俗、諦とは審實不謬の義なり、眞諦  
とは一性本質の理を彰はし、俗諦とは一性緣起の事を  
顯はす、信心を得て往生の業事成辦するを眞諦と云  
ひ一期存生の間公私百般の業務を忠實につとむるを俗  
諦と云ふ、

観月と燈火

八月十五夜の月見には、ランプや行燈は邪  
魔になるゆへ、燈火をけして酒を飲んだり詩  
を書いたり歌を詠んだりして遊んで居たが、  
餘程夜も閑たゆへ、我家へ歸る時に提燈とも  
して出かけた一字を書たり、本を讀んだりす  
るのでさへ、燈火なしに出来る月夜ぢや、道

シンゾクニタイ

をあるくに提燈はいらぬでなぬか、「イヤそ  
うちや御座りませぬ、月を詠めて樂むときは  
行燈は邪魔ぢやが、モウ月見はすんで歸るの  
ぢやで、夜更て無提燈であるいは咎められ  
ては仕方はないで提燈さげて歸ります」と云  
ふた、此味がいたゞけるか、内心の閑亭  
で御慈悲の月を観るときには、雜行雜修のラ  
ンプ行燈が第一番の障ぢやゆへ、こども此機  
は間に合はぬ、永不成佛と燈火ふき消し、餘  
念まじへす一筋に、助け玉へたのむが信心  
其信心を内心にたくわへ、其日々々の世渡は  
王法を守り仁義にそむかず、其村其國の禮式  
にしたがひ、五倫の道を正しくして、憍慢の  
山へのぼらず、邪見の穴に陥らず、此世一生  
を送るのが、實の念佛行者の心得方ぢや、月

の光ではたらぬゆへ提燈ともしてかへるので  
はなれ、又提燈ともせば月の光りが見るゆ様  
になるのではなれ、提燈持たは世間の王法、  
南無阿彌陀佛で不足なゆへ、神や佛をたのむ  
のなら、これ云ふまでもなれ難行ぢやが、六  
字一つに腹がふくれて、後生は安堵の其上よ  
り、神へ参れとあることなら、たこひ参詣は  
致そうとも、それは世間の大法ゆへ、提燈持  
てあるくも同様、これが往生のさわばにはな  
らぬ程に、この條理をよく〜聴聞を致し、  
王法を守れとおほせられるゆへ、現世を祈り  
ても大事ないと、世俗の風儀を安心に紛ら  
されぬよう又安心の一本鎗で、王法には背こ  
うが、村法にはたがはうが、氣隨偏固になら  
ぬやう、眞俗二諦の御宗意を大切に聴聞せら

れよ、  
澄修律師の道心  
御室の仁和寺澄修律師は如法堅固なる御僧  
にして、女の炊いたものは食はぬと云ふ位な  
方でありた、或時女の汲んだ茶をうつかりと  
手に取り、ハット驚いて、これはつまらぬこ  
とをした、もう取りかへしはならぬ、せめて  
佛祖への申譯にと、右の腕首をスツパリと切  
り落された、處が其夜枕の元に弘法大師があ  
らはれて、未代に於て道心堅固なること奇特  
の至りなり、さりながら片腕がなくては佛道  
修行の便利もわるからう、之によりて我が手  
を汝に授けるぞよと云はしやると思ふなり、  
澄修律師の手は元の如くつげてありた、併し  
ながら左の手は無の我が手、右の手は弘法大

師に貰ふた手でありた、處か字を書いてみる  
と、弘法大師の御手跡と一寸もかわらぬ立派  
な文字を書かれたとある、これ澄修律師は弘  
法大師から手を貰ふたからのこと今我等が往  
生の正因たる佛種は如來回向のもらいものぢ  
やで、邪見な心の中からも懺悔の稱名が喜ば  
れ驕慢に上らず邪見にながれず、この世はま  
ごこの人となり未來のまごこの佛となり、現  
當二世の幸福の得らるゝのは、全く如來回向  
の御信心のはたらきと申さねばなりませぬ。  
貧しき老婦人  
英國の一大邑に貧しき婦人がありまして、  
重き病にかゝること二十年、遂に盲目となり  
しかも齡百零五と云ふ老境に達しました、同  
邑に備氏と云ふ富豪がありて、度々貧民に施

をせられましたので、この貧しき老婦人も其  
救恤をしば〜蒙つて居りました、或日備氏  
其友と共にこの老婦人を訪ひ、其家に入らう  
として、「御前はまた命があるか」と尋ねます  
と、中より答ふるやう、「上帝の恩恵によつて  
命が保つております」と云ふた、すると備氏  
は、「上帝汝の命を此世に往すること斯の如  
く久しからしめ、此の如く貧しからしめ、此  
の如く病ましめ、此の如く替せしむるのには、  
將來に於て天上の福をうくる、亦斯の如く夥  
からしめん爲めであらう」と云ふた、之を聞  
いて老婦人答ふるやう、「ア、君未だ曉らぬの  
であるか、そも〜教會中、二大事因縁あつ  
て君と我と命を此世に存するのである、其一  
は教會の爲めに祈禱を務むる、其一は教會の

爲めに善を行ふを務むる、上帝我をして生きて祈禱せしめ、君をして生きて善を行はしむもし私がケ様に長命して祈成することがなかつたなら君の善を行ふも亦多からず」と云ふたので、備氏及び其友は大に感じ入り、容を正して申すやう、「ア、老婦人よ、汝の祈禱の教會に益あること、誠に我が施しの及ぶ所にあらず」と云ふて賞賛せられたとある、この老婦人の心は未來の希望を抱きつゝ、現世徳義を務むるの責任を重んじて、貧苦困頓の中にあつて、猶一日も生命を保つて祈禱行善をなさんと欲するものである、基督教徒ですらケ様なる殊勝な心がけの人があるのですが、眞俗二諦を標榜する我真宗の念佛行者も亦この老婦人の如くならねばならぬ譯ではありま

すまいか、ドイカ諸君、其の會の王法を額にあてよ、佛法を深く内心にたくわへよ、  
 御垂訓を服膺して、現當二世の幸福をはかられたいことであります。  
 江碧鳥愈白 山青花欲燃  
 みごりの水邊に白き鳥がおりておると、鳥の白きゆへ木のみごりは、一入まさりて見へ松の立ちならんでおる中の花や紅葉はひときわまさりて見へる、これはみごりの水と白き鳥、青き山と赤き花紅葉、相依りたものは離れぬものよりは互に面白き氣色をあらはし合ふと云ふ例である、今眞俗二諦も其如くで、互により添ふて相離れぬ、そこが二諦相依と申すもので、眞諦ひとり立ちでなく俗諦

ひとりだちでなく、互にあひ依りあひ助けて現當二世の幸福を全ふするのが今家の特色であります。

漏らさじの廣き誓のあればとて

たくみてつくる罪はゆるさじ

此歌は別に講釋をせずとも能くわかる、我が眞宗の法門には正因門と行狀門との二つがありて、善もほしからず悪もおそれなしこの教語は、正因門について他力の妙用をあらはしたものの、行狀門にありては、成るべく悪を恐れねばならぬ、善心を養成せねばならぬ、業ありとも毒食ふべからず、東京へ行く人と長崎へ行く人は同道は出来ぬ、西と東と向きが違ふ三惡道の東向にてありた身が、西方往生の西向きなられた上からは、佛の

御心に同して、悪を遠け善に進み、慈善の行を修せられたならば、これに上越す報恩行はあるまい。

あはれみをもものにほごす心より

外に佛のすがたやはある

ありそうでさてなきものは金持と

人にまこと、他方信心

この歌は、誠によく社會の裡面をあばき出して居る、此家は店も立派であるし定めて金満家であろうと、内々探つてみるに存外借金が多い位で金持は少なひものぢや、又、同情の深いとか慈悲の篤いとか云ふ人も存外稀れなもので

みな人は皮になさけをかけにけり

骨になりては問ふ人もなし



とは昔の話で、今は、  
 みな人は金になさけをかけにけり  
 貧乏すれば問ふ人もなし  
 さ云ふ風情で、かはり易いが人心、なさけのある人は少いものぢや、又朝夕御法座へ出て居るで、あの人の他力信心の行人であろうと、篤と領解を探りて見ると、なさけなや、疑惑の雲がかゝり往生一定の月が見へ兼て、他力信心を決得したものは少なひと、ありそうでなきものばかりを三種あげたのが、上に掲げた道歌ぢや、現世に於ては前の二つが入用、後生さふみ出せば第三番目の他力信心がなければならぬのぢや、前の二つが俗諦門、後の一つが真諦門。  
 磯までは海女も笠きる時雨かな

海女と云ふは水の中へ飛び込んで鮑などを取るものであるから、朝から晩まで水の中を住居場にして居るもので磯邊に行けば又水の中へ入つてぬれる身體であるから、時雨が降つて来ても何の厭ひもない筈だが、それでも磯までは笠を着て行く、今御座の我々も、命終り次第には佛果圓滿のさとりをひらく身なれども、娑婆逗留の間は善をばげみ悪をたしなみ、俗諦門のつとめは十分につくさねばならませぬ。  
 シタクワンギ 心多歡喜 【備語】  
 現生十益の隨一なり、信心決定の人には心に歡喜多し、  
 信者のよろこび  
 或信者は斯う云ふて喜ばれた、これまで若い者や婢僕の者が寒い朝は早く起ぬので困り

切り聲をからして呼び立て、それでもおきませぬと朝から腹が立つて困りました、それが難有いことには近頃はごうも誠に樂に／＼なりました、私が佛様の御慈悲を頂かせてもろうて御念佛喜ぶ身の上させて頂いてからと云ふものは、家内のものが自づと御念佛喜ぶやうになり、私が早朝まだ薄暗い時分にまづ起き出で、思はず知らず大聲で南無阿彌陀佛々々々々と稱へますと、若い者も家内の者も下女下男まで聲をきくなり我も／＼もいづれも南無阿彌陀佛々々々々と直に飛びおきてくれまして、氣もせい／＼と一同打揃ひ佛前で勤行すると云ふ調子で、これほど樂なことはない、不思議なことはない、實に御念佛ほど大きい力のあるものはなぬ、うれしいこと

す、難有いことですよ、にこ／＼喜んで話されたが、これなどが、信心決定の人の世渡りの有様であつて、信仰の生涯とも云ふべく心多歡喜の利益とも云ふべきことであろう。  
 因縁 ましての翁  
 中世江州にましての翁と云ふ一人の乞食がありました、其頃奈良に大徳の出家ありて、日夜讀經し、西方往生を心かけておらるゝ、或夜の夢に春日明神あらはれて、汝がねて西方の往生を欣求せり眞實淨土にまいりたくば、江州にましての翁と云ふ大徳あり、これに逢ふて往生の素懷をよけよとの御告を蒙りた、そこで今の出家は夢さめた後、大に喜び、翌日旅装をとゝのへて江州にいたり、ましての翁と云ふ大徳を尋ねられたが、誰も知りておる

ものかなる、國中を尋ねたれども知れぬものであるから、終に尋ねあぐんで御座ると、一人の男の申すやう、此山奥に一人の乞食が居る、其乞食のことをまじしての翁と云ふておるが、あれのことではなぬかと告げてくれた、出家は聊か不審に思へど兎も角行いてみよう、態々尋ねて行かると果して乞食が居る一泊を乞はれたれば早速に承知してくれた、さて出家は一泊して乞食の様子をみると、別に西方の行業を修する相たも見えず、さりとて讀經するでもなく、筵の上に横に寝て南無阿彌陀佛々々々と念佛するばかりである、それであまり不審ゆへ、翌朝乞食に向ひ、御身は如何なる行をするやと問へば、行はなしと答ふ、出家は夢の次第を語り隠すことなか

れと云ふと、乞食の答に、我に一の行あり、則ちましてと云ふことなり、飢ゑたる時は餓鬼の苦しきことを思ひやりてましてと云ふ、暑き時は焦熱地獄、寒きときは八寒地獄、いよく悪道をおそれて、ましてと念佛となへておりますと申したれば、出家は涙をながして大に喜ばれたと云ふことが、長明の發心集に出ております。

三毒煩惱の隨一なり、遠逆の境に於て忿怒を起すを云ふ

因縁 道光阿闍梨

叡山の道光阿闍梨は、法華經一萬部を誦んで、未來は淨土往生の素懷を遂げたいとて日頃の願心、そこで或時夢の中に、結構な宮殿樓閣がかまへてある、これは結構な宮殿や

誰がこの宮殿に生るゝやらと、つくづく詠めて御座りたれば、一人の出家があらはれて、「これ道光、この宮殿は他人の生るゝのではなぬ、汝が日頃法華經を誦する、其功德によりて、命終ればこの宮殿に生るゝのぢや」と御告なされたれば、道光はうれし涙にむせんで居らるゝと、其處へ豆粒ほどの火が飛ひ來りて、忽ち其宮殿を焼いて仕舞ふた、そこで道光はびつくりして、コハ何事と云ふぞ、私が生るゝ宮殿が、今の火で焼けて仕舞ふたこれは何故と云ふぞと彼の出家に尋ねられたれば「されば道光よく謹めよ、法華經誦の功德がはや宮殿と現じて、生るゝ約束はきまりてあれども、汝は常々瞋恚の強き僻ありて、この宮殿の焼けた、火の粉は、汝が常

に起す瞋恚の煩惱なり、一念の瞋恚で法華經の功德を焼いて仕舞ふた」と御物語りなされた、それゆへ諸善萬行動ある時には、貪欲瞋恚の煩惱は十分に慎まねばなりません。

三ノ目 眞如堂 【寺名】

洛北神樂岡の東にあり、天臺宗鈴聲山極樂寺と號す、開山戒算上人、永觀二年白河女院の離宮を請ふて寺となし、慈覺大師所作の彌陀の像を安んず、

歌 彌陀たのむ人は雨夜の月なれや

雲はれねども西へこそゆけ、これは眞如堂の御本尊たる阿彌陀如來の御歌なりとて、玉葉集の中に出てあります、この歌は、一人の女中がこの御堂に通夜をいたし、超世の悲願のたのもしさ、殊に私一人の爲めに、別段三十五の願を御誓ひ下されて、女人成佛と呼んで下さるゝ、この御恩は海と

も山ども喩へがたなき大恩、難有う存じます  
 しかしあまり淺間しくて、妄念煩惱が起りま  
 して、御恩の程もわすれ勝ち、こんなことで  
 は往生如何と、時々往生を案じますと申上た  
 ら、御本尊の阿彌陀如來、御扉をひらかせら  
 れ、妙なる御聲にて、この詠歌を御告げなさ  
 れたごある、これで各々方も不審を晴らされ  
 よ、雲晴れてこそとありたら、我々は往生は  
 出来まいに、雲晴れねどもとは難有い、慾し  
 や惜しやの雨は降る、憎くや可愛やの雲は出  
 る、其雨をといめて来い、其雲を晴らして来  
 いとは玉はぬ、其處を正信偈には、已能離  
 破無明闇乃至信心天と仰せられてある。

歌

心だに立てし誓にかなひなば

世のいとなみは兎にも角にも

是ば眞如堂の如來の御歌である、此意は第  
 十八願は、頼む者を助け玉はんと誓玉へるを  
 立し誓と詠じ玉ふ、衆生の心が此御本願に叶  
 ふやうに自力の機情をすて、雜行のませごと  
 を止めて、すなをに信じ奉りなば、此世のい  
 となみには、いかやうなる淺間しき業をなし  
 て暮すとも、世渡のことは兎も角も佛の方に  
 は御かまいなしと云ふ意、これもく命を取  
 つて業とする屠活の下類も、刹那に成佛する  
 と教へたまふ所である。

蜀山人の觀楓

或年の秋、蜀山人が眞如堂へ觀楓に出かけ

られたが、満山の紅葉を見て感じ入り

あゝ酔ふた斯う酔ふ(紅葉)てこそもろもろなれ

眞實眞如堂も云はれぬ

と口吟まれたごある。

因縁 眞如堂の阿彌陀如來

昔、京都に一人の尼ありて、東山眞如堂へ  
 日參をして居た、或日雨がふりついで大水  
 が出たゆへ、其日は一日休まうと思ひ懈怠を  
 した、處が其夜夢ともなく幻ともなく、眞如  
 堂の阿彌陀如來は、尼の枕邊に立ちたまひ、

日に千度我はかように如何なれば

日に一度は如何に苦しき

と告げ玉ふたごある、此意はそちは少し水が  
 出たごてハヤおれを見捨るか、我は少しの水  
 どころではなぬ、貪欲の水の川やら瞋恚の火  
 の川やら、其中も厭はず千度萬度來りて汝を  
 守るぞやごの思召

シンボウ

心法

【術語】

集起の故に心と名とありて、一切善惡の所作は皆心に  
 集め又心より起す、華嚴經に「心如工畫師種種々五蘊」

談話 鬼の假面と阿多福の假面

或人、慰みに假面を彫刻す、一日友人來り  
 て問ふて曰く、貴方の顔色よろしからず、何  
 か怒り玉ふことなきやと、問はれたれど一向  
 合點ゆかず、別段腹の立つことはなると答へ  
 た、其後半半ばかりを経て又來訪す、其時も  
 亦假面を彫刻しおれり、依て先の事を思ひ出  
 し、此頃私の顔色は如何と問へば、彼の人打  
 ち笑ふて、至つて柔和で前に見た顔色とは大  
 きな違ひと云はれた、其人初めて心つき、我  
 先には鬼の假面を彫刻し居れり、此面を作る  
 ときは必ず齒をくひしはり眼を怒らせなご、  
 心にさまぐ工夫して作る、故に其心我が顔

色にあらはれ怒氣を含みし相をあらはし、こ  
みゆる、今日は阿多福の面をつくる、それゆ  
へ心にも愛敬を思ふて居るゆへ、顔色自ら  
柔和になつたものと見へる、さるにても心は  
大事のものなりと物語られたとある、心を正  
しくもてば、恐ろしい顔も柔和になり、下品  
な姿も上品になる。

歌詠 姿こそ深山かくれの朽木なれ

心は花になさばなりなん

人間と云ふは姿形は兎も角も心一つが何  
より大切であります、然るに手足が片輪であ  
るとか、又指一本人并みでない親もなげき  
子もなげきますが、心が人に及ばぬと云ふて  
歎く人は至つて稀であります、姿形は宿業  
のあらはれゆへ、いくら歎きましても詮方は

ありませんが、心一つは直せば直るものであ  
るから、心は花になさばなりなん、十二分に  
これが修養をつまねばなりません、又古來人  
の心の賢愚善悪と云ふことは傳記の上にも書  
きますが形の善悪は書きませぬ、又人間の價  
値も形の上でつくものではない、形の上で相  
場をきめるのは鳥獸の類で、孔雀、金鶏鳥、  
金魚、たしかに其一例である、しかし人間に  
も容貌の美しいのや又は聲のよいのでもはや  
さるゝものはないてはなれども、それは俳  
優、義太夫、賤業婦の類ですから、あまり好  
むことではありませぬ、人は眉目より心が大  
事と云ふことは動かすべからざる定義である  
歌詠 白露のおのがすがたをそのまゝに  
もみちにおけば紅の玉

蓮の葉などにおける露は白いけれども、そ  
れを其儘紅葉におけば赤い玉となるやうなも  
ので、我々の心もその如く、佛を拜む心と人  
を殺す心と、元來同一ぢやけれども、その重  
き處が違ふからして、善ともなり悪ともなる  
のぢや、故に御互に同くは善い處において人  
の爲めになり、世の爲めになりて、世間より  
は敬はれ、他人よりは褒めらるゝやうにする  
のが肝要であります。

譬喩 三五の明月

三五の明月を詠じた句に、

花ならばさぐりても見ん今日の月

明月や座頭の妻の泣く夜かな

明月をどつてくれらと泣く子かな

と、斯う三句ならべてみると、第一句は盲人

が花ならば探りても見るものを、目なし鳥の  
哀しさには今日の明月を見ることが出来ぬと  
云ふ意味で、盲人が觀月をする風流に一種の  
悲哀が現はれて居る、次の句は絶對に悲痛の  
句で一向に風韻がない、又第三の句は明月を  
玩弄物と心得たる小兒の有様で一種の滑稽が  
添へてある、さて中秋三五の明月は何人が見  
ても同一であるべき筈であるが、座頭の妻よ  
り見れば涙の種子、小兒より見れば玩弄物と  
なる、月に二様の別があるではない、見る人  
の心の幻相に差別があるのである、心さへな  
くは憂喜苦樂はない、  
寒熱の地獄にかよう茶柄杓も  
心なければ苦しみなし  
といへる如くぢや。

論 一人の僧

山奥にある寺の別房に鬼が住んで住僧をなやますと云ふので、皆房をすて逃げて出て、後には住するものがなかつた、或時一人の僧が来て此房に住まふと云ふ、此房に鬼ありといへば、何ほどの事かあらん我れ彼を退治すべしとて房に住みました、又一人の僧が此房に鬼があるときいて、それを退治せうと思ふて房に至り戸を開いて入らうとしました、前に來りし僧、闇夜の事であるから、スハヤ件の鬼よと驚き戸をおさへて入れじと防ぐ、後に來りし僧は内に鬼ありて已れを拒むところゑ、しきりに入らんと争ふに、終に戸をしやぶり、双方こぶしを以て打合ひ組み合ひ夜が漸くあけましたから互に顔を見れば故舊

同學の僧であつたので、互におどろきあきれ人多く集まり見て笑ふ事限なかつたとある、これは智度論の中に出ておる話である、謙徳公家集に、

わがためにうごき心のつくからにかつは心の鬼と見しなり

新六帖に

かへれみの浮名をかくす方のなし

心の鬼につくる身なれば

世の妖怪は大抵此類にして心より出るもので妖怪の巨魁は我人の心、妖怪の巢窟も亦此心であります。

思ひ内であれば色外にあらはる

心に怒りあるときは額に青筋が立ち、心に悲しみある時は目に涙をうかび、心に悦びあ

る時は頬に笑回が入り、心におかしみあるときは笑ひ顔になる、心は本なり形は末なり、それで「思ひ内であれば色外にあらはる」と云ふたものちや目に涙が出て心が悲ふなるにあらず、額に青筋が立て後に腹の立つにあらず何事も心が先きなので、其心に思ふところが皆形にあらはるゝものである、

叢のかげに隠れて住むとすれど

おのがすがたになく虫の聲

忍ぶれど色に出にけり我が戀は

ものや思ふと人の問ふまで

これらの和歌も皆その意なのであらうと思ふ

心の鏡

心は鏡の如くすべし、鏡は人來りて向へは其影うつる、立のけは其影をどめず、怒る

も恨むも、影をどめぬやうにせば心やすらかなるべし、さきにはまはり／＼して自ら苦しむるは無下に愚かなり只常に誠を専らにすべし、誠と云ふもの我にあれば、身は心に引たてられて、せんと思ふことのならぬはなし、誠とは我が胸に在す神明なり、人心はじめは澄める月の如くなれども迷の雲におほはされ、身を終るまでさくらぬは口おしからずや歌に、

道しかればなおたのむかな偽りを

たいす誠の神にまかせて

日の本は神の御國ときしより

いますか如くたのむとぞ知れ

九重にあまれる神のかげうけて

うつす鏡は今もくもらじ

すむ月の影をうつして五十鈴川  
にこらぬ世にもかへる浪かな  
いにしへに神の御かげのうつりしや  
今もくもらぬ鏡なるらむ(みまこ草)

シシラン 親鸞(人名)

眞宗の開山なり、承安三年四月一日を以て京師に生る  
九歳にして出家し、専ら大小顯密の教義を學び、後、  
念佛門に入り關東北國に行化す、五十二歳にして淨土  
眞宗を開き、九十歳にして入寂す、時に弘長二年霜月  
二十八日なり、爾後六百有餘年を経て、明治九年十一  
月、靈驗見眞大師を賜ふ、

因縁 綽空命名の由来

綽空と云ふ御名前は、親鸞聖人吉水入室の  
時に法然聖人より賜はられたのである、これ  
は法然聖人が他力本願の趣をのべ玉ふなり  
一言下に信心決定せられたゆへ法然聖人は非  
常に感服なされて仰せらるゝやう、貴僧の如

く速かに自力をすて、他力に入らたもの、未  
だ日本に其例なし、唐の道綽禪師は曇鸞大師  
の石碑の前で碑文を讀みて、一見大悟、其場  
で涅槃宗の珠數を切りて念佛門に歸入せられ  
たとき、及ぶ、然れば即座に自力をすて、他  
方に歸した人は、唐では道綽禪師、我朝では  
貴僧、一天四海に唯二人、これによりて道綽  
の綽の字と源空の空の字とをまいらせ、以後  
綽空と名乗りたまへど、御名を御下げなされ  
たとある、してみれば綽空と云ふ御名前は、  
「たちどころに他力攝生の旨趣を受得せられ」  
たる、好箇の紀念であります。

因縁 大満讀誦の行

親鸞聖人が大満讀誦の行を御つとめ遊ばし  
たは二十六歳の春の事である、これは叡山開  
下さるとは生前の大慶なりと速に承諾せら  
れた、さて其行と云ふは、一日に一粒の米を  
かみ、百日に百粒の米を食物として、法華經  
を讀みながら叡山の谷々を巡はるのである、  
この難行を聖人は進んで御受なされ、墨の衣  
の裳をか、げ脚半甲掛に草鞋をはきしめ、右  
には錫杖、左には珠數、袂には百粒の米を入  
れ、十七谷の入り口より妙法蓮華經序品第一  
と讀みながら回はり初められのである、三十  
日四十日と日を重ねるについて骨と皮とに身  
はやつれたまふ、慈鎮和尚は其苦痛の程をお  
もひやりて、聖人が入谷初門の日より板の間  
に荒筵をひいて其上に座禪をなし、無事に此  
行の成就するやうに祈りてござりたいよく  
今日で満期と云ふ日に、御弟子十四五人を谷

關以來、當時までは四百有餘年の長日月を経  
れども、傳教大師の外にこの行をつとめたも  
のは一人もなるのである左様なる難行を我が  
聖人の御勤めになりたご云ふは、賢を嫉む大  
衆方の劣情より起りたごで、範宴僧都は非  
凡の高僧文珠の化身とも云ふべきことゆへ、  
大満の行をつとめてもらいたい、これが大衆  
一同よりの願でござると慈鎮和尚の前へ願ふ  
て出たのは、陽に聖人を賞讃するが如く見せ  
て、其實は之を機會として亡き人の數に入れ  
ようご云ふ奸策である、慈鎮和尚も之れはよ  
く御存知のことなれども、表面は道理ある願  
ゆへに、無理に斥けたまふこともならず、其  
趣を聖人に御話になると、聖人の御答へな  
さるゝやう、それ程の大行を拙僧へ仰せつけ

々へ迎ひに御使なされた、範宴坊はいづくにぞと、あちらこちらと尋ねられたら、樹木の間にたおれてござる、早速駕に乗せて大乗院へかきつけ、行法満足の範宴僧都只今御歸山に候ふと、玄關より呼ぶ聲をきくなり、慈鎮和尚は飛んで出て、種々に介抱せられたが、療養其功を奏し、ヤ、元氣が復するなり、バツチリ兩眼を開かせられ、「ア、御師匠様御懐かしうござります」と、挨拶の詞の下に取あへす。

身命をすて、修行をしたれども

見難きものは無爲の佛性

と御詠歌をあそばした、百日百夜に油断なく肝膽くだいてつとめましたが、中々真如の月は拜まれませぬとのころ、其時慈鎮和尚の

御返歌に、

釋迦は去り彌勒の世には程遠し

時は末代、機は下根なり

これが天満の行の概畧である。

興の御書御製作

「昨日殿にて座主の御坊入らせ玉ひ法門など仰せかけ候こと苦しからず候、餓鬼は水を火と見候自力根性の他力を知らぬがあらはれに候乃至向後も座主など入らせたまふ所、逃げ歸らせたまふべく候」とは世に名高き「興の御書」であるが、これを御製作について一條の物語りがある、法然聖人が月輪禪定殿下の爲めに御製作になりた選擇集が、いつとなく諸宗の學者方の御耳に入り、一場の物議を惹き起したのである、聖道門を難行難行と貶し

め浄土門を易行正行とはほり、諸神諸佛を聞いて彌陀一佛に歸せしむるは自讃毀他の野心より出たものである、それに一天萬乗の君も迷はされ月卿雲客も欺かれてござるから、先づ第一に兼實公の目を醒まし、それから天皇陛下に奏聞するがよからうと云ふので、元久二年閏七月二十七日に、毘沙門堂の明禪法印、禪林寺の淨遍僧都、高野山の明遍僧都、叡山の眞性僧正、三井寺の公胤僧正、梅尾の明惠上人の六人の學者方が九條殿下へ詰りかけ、法然坊と議論研究をする様にと、願ひ出でられた、殿下は殊の外に聖人へ歸依してござるから、ごいかしてこの出來事も波風の立たぬ様にと思召し、いろ／＼調和を試みられたれど其功もなく、遂に別使を吉水に立て

御照會に相成りたが、法然聖人は、明二十八月早天より出席すると云ふ御返事がありた諸宗の學者方は諸方へ飛脚を馳せ式に之が準備をなし、二十八日の早天より九條殿の御屋敷へつめかけられた、一方の吉水ではこの模様を聞きつたへて、心ある御弟子方は御老體の御師匠を氣遣ふて居られたが、聖人は、御開山様を御呼びなされ「善信坊太儀ながら予が名代に九條殿へまいりて下され」との御命令、御開山様も師命なればのがれ難しと思召し「承知仕候」と御受合ひなされた、さて御開山様は例の通り墨の衣に墨の袈裟で、御供一人も召連れ玉はず、たゞ御一人九條殿へ趣かせられたが、九條殿にては諸宗の大徳八十八ばかり列席し、法然聖人の御入りを今や

遅しと待ちうけてござる所でありた、御開山様は末座より兩手をつき「今日は師匠法然參上致すべき筈の處、據なき左支出來に付き、不肖なる弟子善信を代理として差向ましたから、御用の次第、私へ仰せ付け下さる様さの御挨拶、そこで大徳方は選擇集の上に諸善萬行を雜行と云ふたがすまぬとか、廢立と云ふことがいけなむとが、論難攻撃の矢は雨の降る如くでありた、御開山様は最初より默然として一言の返答もなされぬ、差しうつむいて御座りたが、質問の次第もはや終りを告げたと思ふ頃に、「暫く御免下されよ」と云ふて座を御立ちなされた、定めて便所へでも行かれたのであらうと思ふて待ておられたがいくら待ちても御出席がなる「善信坊は何處

へ行かれたか」と小使のものを呼んで尋ねれば、「ハイあの御方は先刻御歸りになりました」との事でありた、諸宗の學者方は聲を震ひ辨を研ぎ、十二分に問答研究するつもりでありたのに、肝心の相手を失ひ、小言たらたら空しく自坊へ引取られた、この事が吉水方の門人の耳に入るなり、平素御開山様にこそ、ろよからのぬ人々は、善信坊は卑劣な行爲をせられた、念佛門に汚點を留めた、御師匠様も御鑑識ちがひでありたなどと、口々に悪く云ひはやした、翌二十九日の早天に、御開山様は吉水へ御出になり、委細を逐一に申上られたら、法然聖人はよほど御心に適ふたさみゑニッコリと笑ませられ「如何にもそうでありたが、堪忍つよき善信坊、耻も耻辱も打忘れ

泣て逃げかへりたごはよく出來た、たごひ源空が行ても其外に手なし、何となれば、撰擇集に念佛の功德を説き立てたは一巳の臆説にあらず、佛の金言を初め龍樹天親の論文、曇鸞道綽善導源信の聖教に由りたのぢや、昨日集られておる大徳方は、多年經論に眼をさらしてござるから、百も千も承知の上でまだ疑ふてござるのは、餓鬼が水を火と見ると同じ事ぢやで、黙つて逃けてもござるが一の手ぢやと非常に御褒めなされ、眞影の銘文を親しく御記しになつて、慰勞の爲めに下賜せられたので、興の御書も其時の御作であると申傳へておる。

法然聖人の御流罪は、いよ／＼三月十六日

シラン

を以て京都を御出立の旨仰せ出されたゆへ、親鸞聖人は十四日の夜に、忍び／＼小松谷の御堂へ御出ましたなされ、御暇乞を申上られた法然様の仰せに「これ善信坊、明日をも知れぬ老の身の再會はなかく、期し難い、マア何事も極樂の蓮華の御座で……」とはかり仰せられて、御落涙あそばされた、御開山様取り敢へず、

會者定離ありとはかねてき／＼しかど  
昨日今日とは思はざりけり  
會ふて嬉しき初めがあれば、別れて悲む終りのあるは娑婆の浮世の習ひなり、其義は萬々承知をしておりますれど、昨日や今日が御別れにならうとは存じませなんだとの御詠歌ぢや、法然聖人は、



別れ路の程は遙かに隔つれど  
心は同じ花の臺に

と御返歌あそばした「善信坊よ、そなたは北陸の雪の中、我れは西海の浪の上、北と南の生別れ雪と浪との大違ひなれど、魂一つは永の別れちやありませぬぞ、今に西方の花の臺で二度の對面するぞよ」と仰せられた、而してこれが兩聖人のこの世での永の御別れとなつたのである。

荒血山と鋸坂

承元元年三月十六日の曉に、親鸞聖人は藤井善信と云ふ罪名をうけ、西佛蓮位の兩僧をつれて、岡崎の御坊を立ち出で玉ふたのである、朝廷よりは配所の國府まで輿にのせ數名の押送使をつけて嚴重に道中せよとの御

と口吟みて稱名もろとも道中をなされたのである。

親鸞聖人と白鷺

親鸞聖人、御流罪勅免の後、其年の十一月に常陸國河内郡下妻小島の郡司武弘と云ふ人より、熊人を以て度々御招待を申上られたゆへ、聖人も如何にも最も至極なること、思召して御承諾なされ、其翌年の二月に越後國府を御發足あそばした、其時に歸依の同行の爲めに、御形見として御自作の御眞像に一首の歌を添へてつかはされた、其歌に曰く、  
われなくも御法はつきじ和歌の浦

彌陀と衆生のあらんかぎりは  
二月上旬、餘塞猶嚴しく春の雪ことの外、  
大降りにて、野も山も草も木も一面の白妙な

申付けなれど、それでは聖人の御本意の衆生濟度が出来ぬと云ふので、雲水行脚の體にて北國へ趣き玉ふ、御弟子達は御疲れあらんことを思ひやりて、御輿をすゝめ申せども、イヤ／＼と往來行き違ひの者にでも後世安心を聞かんと求むる者には、佛の本願を説き聞かせんが爲めなりとの玉ふたである、斯くて越前國荒血山を越え給ふに頗る石徑なるが聖人過つて石につまづき給ひ、爪先より血が流れければ、  
越路なる荒血の山に行きつかれ  
足も血汐に染しばかりぞ  
と詠じ玉ひ、又鋸坂と云ふ處にては  
音に聞く鋸坂にひきわかれ  
身の行く先は心ほそろぎ

る巨田の濱の雪道をすぎ玉ふてありたが、向ふの芦原より白鷺が一聲泣いて立去りた、その時聖人の御歌に、  
聲なくは如何になれとは知られまじ  
雪ふりかゝる芦原の鷺  
と口づさみたまひて、鷺も白し雪も白し、聲なくばあの鷺の居たことは分らぬ、然るに一聲發したので雪中の鷺がよくわかりた、悪人凡夫の胸の中は悪業煩惱の大雪、それが爲めに眞實の信心かあるかなるか、甚だ以てその見分がつきにくい、然るに眞實信心を獲得したるものは、必ず聲にも出し色にも其相は見ゆるのであると、御懇に御教化あそばしました。

乘然坊願海の入信

鹿島明神の神職たる片岡親綱と云ふ人は、かねて出離の志ふかくありしが、或時守り本尊の告げたまふやう、汝ち日頃出離の要法を求め、明師に遇はんことを望むや切なり、然るに今霞ヶ浦に由々しき大徳ましゝて、念佛往生の法門を説かれつゝあり、速かに行いて教へを乞ふべしと、親綱感涙にむせび、いそぎ霞ヶ浦の道場に至り、親鸞聖人の教へを受く、隨喜のあまり詠みたる歌に、  
よしあしも知らぬ難波のあまおふね  
誓ひの海によりてさだめん  
と云ふ一首を上り、師弟の約を結び、乘然房願海と云ふ法名を賜はられたとある。

スの部

ズイキカイドウ

隨器開導 【術語】

衆生の機に隨つて説法し、開解せしむるを云ふ、

因縁 鍛治屋と洗濯屋

舍利弗尊者の弟子に鍛治屋の息子と洗濯屋の息子がありた、この二人が弟子となる時に數息觀を教へられた、時に三年立てても五年立ててもかく觀法が成就せぬによりて舍利弗此義を御尋ね申されたれば、釋迦如來の、玉ふに、それは汝の教へ様が間違ておるから觀が成就せぬはづちや、以後は鍛治屋に數息

觀を教へよ、これは出入の息を數へて心をしづめる教へなるが故に、鍛治屋には誠に適當ぢや、又洗濯屋に不淨觀を教へよ、これは此身は穢れたもの、此世の穢れた處と觀する教へなるが故に洗濯屋にはよく相應するご仰せられた、舍利弗は如何にも御最もであると思ふて右の如く教へましたら、二人ともに道果を得られたとある、これが隨器開導と申すものである。

ズイミン

睡眠 【術語】

座ながら寝るを睡と云ひ、臥して寝るを眠と云ふ、四不定の隨一なり、

滑稽

主客の睡眠

或人が其朋友を訪問いたしまして、暫時客間に控へて居る内に睡を催し頻りに船を漕い

ズイミン

て居ると、主人が出て来て客の睡るを見まして、まさか呼び起すも氣の毒に思ひ、其儘對座して居るうち、主人も睡氣を催して盥をかいて眠つてしまいました、良ありて客が目を覺してみると、主人は熟睡の體である、そこで呼び起すも無體と心得て其儘再び眠につきました、主人も暫時眠りて目を開いてみれば客はまださめざる様子故、再び眠りてしまいました、兎角するうちに客が三度目に目を開いてみれば、日はハヤ西山に傾いて鴉も埒を求めて林に歸る、主人を見れば未だ覺めざる様子である、依てひそかに出て歸れば、主人も後に目をさまし、客の居らざるを見て、己が室に歸つたと云ふ話があります、なんと善く寝たものでは御座りませんか、

相對蒲團睡味長 主人與客兩相忘  
須臾客去主人覺 一半西窓無夕陽  
と詠せられた。

ズイルイオウドウ

隨類應同 【術語】

衆生の機類に應じて種々の身を現はし濟度したまふを云ふ。

因縁 子の窃盜母の放火

京都の呉服屋へ出入りの大工がありて土藏の造作して居たが、不圖家の主人が此土藏の金簞司から金銀の出し入れをするのを見て悪心が起り、竊かに金簞司から百圓盗んだ、ところが忽ちそれが露顯して遂に繩にかゝつて二條の牢屋へ入れられた、然るに其大工に一人の母があつたが、我が子の入牢したのを悲んで晝も夜も泣き明して心を痛めた、ところ

がこの老婆が或人の家へ火をつけた、年寄りのごとなればまご／＼して居る中に驅け付けて来た人の爲めに怪まれて、遂にこれも繩目にかゝりて役所へ引出され御吟味になつたが彼の老婆は直に白狀して、私が火をつけたに相違ござりませぬと申上げた、そこで役人が其方は何故に火をつけた、其家の者に恨みでもあつての事か、但しは盗みでもする氣かとの御尋、其時老婆の答ふるやう「私は恨みもなければ盗みでもござらぬが、此頃呉服屋某の金を盗んで入牢したは私の悴でござります夫故私も火をつけたら牢屋へ引かるゝであるう、其時我子に逢ふて一言の異見が致したいと存じて女の愚痴な心から放火を致しましたと申上げたれば、出役の御方が皆落涙なされ

て、我々も親を持つておるが親の慈悲の切なることはク様なものかと感心なされて、先づ親子の對面を許され、彼の大工を引き出して對面させ格別の御沙汰を以て親子もろとも助かりたと云ふ話がある、

編者曰く、幕府時代には斯くの如き異例もありしならんか、方今の如き法律嚴正なる時に比すれば、聊か首肯し難き點なきに非れども、讀者只慈母の愛情の深きを知れば可なり、

これが隨類應同と云ふもので、我身が放火の罪人とならねば牢屋の我子に逢ふとかならぬ今觀經の説相が此通りで、淨土の大菩薩が親殺しの罪人となり、子を殺す様な頻婆娑羅王となり、五障の女人の韋提希夫人とならせ

ズイレんボウ

られて、極惡の機を示させられたのも、末代濁世の今日の我等が、三界六道の牢屋につながれて居る者を、極樂淨土へつれて行きたひの御慈悲から種々に善巧方便して、我等が無上の信心を發起せしめて下さるゝちのや。

ズイレんボウ 隨蓮坊

【人名】

源空聖人の弟子なり、俗姓出生、詳かならず、

因縁 夢中の御教化

法然聖人の御弟子の隨蓮と云ふ人は、常に聖人に隨從し配所まで御供申上たる人である然るに聖人の御臨終の時に、隨蓮を枕元近く召されて「念佛は義なきを義とす、唯一心に念佛して他力の救済を仰ぎ、淨土往生を喜ぶべし」と仰せられた、此法然聖人の一言の御化導は實に聖人一代の御化導の精神が躍如と

して現はれて居る、聖人の御歌の、  
 阿彌陀佛と云ふより外は津の國の  
 なにはのこともあしかりぬべし  
 との意味や、親鸞聖人の「唯念佛して彌陀に  
 助けられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙  
 りて信ずる外別の仔細なきなり」の精髓が其  
 儘あらはれて居る、この臨終の御化導を蒙り  
 し隨蓮は、聖人の御滅後一向に念佛して淨土  
 往生を喜び居たるに、其他の御弟子達が色々  
 と隨蓮に議論をしかけて云ふには、「唯念佛し  
 て淨土往生を遂げると仰せられたは、ソハ三  
 心も四修もわからぬ愚人に對して方便の御説  
 法である、其實は三心を具足せねば往生はと  
 げられぬ、其證據には經論の上にも三心と云  
 ふことを分明に説いてあるではないか」と、

いろ／＼にかきまわされた處が隨蓮も疑心を  
 起してかゝることもやあるらんと心配して日  
 を暮らす程に、或夜の夢に法然聖人あらはれ  
 て隨蓮に申さるゝには、「隨蓮よもし人あつて  
 御座の前の池中の蓮華を、蓮華にあらず梅櫻  
 なりと申さんに、汝信じてんや如何に」と、  
 其時隨蓮曰く、「現に蓮花にてあるものを、い  
 かで梅櫻と思ひはんべるべきや」と、其時聖  
 人のたまはく、「念佛の義また此の如し、源空  
 が汝に教へし言を信せば、蓮華を蓮華と云は  
 んが如し、深く信じて念佛申すべきなり」と  
 仰せられたと覺へて夢は醒めはてたが、隨蓮  
 日頃の不審もこと／＼くはれて、専ら念佛し  
 て往生の素懷をどげられた云ふことである。  
 スガハラミチサ子 菅原道真 (人名) 末

參議是善の第三子なり、右大臣となり觀春日に加ふる  
 に及んで、藤原時平の讒に會ひ、太宰権帥に貶せられ  
 延喜三年、配所に薨す、年五十九、薨するの後、本官  
 に追復して正一位を贈り、又其靈を祭りて天滿天神と  
 云ふ、

談話 牛と蝸牛

菅原道真八歳の時、子供同伴で野中へ遊び  
 にゆかれたれば、野の中に牛の子が四つも五  
 つも遊んで居る、これは面白く云ふて  
 牛の傍へゆかれたれば、その牛の足元に蝸牛  
 が角をふりたて、はつて居る、そこで幼年な  
 がら同情心のふかき道真公、さて／＼不便や  
 氣の毒やとて一首の歌、  
 牛の子にふまれな庭の蝸牛  
 角ありとても身をばたのみぞ  
 己れには、角がある、家があるでと、必ず

我身をたのむな、油斷すな、其牛の子にふま  
 れたなら、角も家も一度にくづれてしまふと  
 云ふて、油斷を誡め、我慢憍慢の心を退治さ  
 せたいの御親切であります。

詩 去年今夜侍清涼 秋思 詩篇獨斷腸

恩賜御衣猶在此 捧持 日々拜 餘香  
 これは菅原道真公が筑紫へ左遷せられ、配  
 所にありながら恩賜の御衣を拜して詠せられ  
 た詩である、道真公は博學多才の人にて宇多  
 天皇がこれを登庸せられたものであるが、醍  
 醐天皇の朝に及び右大臣となる、藤原時平は  
 左大臣であつた、然るに時平は年が若いもの  
 であるから人皆道實を敬び、陛下よりは御衣  
 を賜り、寵榮日々にかんなるより、時平は  
 大にこれをにくみ、道實を調伏せんとして、

藤原定國藤原菅根など、議して讒言をした、それが爲めに道實は太宰の權の帥に下され、紫へ左遷せられた、これらが太宰五惡段に所謂「嫉賢誹善」のすがたである。

詩

離家三四月 落涙百千行

萬事皆如夢 時々仰彼蒼

これは菅原道真公の作られた詩である、道真公は天満宮と崇められて、今猶日本國中の人々より敬意を拂はれておりますれど、「萬事皆夢の如く時々彼の蒼を仰ぐ」で、生涯は非常なる逆境に立たたのである、身は儒生の中より選まれて、位は右大臣と云ふ榮職に上りたれど、風花雲月の喩の如くで、時平と云ふ悪者の爲めに讒言をせられ、太宰府に左遷の身となられたのであるから、世の中の事は皆

夢の如くであると云ふ御述懐である。

歌 心にまことの道にかなひなば

いのらすとも神や守らん

これは名高き菅公の歌である、道實公は

此意は、心に至誠さへあらば、神や佛に祈願

はこめずとも、必ず照護したまふものである

と云ふことである。

いのりでもしるしなきこそしるしなれ

おのが心に誠なければ

いくら祈願はこめても御百度はふんでも、己

が心に至誠がなければ神佛は納受したまふと

云ふことは萬々なるのである、依て如何に家

内安全や息災延命とか商賣繁昌とかを祈つ

ても、唯口に云ひ心に思ふばかりでは成就せ

ぬ、一家の主人たるものが、氣隨氣儘にして

發心北向してたい南無

歳且感懐

故人寺を尋ねて去り

新歲門を突いて來る

鬢は倍す春初の雪

心は添ふ臘後の灰

齊盤青菜の菜

香案白花の梅

合掌 觀音を念じ

屠蘇杯を把らす

偶作

病は衰老を追ふて到り

愁は謫居を趁ふて來る

此賊のがるゝ處なし

觀音を念すること一廻

我意を振舞へば、家内混亂の願と申すもの、

大酒大食で衛生に心を用ゐざれば不息災短命

の願と申すもの、遊蕩懶惰なれば一家零落の

願と申すもの、これに反して、仁義忠孝を本

とし夫婦兄弟睦まじければ、これ家内安全の

願です、酒食を節し衛生を重んずれば、これ

息災延命の願です、實直にして信用を得れば

これ商賣繁昌の願です、斯くの如く至誠を

本として徳義をおこなへば、それで神佛の照

護はます、其身に蒙らるゝことでもあります

雜錄 道真公の詩

禮佛懺悔

人は慚づ地獄幽冥の理

我は泣く天涯放逐の辜

佛號遙に聞き知ることを得ず

スギタキコ 杉瀧子 【人名】

吉田松陰の母なり、毛利の家臣村田右中の女にして杉氏に嫁す、三男四女あり、松陰は其次男なり、明治二十三年八月歿す、

談話 婦人の龜鑑

吉田松陰先生の母は婦人の模範ともすべき偉い人でありました、名は杉瀧子と申しまして、長州萩の城下に生れ、毛利家の家臣村田有中の女であつて、出て、杉常道氏に嫁し三男五女を擧げられました、其中次男の寅次郎は出で、吉田氏の養子となつた、これが松陰先生であります、瀧子は其性仁慈に富みて人を憐むこと深く、勸儉にして克く艱難に耐へる方でした、初め杉氏は家貧しく、城下の東端、護國山の南麓に小さき茅舎を構へ、田畝の耕作と子弟の教育を家業として日々細き

煙を立て、居ましたが、瀧子も夫に従ふて其業を助け、具に艱難辛苦を嘗めました、其後常道氏は出で、仕へて外にあること六年に餘れど、素より婦僕を召使ふ程の身分にあらねば、瀧子も夫にかはり、家事の整理から田畝の耕作まで一身に引き受け、せめての思ひ出に。

父母の爲めとて今日もまじば樵る

ついでに錦身にまじひつゝ

と口詠まれました、此感心な心懸をきいて、吾身を耻ぢぬ御婦人が世にあるでせうか。瀧子が杉氏へ歸さし頃、舅なる人は既に死なれました、姑のみ残つて居ましたが、瀧子は能く其姑に事へ孝養せられました、また姑の妹なる岸田氏が貧乏で、多年杉氏へ寄食し

且つ久しく重病に惱まされて、臥たなりで自ら立つことも出来ませぬ、時に其長男の民治はまだ五歳、寅次郎が三四歳、娘の芳子が一二歳でしたが、瀧子は自分一人で手足に纏まる此頑是なき三兒を養育しつゝ、日夜心を盡して病人を看護し、薬を侷め體を撫で、其汚穢を意ともせず洗濯しましたれば、姑は泣いて其親切を謝し、觀るもの爲めに感動せぬはなかつたさうです、斯く困難な中からも、瀧子はあつく心を子女の教育に用ゐ、熱心に之を教へ勵ましたつ、家事の忙しい爲めに學業の隙を欠かせる様なことは一度もありません、後ち松陰先生が松下村の塾を繼いで熱心に書生を教育せられました時には、瀧子は深く來學の子弟を愛し勤勉秀逸の人物には賞

品などを與へて奨め勵ましました、又先生が罪を幕府に得まして自分の家に蟄居を命せられた際には、同意の士が窈かに來り訪ねますと、瀧子は喜んでこれを迎へ酒肴を饗して篤く待しますから皆其親切に感じて來客の絶へたことはなかつたさうです、其後、松陰先生の死刑となり又子や孫を澤山に亡ひまして、重なる不幸の中にも泰然と落着いて萬事を處理し、少しも誤つたことはありませんでした、瀧子がかゝる大困難に耐へ大苦痛を忍びましたのは、全く信仰力の顯現であること云ふてもよいのです、平素深く佛教を信じなさいまして、眞宗の諸大徳について深く其奥義を質し大谷派大法主に謁して法名を受け、日夜念佛佛恩の稱名怠りなふ、常に他人を教へ誘ひ

て同じく一味の信心に基かしのむるをこよなき  
 樂みとせられました、瀧子は常に曰く、生き  
 ては涯りなき天朝の恩澤に浴し、死しては西  
 方浄土に往生して永劫の快樂を享く、喜びの  
 中の喜び、人間の幸福、何事か之に過ぎむと  
 云ふて感謝せられたさうですが、誠にこの信  
 仰の根柢が心の底に深く、常に大慰安を與へ  
 たらばこそ、非常な艱難悲痛の中にも、能く  
 平氣で務めて果すことが出来たのです。

明治二十三年八月、ヲト病氣にかゝり、二  
 十九日正午、念佛の息たる、目出度往生の素  
 懷を遂げられました、皇后陛下からは思召を  
 以て特に金百圓を賜ひ、大谷派法主からは追  
 吊として、  
 國の爲め盡し、のみか傳へらる。

みのりの道はふみもたがへず  
 と云ふ色紙を贈られたさうで、親戚故舊、朝  
 野の名士まで感激流涕せぬものはありません  
 でしたが、眞に此瀧子の如きは、愛國婦人の  
 龜鑑と仰いてよからふと思ひます。

スギハラタツオキ 杉原忠興 【人名】

神邊城主なり、初め尾子氏に屬し後毛利氏に降る、

杉原忠興の備後神邊の城を守るや、平賀隆

宗來つて之を攻め、相峙すること三年、兩々  
 相下らず、隆宗使を城中に遣はして、「徒らに  
 對峙するも益なき業なれば、我と足下と事を  
 一戦に決せん、さればとて多くの士卒を殺す  
 も憐れなれば、足下は弓の名手と聞く、希  
 くは二本の矢を限りて我を射よ、中らば我が

命はなきものなり、中らずば此城を渡し玉は

るべし」といひければ、忠興、コハ面白し、  
 さればとて日を期して城外に出で、相距る  
 こと六十歩、隆宗は胡床に倚りて、「イザ射よ」  
 といふ、忠興一矢を放ちしに、矢は隆宗の腹  
 に中れり、隆宗も亦不敵の強將、笑つて、「足  
 下老ひたるか、矢低しと云ひけるに、忠興二  
 の矢を放つ、高く飛びて空しく頭上を過ぐ、  
 忠興、ア、二の矢も當らざりし、武運の末  
 なりとて城に入り士卒に命じて明け渡し用の  
 意をなさしめしに、士卒は、何とて殿にはか  
 らる約を重んじてむざく敵に城を明け渡し  
 たまふやといふに、忠興「一旦明け渡したる  
 城は復たとり還さるべし、武士たるものが約  
 に背きしとあつては末代までの耻辱である」

とて、城を明け渡された。

ステジヨ 捨女 【人名】

丹波國柏原山里の八なり、年未だ三十に滿たずして夫  
 を喪ひ、盤桂禪師の門に入りて尼となる、法名妙融と  
 號す、

俳話 捨女の風流

捨女は丹波氷上郡柏原の人、六歳にして、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

と吟じて梅檀は嫩葉より香ばしく、後某氏に

嫁して其夫を失ふや、

秋風の吹き来るからに糸柳

と吟じ、剃髮して盤桂禪師に従ひ淨行に世

を終へたとある、同女が、

うきことになれて雪間の嫁菜かな

の句は女流頂門の鐵として世に喧傳せらる。

スゞキシヤウサン 鈴木正三

【人名】

江戸の儒者なり、世々松平氏に仕ふ、後、髪を削りて佛道に入れり、明暦元年六月歿す、年七十七。

鈴木正三と辻斬

鈴木正三と云ふは三河の産れで、代々徳川家康に仕へ、勇名高き人であつたが、關ヶ原の戦にも拔群の功を立てられた、後剃髪して俗名の正三を其儘にしやうさんと改め、諸國に行脚して禪門の高僧智識に參して悟道に入り、江戸淺草の天徳院の傍に庵を結んで居られた或時一人の武士が來て、頻りに辻斬の自慢話をして正三に勧めた、すると正三は固より辻斬などする人ではなく、又よくないと云ふことを知りておれども、直に辻斬はよろしくないことであるから止めるがよいと諭

しても、思ひ止まるべき様子なのを見て取つて、わざと辻斬と同行することにした、日暮を待つて品川邊にゆき、彼處此處とさまよう中、町人や婦人小供などの澤山通りすぎるを、彼の武士は斬ろうと致しますから、正三は其度毎にこれを止めて居ました、やがて多くの従者をつれて通るものがあると、正三「サア早く彼を斬り玉へ」と促しました、すると武士は大に躊躇した、そこで正三は「貴殿彼れを斬ること出来ずば、某か貴殿を斬ろう」と云へば、武士は慄ひおそれ頻りに助けて下されと云ふたから、正三「かやうな者を切るこそ武士なれ、婦人小供を斬つたどて何の役に立つか」と云つて非常に叱つて將來を誡められたら、今の武士も直に改換せられ

たとある。

スゞムシマツムシ 鈴虫松虫

【人名】

二人ともに絶世の美人にして後鳥羽天皇に仕へたる宮女なり、

鈴虫松虫の發心

鈴虫松虫は絶世の美人にて、共に後鳥羽上皇の寵愛深き御方でありた、一人は十七歳一人は十九歳の若盛りでありたれど、法然聖人が清水寺にて出家功德經の御講釋ましくたるを聞いて、頻りに遁世の念が起り、念佛三昧に身をよせ、出離生死の覺悟が肝要であるご時機の來るを待つておられたが、或時上皇熊野へ參詣の留守中に、東山鹿ヶ谷の精舎へ參詣し、住蓮安樂の兩僧が六時禮讚別時念佛の勤行せらるゝにあひて、尊ひやら難有いや

スゞムシマツムシ

ら、信仰肝に銘じ隨喜の涙にむせびて下向せられたがそれより兩人殿内にて密かに語り合ひて、夜の間に脱け出で、剃髪出家の身となろうと心を定められた、早速兩女は御殿をぬけ出で、鹿ヶ谷精舎の門を叩き、住蓮安樂の兩僧にあふて、願ひの趣を申陳べられた、兩僧は暫く思案して答へらるゝ様「如何にも御願ひの程は神妙なれど、仙洞御所に御勤めの大切なる身分、御上の思召も計り難く、我々の計ひにては出家は許し難し」と、種々詞をたくして諭されたれば、兩女の申す様「是非とも志願御許しなれば、我等兩人は世にある甲斐はござらぬ程に、水に投じて死にまする、さらば御免」と座を立たうとせらるゝゆへ、住蓮安樂も詮方なく、たとひ後難の起る



にもせよ、みすく、兩女を死なせては、佛の慈悲に乖くべしとて、遂に剃刀を取り出し、流轉三界中恩愛不能斷棄恩入無爲眞實報恩者と、四句の偈文を唱へつゝ、緑の髪を剃り落し、錦の着物を脱ぎすて、麻の衣になり、尼法師の姿となりしかば、二人の局は大に喜びこれこそ兼ねての望みを遂げましたと、一禮をのべて立去り、其後かの二女は紀州に至り、粉川寺の山内に一の草庵を結び、念佛三昧に餘念なく、目出度往生の素懐を遂げられたとある。

スマ 須磨 【地名】

攝津國武庫郡の海濱にあり、源平の古戰場、

法然聖人と須磨寺

敦盛卿は京都を出立して、須磨の内裡へつ

められたが間もなく合戦と相成り、後には鐵かいが峯、鵜越、前は一面の播磨灘、源氏の軍勢はさかをとしにせめよせたれば平家の方は途方にくれ、右往左往と散り亂れ、主は家來を失ひ家來は主に離れ、非常な大混雑となつた、敦盛卿は只一人、海の方へ逃げられたが、後ろより熊谷直實に呼び止められ、兩馬の間に落ちて、さうく熊谷に組伏せられ、今や首の落ちると云ふ、いさぎよく西に向ふて手を合はせ、南無阿彌陀佛の聲もろとも、十六歳を一期として相ひはてられた事であるが、これは誰も知つておることゆへ委く云ふにも及ばぬ、其遺骸を須磨寺へ葬りた。

法然聖人はこの事を御聞き遊ばして、わざと須磨まで御出なされ、「さてく若君御手

柄あそばした、この法然はまだ迷ひの沙婆に居りますが、追つてまいります程に半座をわけて御待ち下されよ」と、生きたる人に云ふごとくに仰せられ、涙ながら詠まれた歌に、

音壽丸世にこそすまでたへいりて

彌陀のはちすにともに生れん

音壽丸とは敦盛卿の幼名であります、又或人が、

須磨寺を泣いてもどるや南無阿彌陀と詠まれた。

スミヨシ 住吉 【地名】

攝津國東成郡住吉にあり住吉神社を以て名あり、

歌話 一休禪師と住吉明神

一休禪師、或時住吉に詣て、通夜せしに、はなばかりの老翁、何くともなく來りければ

スミヨシ セイクロウ

セの部

一休、かの翁に對して、

來てみれば此處も火宅の宿なるに

なに住吉と人の云ふらん

とよみければ、老翁の返歌に、

來てみればこゝも火宅の宿なれど

心をとめてすめば住吉

と答へられた、この老翁は全く住吉明神の化身である云ふことを知りたまひて、庵をこゝに結んで暫く棲みたまひたとある。

セイクロウ 清九郎 【人名】

大和國錦立村の人にして篤信者を以て、名著はる、寛

延三年八月歿す、年七十三、

因縁 清九郎の活ける懺悔

大和の清九郎と云ふは眞宗信者の摸範とも云ふべき篤信者でありた、或人が一つ試みてやろうと思ふて、清九郎が大谷本廟を参詣の際に財布に金を入れて御堂の前におき、木陰にかくれて其舉動を見ておりた、清九郎は本堂よりおりて履物をはこうとして、フト其財布に目がついたソツト拾ふて懐ろへ入れてかへりかけた、今の人は之を見て「さては信者と云へども、淺間しきものである」と思ひつゝ見て居ると、清九郎は門まで行たが直にあとへかけ戻り、今の財布を懐ろより出して元の場所におき、御本尊を遙拜して「ア、難有うござります、拾ふて懐ろへ入れたはこの清九

郎、わるいと氣がついて出させてもろうたは如来様の御慈悲でござる、南無阿彌陀佛」と念佛となへながら、しづく下向されたのである、活ける懺悔とはこれらを云ふのでせう。

因縁 清九郎の金剛心

或日清九郎が山へ柴苅りに行いて居る留守中へ御本山より早飛脚にて即刻出頭する様にごの通知がありた、山から歸りてこの御召状を見るなり、清九郎は驚いて後事を家人にたのみおき早速上京の途についた、其翌日の夕方に御本山へ着し、早速臺所へまわりて、只今参着の旨を申上ると、臺所の役人は白書院へ通れよと案内せられた、「左様なれば御免下され」と云ふて、そのまゝついて行かうとすると、役人は聲あらし、恐れ多くも善知

識の御前へ出るに禮服の用意もなく、破れ着物のまゝとは御無禮であろう」としかりつくれば、清九郎恐れ入りて申す様「御最もでござります、さりながら此爺は如何程に姿をかざりまして三毒煩惱の泥根性をのぞくとは出来ませぬ、その淺間しい心中も善知識は御見ぬきのことなれば、ごうぞこのまゝ御目通りを願ひ度うござります」と、眞實おもてにあふれて願ひましたから、役人も之に感動し破れ着物のまゝ拜謁をたまふこととなりた、其趣を御上へ言上いたしましたれば「苦しうなる其儘通れ」との命が下り、清九郎はそのまま白書院へ導かれた、はつと末座に平臥して居ると、上段の間へ善知識御出座あそばされ清九郎、「わざ／＼上京の段奇特に存す

この度わざ／＼呼びよせたは餘の義にあらずかねて其許は本願の御不思議を信じて念佛相續して居ると聞て居たが、此頃かげより段々取り調べてみれば、其方の心得は間違ふておるぞ、汝の領解は全然異安心なるぞ、不所存ものよ」と非常の御しかり、清九郎はこれを聞くなり「難有うござります、なる程この爺の心中は昨日も間違ひつめ今日も間違ひつめ、丸で水に書をかく様な心中でござりますこの様なかはりやすい間違通しの爺ぢやゆへ大悲の親様は、五劫永劫なが／＼の間、御苦勞下されましたが、其曉に御成就下された南無阿彌陀佛の六字の勅命、たごひ罪業は深重なりとも必ず彌陀如来は救ひましますと云ふ御呼び聲が、私の心中へ至り届いて下され

たゆへ、今日は往生に安心しております、こ  
んな爺も此度は息きれ眼閉ぢ次第、間違なく  
往生淨土の素懷をさげ奉る仕合せとは、勿  
體なひやらうれしいやら、もうだまつておら  
れませぬ、眞平御免下され」と御影堂の方へ  
ふりむき南無阿彌陀佛々々々々伏し拜み、  
歡喜の涙にむせびければ、上段にてこの有様  
を御覽あそばし「清九郎出かしたり〜それ  
でこそ金剛堅固の目出度い信者である、其方  
の心中をためさん爲めわざ〜よびよせたが  
只今の有様をみる上はおれが未來までの善き  
親友である」と深く御喜びあらせられたとあ  
る。

**因縁** 清九郎の仁心

清九郎、或時粉種を干瓢に入れおき、三月

頃種を蒔くべしとて人を雇ひ取り出せば、其  
中へ鼠が入り粉種を喰ひつくし、尙中に鼠が  
去らずに居ました、そこで人々錐にて刺し殺  
さうといへば、清九郎驚き差止めて云ふには  
「盗み喰ひするは鼠の性質それを殺すは不仁  
である食はぬやうに用心をせなんだは此方の  
あやまり、されば誤りは此方にあり鼠の科に  
あらず、そのみならず、此家に住む鼠なれ  
ば、清九郎とは定めし深き因縁あるべしと思  
へば、中々殺すことはならぬ」と云ふて、直  
に鼠をにがせしかは、如何なものも大に清九  
郎の仁心に感じたとある。

**セイグワン** 誓願 【術語】

誓とは激制の義にして不取正覺、願とは備求の義にし  
て殷我得佛を指す、

**句** 一心はやみようもなき火取虫

何返おい出しても亦立ちもごり〜、火を  
取りに来る愚かな虫でも、あの火を取ろうと  
思ひこんだ一念は油の中でのたれ死にすると  
も決して厭はぬと云ふが即ち一心決定、一寸  
の虫にも五分の魂があると云ふは爰のことぢ  
や、わづか虫の念力でさへ斯うぢやもの、況  
んや大悲の親様が愍念衆生の御意より、一々  
誓願爲衆生故四十八返まで正覺の命をなげ出  
して御成就下されたがこの御六字ぢや。

**譬喩** 汽車の發明

汽車と云ふものは、もご、誰人の工夫より  
出来だぞと問へば、機關の考はゼームスワ  
ットと言ふ人が發明し、正しく汽車と云ふも  
のを發明し、人の實用に供へたは、英國のジ

ヨージ、スタンブロンと申す人にて、日本  
の天明元年に當つて生れ、嘉永元年に當りて  
六十八年を一期として死なれた人である、さ  
て大津ならば大津の人が、所用あつて京都へ  
來るとて、自轉車で行かうか汽車にしようか  
と思案したが、汽車で行くことにしようと思  
ひ定めて、停車場へ出かけて汽車に乗つた、  
これは往生について、餘の行をすて、南無阿  
彌陀佛ばかりとなることの喩である、さて汽  
車に乗る所では同じ事でも、一等の乗客は乃  
公なりと、乗るを手柄と思ふならば大なる誤  
り、今法義では自力の心である、乗る我等に  
手柄はない、かくなる者を巧み出して此便利  
を與へられたる發明者其人があつたればこそ  
と、これが今法義でいふときは佛の不思議力

を仰ぐすがた、誓願の不思議を信する相である、されば馬車をも自轉車をもすて、瀛車に乗つた、これは行と行との廢立、乗り心はといへば我を手柄と思はぬ、巧み出した人の御蔭にてと思ふは、自力他力の廢立である、馬車も自轉車もすて、瀛車にせよ、乗るに手柄はない、發明者を仰ぐばかり。

譬諭 金錢と衣服

父より譲つて下された金錢でも本で云ふときは父上の汗油、又着せて下された衣服でも本で云ふときは母上の御苦勞、母の苦勞を着せて頂いたと受けねばならぬ、佛號甚だ持ち易く淨土甚だ行き易し、往生のしやすきやう往生の行の修しやすきやうと、憐みを盡させられての誓願にてましますば、念佛往生の御

心得るが眞宗念佛の行人と申すものであります。

譬諭 井戸に落ちたる人

一人井戸に落ち、之を救はんご欲して繩を下す、其時、落ちたる人の繩によりて井戸より上るに、大凡そ三種の別あり、

- 一 繩にすがるといへども、兩足を以て疊石を踏んで上る、この人、上るといへども其恩を思はざるが故に謝言なし、
- 二 繩にすがるといへども、すがる手をおをたのみとするあり、此人亦厚恩をおもはず、
- 三 たゞその繩をひく人と、その繩をたのみて上りたる人は、ふかく其恩を謝するものなり、

約束そのまゝを彌陀大悲の誓願と見て深く信じ奉らすば祖師聖人に値ふた所詮はない、金錢と思ふて受けた息子ならば、若しくはつかひ果すかもしれない、着物と心得て着るならば龜末に着破つて仕舞ふかもしれない、南無阿彌陀佛の行法を、たゞ南無阿彌陀佛と心得るならば、金錢の喩ならば無駄使ひの如く、着物の喩でならば、よごしたり、針さけたりて厭はぬ如くの心得違ひもあろうかなれど誓願の不思議を信じたる人、本願他力を仰ぐ人であるならば、南無阿彌陀佛にて往生するぞよの教へ、南無阿彌陀佛にて往生さすこの御約束を、彌陀大悲の誓願と信じさせられたは、法然聖人の御正意をよく御手に入れさせられたる祖師聖人御已證の一途、こゝを

初めは鎮西の救ひなり、次は西山の救ひなり、後は今家の救ひなり。

因縁 徳川家康とト半禪門

徳川家康、大坂陣の時、眞田幸村にせめられて貝塚の方へ逃げられた、右も左も敵の中で、こわい／＼と逃げ玉ふ中に藪の中に小屋あり、内に御這入りなされたれら、其中にト半と云ふ禪門が居る、そこで家康の申さるゝ様「我は家康と申すもので、只今は敵にせめられて非常に難義をしておるから、ト半助けてくれよ」とたのまれた、そこで禪門は寶の子の下に隠しておいたが、米がないからと云ふて、ハツタイを差上たで漸く御命を助かりた、其時家康公の仰せに「コリヤ禪門予が武運目出度してもし將軍になりたなら、其許

に千石の知行をやるう、其證據はこれぢやぞよと御墨付を貰ふた、これが因位の約束と云ふものです、それから御苦勞がなみたいていなことではなる、彼處の戦争にも勝ち此處の軍には利ありて遂に天下を統一して將軍となり、其翌日直に貝塚へ使を立て、千石の知行もろうたは、名高き貝塚の卜半禪門、今我々の往生は、昨日や今日の請合ぢやなる、法藏因位の御約束、悪人女人が佛にならぬなら彌陀と云ふ正覺は取るまいとある、其約束たがはず、五劫の軍に勝ごきあげ、永劫の戦に勝利を得て、南無阿彌陀佛を成就して、三界の籤の中に居る卜半同様の我々に、わざくの御使ひが朝な夕な御教化である。

武内宿禰と神明の批判

正しと相成りた、依て武内は誓を立て煮湯の中へ鐵の丸を投げ、もし我に黒みがあれば忽ち我手は煮湯に爛れ立處に御罰を受けん、弟が偽りならば弟の手は、煮湯に爛れん、嘘か實か、神明の御批判を請はんとの願ひにより磯城川の邊に二つの釜にぐらく煮へ立つ湯玉の中へ鐵丸二つを投げこんで、煮湯の中より探り出して取り上げよと仰せの下に、武内畏りて天を拜し地を拜し、心に神明の擁護を請ふて祈念し、遂に煮湯の中へ手をさしこんで鐵の丸を探りあげた、然るに弟の甘美内はがたくと震ひ上りて氣も狂亂、如何せんぞ猶豫せしが、今は包むに由なく「兄の謀反と申せしは全く我が偽はりなり、許したまへ」と泣きさけぶ、武内は大音あげて、罪な

武内宿禰と云ふは景行成務仲哀應神の四代の天皇に仕へたる名高き人であるが、九州にて巡察鎮撫の役を勤め居らるゝ際、弟の甘美内宿禰と云ふもの天皇へ讒言して、我が兄は三韓を招いて謀反を巧み、今都へ攻め上る支度の真最中なれば、此儘にすておかば、如何程の大變出來するやら計られませぬから早く之を討ちたまへ」と申上たれば、天皇之を信じて直に勅使を九州に立てられて武内を殺しにかゝられたが、真根子と云ふもの如何にも氣の毒なおもい、武内の名代に立つて殺された、武内は漸く通れて命を助かり、後に自ら朝廷へ訴へ、忠義一途のこの武内、心に黒みがあるかなるか明白に御正しを蒙りたいと弟の甘美内を召し出したまひ雙方情實を御

き我を陥し入れんとたくみしは弟にては全くなし、我が敵なりとて、短刀スラット引ぬいて打たんとしたが、難有くも天皇は之を止め紀伊の直伊に賜はりて奴となした、武内は實の忠義あらはれて再び元の如く政を攝しつとめられたとある、これが武内の誓と云ふもので、もし我に不義あらば湯玉の中で爛れませう、若し弟が偽りならば、爰に證據をあらはしたまへと云ふたのぢや、この法藏は湯玉の中で焦げはてることも厭ひはせぬと諸佛の真中でたてた誓が若生者

セイグワンジ 誓願寺 【寺名】

京都新京極にあり、淨土宗西山派の本山なり、

因縁 誓願寺の念佛

蓮如上人、京都誓願寺の前を御通行なされ

た時、誓願寺に大勢集りて、南無阿彌陀佛々々々々と、木魚鐘鉦を打ち鳴らして百萬遍の珠数を繰りて居る、其時上人、此念佛の聲を聞きしめして、大聲あげて御泣なされた、慶聞坊おどろいて「如何なされましたか」と御尋ね申したら、上人の仰せらるゝやうあの念佛の聲を聞き、大勢集りて百萬遍の珠数をくり聲はげまして念佛となへておれど、稱へさへすりやまいれると思ふて稱ふるあの稱名、同じ念佛となへるなら、願力不思議の如來の働きて、まいらせ頂くことのうれしやと、報恩の稱名がとなへさせてやりたい」と御歎きなされたとある、鐘鉦叩いて珠数くりて、汗水流して勵むより、「如來大悲の恩を知り稱名念佛はげむべし、本願の御手柄名號のひと

りばたらきで、永の迷ひの巢だちして極樂へまいらせもろうことのうれしやと、喜び々々稱ふるが何より難有い。

**セイクワンボウ 勢觀坊** 【人名】  
源智字は勢觀、俗姓は平氏、備中守師盛の子なり、十三歳にして得度し、源空聖人の門に入る、聖人示寂の後、其後を繼紹せり、暦仁元年十二月、加茂神宮寺の功德院に寂す、年五十六、

**因縁 小宰相の局**  
勢觀坊は道盛卿の胤にて、北の方少宰相の局が平家没落の後、元祖をたのみて吉水の御庵室にかくまわれ産みおとし、局は産後のなやみで終られたが、その遺言にて法然聖人の膝の上にて育てられたが勢觀坊です、この道盛卿と小宰相の局とが夫婦になられたるについて一場の物語がある、道盛卿が或時參内せ

らるゝと上西門院の官女小宰相の局を見初めた、この小宰相の局と云ふは、刑部則方の娘にして、宮中第一の美女でありましたから道盛卿は、

我が戀は細谷川の丸木橋

ふみかへされてぬるゝ袖かな

と云ふ艶書をつかはされたが、小宰相の局この艶書を落し、傍より之を拾ふて門院の御前へ出したものがある、門院、これは道盛の戀路を受け合はぬ、局につかはしたる恨みの歌、あまり戀路につらくするも女の道ならず躬ら返歌をいたしつかはさんと、門院は、

我戀は細谷川の丸木橋

文かへしては落さいらめや

と詠んてつかはされ、御媒ありて道盛の妻

となし王ふたのです然るに風花雲月は娑婆の習ひとは云ひながら道盛は三十にて生田の森にて戦死せられ、局は二十二才、胎内に忘れかたみの一子を宿したゆへ今相果て、母子もろとも闇より闇に迷ふも本意ならずと思ひ、吉水に身を忍はれ産み落されたが勢觀坊である。

**セイジツ 誠實** 【世語】

うはへに深切にかざらず、誠を心の主とするを云ふ、誠を以て人に向へば、人亦誠を以て懸す、

**譚 米屋八郎兵衛の所罰**

成瀬隼人正成といへる人の城下に、米屋八郎兵衛と云ふ人がありました、この人は非常な強欲な質で、日々米を賣りまするに、遣樹と取樹との二つを造り置きまして、御客に御

米を賣るときには、小さい榭ではかり、巳れが米を買ひ込むときには大きな榭の方で計つて買ひ取る云ふ仕末で、大層御金を儲けました、處がこのことを領主成瀬正成が聞き込み大に立腹を致しまして、彼を罰することゝ致しましたが、まてこゝが一番考へどころである一考し、彼を徒らに罪して不具にするより、積極的の一つ其罪を罰してやらうと決心を致しまして、彼に云つて曰く、其方は今迄人に巳れが強慾を縦にした、處刑として、今迄の榭を用いてよろしいが、しかし其用い方に於て以前と反對に、米を買込むときには小さひ榭で買ひ、賣るときには大きな榭で賣れと云ふ、この命令が彼れへの罰でありました、彼もやむなく此命令に服した處が、其日

より御客が澤山に来て山をなす程であつた、それが爲め以前強慾であつた時より利益が倍にも及んだこのことである、隼人正成の強慾者八郎兵衛に對する三十棒は、人を殺す棒でなく人を活すところの棒である、これらが實業道德の最も貴重すべき好適例であらうと思ふ。

**談義** 兵と食と信

孔子の御弟子の子貢といふ人が或所の代官に取り立てられて、其國を治めにゆくとして、孔子に御尋ね申さるゝには、「國を治めるには何が一番に入用でござりませう」と伺はれた其時孔子の仰せに、「兵と食と信とが入用である」と仰せられた、兵とは現今で云へば軍隊の事で海陸二軍が第一に入用、食とは軍資金

の事で、兵の食糧を初めとして資金が第二に入用、信とは信用で、一國の治めるには信用と云ふものが入用、これが第三である、其時子貢の申すに「如何にも兵と食と信との三つが入用である云ふことは御最も千萬であるが、この三者の中で、一つを捨てねばならぬと云ふ場合には、どれを捨てたら宜しう御座りませう」と申上たら、先づ一番に兵を捨てよと宣ふた、即ち軍隊を縮少せよと云ふことぢや、これは下々でもそうでありて、家運が衰へかゝると、第一着に下男下女をやめると同じことぢや、其時子貢が打ち返して「其食と信と二つならべて、二つながら持たれぬと云ふ場合には、どちらを捨てたら宜しう御座ります」と御尋申上げられた、こゝが大切な

る御尋で、我々が日々の世渡りにもケ様なる問題に逢着することが時々ある、親方へ勘定をすませば食ふことが出来ず食ふ事の用意をすれば義理も信用もすて、仕舞はねばならぬこれが食と信とをならべた所ぢや、そこを子貢が御尋申された、其時孔子の御答に、「食を捨てよ」と仰せられた、これは随分極端な言ひ方で、たとひ飢死しても信用は失はれぬ、其場合へ臨んだなら道を守つて死んでしまへと云ふことです、わづか一世の道德を教へたまふ孔子聖人の御精神でさへ斯の如くである況んや二世安樂の身と御定めにあづかつた佛教信者は、猶更この信を守ると云ふことを忘れてはなりません。

**談義** 山守と狐 (作話)

狐が獵師に追はれて山守に救ひを乞ふたので、山守は已れが小屋の中へかくしてやつた程なく獵師が追ひ來りて、狐は來ませぬかと問ふた、山守は知らぬと口に云ひながら、ひそかに小屋を指した、されど獵師は心つかずして森の方へ追ふて行いた。

さて山守は狐の小屋をぬけ出るのを見て、「汝は恩の知らぬものよ、せめて一言の禮をのべては如何ぢや」と叱りますと、狐のいふやう、「君の指が口のやうに親切ならば、イト難有く思ふけれど、口と指とが丸きり反對ゆへ、それで私は禮を云はぬのである」と云ふたそうな、心に誠なき人は多く此山守に類するのです。

談叢 安藤直次兄弟の友情

徳川家の臣に安藤直次と云ふ人があつた、其弟を重信と云ふたが、直次が一の名刀を持つておらるゝのを見て重信は心の中でほしくてくたまらぬけれども、遠慮して口に出したことはなかつた、或時、直次が重信のもとへ行き、今宵は御馳走に預らうとて、常よりもゆる／＼と語り樂みて歸つたが、あとに彼の名刀が残してあつた、重信これを見つて急に家從に命じ刀を持つて跡を追はせた、家從、直次の乗り物にはせつき、「御腰の物なりとて之を渡さう」とすると、直次駕の戸を開き別に刀を示して「予が刀はこゝにある、それは弟の家の刀であらう、武士たるものが刀を忘ると云ふやうなことはない、無禮なことを云ふな」と云ひて戸を閉ぢて駕籠を進ま

せられた、重信これをきゝて涙を流し、「兄弟は我が心を知つて之を賜ふたのであるかされど之を賜ふたからには、近き中に隠居せらるゝのであらう」とて悲まれたが、果して直次は間もなく隠居せられました、直次が一言も發せずして刀を弟に與へ多年の望みを満足せし兄弟の友情は、まことに千古の美談とすべきことである。

セイトク 聖徳 【世語】

天皇陛下の御威徳の高きことを仰ぎて「一と云ふ、神聖なる徳澤と云ふ意なり、

談叢 ありがたき大御心

明治二十八年一月一日、天皇陛下は廣島の大本營に於て新年に迎ゑられたのであるが、午前の四時頃に四方拜の御式を終らせらるゝ

なり、直に侍從を召して陸軍二等卒の軍服一通りを御取寄に相成り、陛下には畏多くも御肌着まで御脱ぎ棄て遊ばし、彼の軍服を召させられ、再び司令部の御庭へ出御になりて直立不動の姿勢で御立ちあらせられた、此時侍從や侍醫の方々は、非常に心配せられ、かゝる軍國多事の場合に、萬一玉體に御さわりでもあらせられては一大事と思はれ、種々申上られたれども、更に御聞入れなく、二時間ほど御立ちあらせられて後、仰せらるゝ様、昨年以來我が陸海の軍人は遼東半島へ罷越して居る、然るに彼の地は非常な寒氣と云ふことをきいて居るが、果して何程の寒さであるか、せめては斯くも致したならば、彼等の困難の程が思ひやりて遣はすことが出來様かと



思ふて庭上に立つて見たことであるが、廣島は我國中で比較的暖かな處であるにも拘らずこの軍服を着て朝風の吹く處に立つて居れば身にひし／＼と寒さがこたゑる、況んや遼東の雪の中、氷の上に於て任務を取りて居る彼等は定めて寒いことであらうと思はるゝ、汝等及ぶ限り防寒の手当を致し遣はす様」この勅諭にありたと申す事である、ナント難有き大御心ではありませんか。

**セツシヤウ 殺生** 【術語】

十惡の隨一なり、自ら殺し又人に殺さしめ生あるもの、命を断するを云ふ、

**アゼン市議員の無慈悲**

希臘のアゼンの市の議員が、同市の郊外にアルマリスト云ふ山の麓で會議を開いたこと

がありました、處が議事の最中に一羽の雀が鷹に逐はれて逃げ場所がなく、遂に議員の一人の袖の中へ飛び込みました、すると其議員は直ちに小雀をつかみ出して地に投げつけて殺してしまいました、所が其所作を見たる満場の議員は深くこの無慈悲なる動作に憤慨し其議員を議場から放逐して、再び議場に列席せしめなんだと申すことである、なせにかゝることを爲したのであるか云ふと、小雀一匹は議員の一身に取りては別に何等の影響を及ぼすものではない、それにかく無慈悲の行爲をなす所よりみると、萬一我が一身に少々にても影響のある問題に出會ふたら、必ず國家も國民も打ち忘れて、ごんなことを仕出すかもしれぬ、それゆへかゝる危険なる人

物は神聖なる議員の職に當らすことは出来ぬのであると云ふにある、古代の希臘國民はかゝる目出度い考をもつて居たものであります。

**セツシユフシヤ 撮取不捨** 【術語】

光明の中に鑷め取り捨てたまわぬを云ふ、御草本の左訓に「一たび取りて永く捨てぬなり攝はものゝにくるをわはへ取るなり」とあり、

**盲人と富士山**

或學者が富士の雪をほめて、言にも拙き筆も及ばぬ

唯あほぎみる不二の白雪

イヤハヤこれは／＼と驚くばかり、云ふたどて書いたとて中々及ばぬ不二の雪ちやと賛嘆したれば、それを盲目が聞いて一首の歌、言にも及ばぬ身には目にみぬも

**中々よしや不二の白妙**

と、目に見へぬのに富士の雪を賛嘆した、御和讃の中には「煩惱に眼さへられて撮取の光明みざれども」とあつて、光り輝く光明や撮取の中の模様のみへたなら、邪見の角もふりたてまい、我慢の頭も下るであろうに、何事も分らず拜めぬながら、「大悲ものうきことなくて常に我身をてらすなり」光明撮取の懐ろ住居とは何たる我身の幸ひであろうか、明いた目でみて氣をもむよりも

あかぬ盲目がましかひな

**句** 蝶々やまはりかへりて花の内

蝶々云ふものは菜の葉や芍薬の花に遊んでおるもので、「蝶々やねるもおきるも花の内」と、出て行てはかへり出て行てはかへり、ま

わりかへりくして花の中を遊んで居るもの  
 ちや、今我々が其通り、一念歸命の其時に攝  
 取光明の懐ろ住居の身にさせて下されたれ  
 ば、かうして此座へ參詣して居られる中にも  
 光明の中、我家へかへりて仕事をしておるの  
 も攝取心光の懐と、我身の果報がしられた  
 なら、御恩とふとや……………。

**醫諭** 離縁狀

箱入り娘が嫁入りをした、五六日すると親  
 の家へ休みに来た、娘の云ふには「私はモウ  
 再びかいる機はござりませぬ、夫の六ヶ敷ひ  
 のに姑の根性悪ひ、女は辛棒が大事とはかね  
 て聞いておりますれど、あの様な辛棒はとて  
 出来ませぬ、たとひ此身は尼になることも、井  
 戸へ身を投げて死するとも、かへる事は否に

なりた」と、泣く泣く親に物語れば、両親も  
 あの様に云へばよくの事であらう、それ  
 では仲人をたのんで縁を切りてもらおうと、  
 先方の家へ仲人がゆいて、右の次第を一々に  
 申せば、先方の夫は中々合點せず「男が女に  
 すてられたと云ふては顔が立たぬ、どの様な  
 事があるうとも離縁はせぬ、去状はかゝぬ」  
 ときばれば、其女は仕方がなる、たとひ外か  
 ら貰ひに来ても、去状の出ぬ間はどこへも行  
 けぬは女の因果、三々九度の杯したが身の  
 落度ちや、どこへもゆけまい、今彌陀をたの  
 み奉り、攝取の光明にかゝへられたもの  
 はこの如くちや、臨終の夕になりてから、極  
 樂まいりがいやちやと云ふ機になり、地獄へ  
 行き度ひときばりて見ても、さした勅命の盃

に、たのむばかりの御助けと御受をしたが身  
 の落度、飛んでもはねても地獄へはやらぬ、  
 無理な彼尊と思へども力なくして終る時、御  
 淨土へつれかへらにやおかぬとあるが攝取の  
 御手柄ちや。

**醫諭** 奉公人の病氣

他人の家に奉公しておるものが、奉公中に  
 病氣にかゝり勤めが出来ぬやうになつた、そ  
 こでこれはこうしては居られまい、家へ歸つ  
 て療治してみたいと思ふて、其事を主人に申  
 した、其時主人が「イヤ夫には及ばぬ、こゝ  
 で薬をのんで養生しておれ」と云はるゝゆへ  
 それは難有うござりますと落付いてみたれど  
 も、五日たつても十日たつても病氣がなおら  
 ぬ、そこで又郷里へかへりて養生せずはなる

まいと云ふ心がおこる、又主人が田舎へ戻つ  
 たら、醫者も不自由、薬も十分に飲まれず、  
 看病も届かぬ程に心配するには及ばぬ、何日  
 かゝりても大事なる、氣を長くして療治せよ  
 と云ふてくれると、これはマア何たる御慈悲  
 な御主人様ぞと、其時は喜んで落ついてねて  
 はみるが、又日數がたつとア、云はれても勤  
 めもせず此様に世話になつたり、醫者の薬代  
 拂ふて貰ふては濟まぬと思へば、斯うして寢  
 ては居られまいかの思ひが起る、それは何故  
 ぞなれば全體奉公人といふものは、我が働い  
 て勤めるので其家に住んでおるので其勤め働  
 きが出来ねば逐ひ出さるゝは當然のことちや  
 それなんぼ主人が親切に云ふてくれても、  
 其言をきいた時には落付いておらるれども、

又あとから斯うしてはおられまいかの案じが  
 すぐおこる、今がそれと同じことで、御回向  
 の信心の頂けてないものは、往生一定と思ふ  
 下からも我身の淺間しさに氣がつくと、これ  
 では淨土まいり如何であらう、まいられよう  
 かまいられまいかの心が生る、然るに御教化  
 を聴聞して、御慈悲の難有さを聞いてみます  
 れば、かゝるものを御見捨のなる御慈悲と、  
 一旦は落ち付くけれども、又懈怠が起りたり  
 淺間しい心中が生ると、又これではどうであ  
 るの心配がおこる、それはもと我が喜んだ  
 りつとめたりするので淨土へまいるのちやど  
 思ふ自力心があるからの事、然るに今の病人  
 に在所から眞實の親が来て、其方は此程病氣  
 になつたそうだが、また直らぬかサア今日迎

ひに來た程に家へ連れてゆくぞと、主人へな  
 がく介抱に預つた禮ゆうて、家につれかへ  
 り、寢間に床とつて寝させて貰ふた時の思ひ  
 はどうちや、百日病氣がなおらいでも、二百  
 日快方に向はいでも、此家に斯うしておられ  
 まいの念はおこらぬ、千日腰が立いても親の  
 眞實が心の底に届いておるゆへ、病氣がなお  
 らねばなおらぬ程、働きが出來ねば出來ぬ程  
 親の恵みがあればこそ此様なものが樂々と枕  
 をつけておらるゝと、病氣が悪い程唯親の御  
 恩を喜ぶより外はなぬ、今がそれと同じこと  
 で、たのむ一念如來の光明におさめ取られ  
 大悲の懷ロニ住む身になつてみれば、我身が  
 淺間しければ淺間しい程、如來の御慈悲がま  
 しませばこそ喜ばるゝのである。

因縁 その女の喜び

嘉永の頃に三河國にそのとよべる信仰の女  
 がありましたが、無我に法を喜び尊みますか  
 ら、同行が招きて御法義の話を承りたいと  
 云ふと、「私は何も存じませぬが、この墮ち行  
 くものを必ず助けるぞよとの仰せ一つを信じ  
 奉りて、善きにつけ悪しきにつけても御報  
 謝の稱名喜ぶばかりであります」と申さる  
 ら、皆人を聞いて喜ばれたさうです、或時  
 矢矧の橋の上にていへるやう「攝取の橋に不  
 捨の欄干いかなるのでも落ちやうかなる」と  
 云ふて喜ばれたとある。

因縁 親心と子心

徳川時代の話であるが、京都に親子暮しの  
 浪人がありたが、或時、親を京都に残してお

いて息子は江戸へ下りました、其後、幸便に  
 托して京都の親へ手紙を送りしに、左の歌を  
 詠んで書き添えた、

月出れば東國のことを思へかし  
 傾かば又思ふ都路

月が東山へ出たならば、ごーを私のことを思  
 ふて下され、西へ傾いたなら父上の事を思ひ  
 ませうと云ふ歌の意ちや、それを見て親は左  
 の如く返歌した、

月は出ずとも我はわすれじ

其方は月を縁として親の事を思ふと云ふか、  
 そうすると聞ならば親の事を思はぬのである  
 うか、恨めしき事の極みである、月が出すと  
 も我は忘れじで、月夜でも聞夜でも我は只の

一時も忘るゝ日間はなるぞよと云ふ歌の意ちや、同じ親子の間でも、子の親に對するご親の子に對するごは、これほどの差があるのである、今我々も御教化聴聞の縁がなければ、大悲の親様のことも忘れ勝なれど、大悲の親様は一念一刹那の御忘れなく御守り下さるのである、これを正信偈には攝取心光常照護と仰せられてある。

セツソウ 節操

【世評】

大節に臨みて善ふべからざる氣象を云ふ、

【世評】 モール議長の豪膽

十七世紀の頃、佛國にモールと云ふ有力なる政治家がありたが、國會の議長に推選せらるゝ程の人です、一、世の注意を惹いた人物である、一日、或議案に對して反對の意見

を演説し、雄辯滔々満場を壓倒しました、其時何れよりか一人の刺客、突然議場に闖入しモールの席につかゝり進み懐中より匕首を取り出して其胸に當て、「汝モールよ、汝の説を取り消さずんば、我れ汝を殺さん」と脅迫しました、然るにモールは泰然として「我が精神は汝の匕首の達せざる所にあり」と答へ毫も其説を翻す色がなかりたから、刺客は其豪膽に辟易し、手を下すに由なく、すくゝと遁れ去らうとして捕へられたとある、黃白の爲めに變節する現代の腐腸漢に、このモールの爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいと思ふ。

【世評】 初鹿野源五郎の妻

甲州に武勇の聞へある初鹿野傳右衛門が子

に源五郎と云ふものがあつて、武藝勇力父に劣らぬ程の腕を持つて居たが、彼の有名なる川中島の戦に、遂に戦死したのである、武田信玄は其忠死をあはれみ、且つ源五郎父子の名は敵國にも聞へて大に懼れられたものであるから、然るべきものに其名字を名乗らせ其妻に入夫させやうとしたが、もと傳右衛門は加藤駿河守の二男であつたので、重縁の義を以て、源五郎の從弟にあたる彌五郎を夫にするやうにと諭したのである、ところが源五郎の妻は大に驚き「我が夫は主君の爲めに忠死をとげたのに其妻たるものが節義を忘れてどうして二度他人の妻となられませう、思ひもよらぬ事でありませう、もしおし立て仰せられるなら、及に伏して死んで仕舞います」と

セツソウ

申切つたので、信玄は大に怒り、我は傳右衛門の武勇を愛して、その姓名を絶つまいと思へばこそ、かく入夫もすゝめるのである、しかるを何ぞや強情を申したて、にくい奴である、その義ならば潔よく自殺せよ」といつた信玄の夫人は三條殿の息女であつたが、この事を聞いて「貞女は二夫に見えずといふ事は正しい人道であるが、近ごろの世には、それを知るものが少い、源五郎の妻の如きは、昔の烈女にも耻ないものといふべきである、ドウして見殺にさせてならう」とて、信玄入道にさまゝ申なだめ、遂に自分の手元に召して養つたといふ事である、人情浮薄な今の世の婦女は、これを以て模範とすべきである。

【世評】 王醜々の貞烈

王醜々は元の關文興の妻である、陳吊の賊が反いて文興を殺した時、王醜々も亦賊の爲めに掠められて、今や辱めに遇はんとした其時王氏は賊を欺いて云ふやう、「しばらく待てよ、妾が夫の屍を葬つてそれから汝等の命に従はう」とて、やがて自身に薪を集めて火葬しながら、賊の油断を見すまし、いきなり烈火の中に飛び込んで焼死したので、賊は呆氣に取られて、其儘に止めた云ふことである、貞烈の婦人とは王醜々の如きを云ふのであろう、赤い信女の木魚講連中は、これを聞いて果して如何の感ありや。

松岡女史の操行

松岡女史は、名を小鶴假號を縞衣といつたが、播磨國神東郡辻川村の人で、孝貞なる烈

婦であつた、女史は詩文を善くし、かねて算筆にも達し、一子約齊が博學の評判を得たのも、全く女史の教養によつたのである、女史は明治六年十月十五日に死んだが、南望篇をだまき草、詩歌文稿各一卷の遺著がある、女史があつて寡となつた時、世間の人々が、「彼は今こそ操行を守つて居るが、後にはキツト醜態を演せるであらう」といつたので、女史はこれを聞いて憤りにたへず、自ら誓詩を作つてこれを神祠に掲げた云ふことである

歌

草も木も一つに落つる霜の中に  
かはらぬ松の色を見へける  
「歳寒くして松栢の凋むにおくるを知る」  
とか申しまして、春夏の間には草も木も皆生ひ茂りて、いづれも劣らぬ風情なれど、秋の

末よりやう／＼に枯れはて、霜に傲れる松栢の「ときわ高く見あげらるるのです、人は大節に臨みて屈せざるこそ、松栢の如くならねばなりませぬ」

センガイ 仙屋

名は義梵字は一、美濃武儀郡の人なり、臨濟宗を學んで筑前聖福寺に住する、三三十年、道化甚だ盛にして時々墨戯をなし奇警人を驚かすを以て今一休の稱あり、天保八年十月示寂す、壽八十七、

仙屋と聖福寺

多年研磨の功成つて故郷美濃國大垣藩に歸り或る寺に住んで居たけれど、時に藩政の紊亂甚だしく幾度元締役を更へても一向改革されず、益亂れ行くのを見て、  
「よからうと思ふ家老が悪からう  
元の家老がやはりよからう」

とやつて藩吏の怒を買ひ放逐さるゝこととなつたので、一人「傘をひろげて見れば天が下」  
傘をひろげて見れば天が下  
たとへ降ることも装は頼まじ  
と詠んで颯然元の古巢鎌倉圓覺寺に舞戻つた  
仙屋は時の儒者が造次にも顛沛にも仁義とか、禮智とか四角四面の事ばかり口にして居るのが氣に喰はぬので種々悪口を言つて居た、それを龜井昭陽は「ナニ此の坊主め何時かへコマシてやらう」と思つて居た、所が或某家のお客に同時に招かれた、一體仙屋は何時破れ衣を着て何處へでも行くので某家の主人は「和尚さん此度のお客はコレ／＼のお客で某々が來らるゝから少し美しい服装をし

て来てくだささい」と言つて来たから、和尚其の日はトツて置き衣に水晶の珠敷頗るすまし込んで行つた、初めてそんな様子を見た昭陽は大喝一聲「和尚何ぞ新婦氏の粧をなして来る」とやつた、仙厓はツカ／＼昭陽の傍に行つて、持つて居た扇子で昭陽の頭をボカんとやつて「此の善男子を生まんが爲に」と言つたには、さすが昭陽先生一言なかつたか。

**逸話** 超風脱俗の磔僧

仙厓が超風脱俗の傑僧であつたことは其の詩歌、書畫に明かに顯れて居るが己が宗のものが頻りに坐禪々々と口八ヶ間敷言ふのみ、真に其の道に達することの出来ぬのを笑つて、坐禪して人が佛になるならば

谷わくごう(墓)は佛なるらん  
又眞宗で御正忌の精進後にするまな板下しを  
昨日まで申上げにしまいたを  
今日はおろしてまな板とする  
と笑つてる。

**逸話** 仙厓の奇行

仙厓はよく留守を使ふ人だつた、或時懸意な人が縁先から「和尚さんお宅にか」と言ふと、和尚室の中から「和尚は留守だ」と返答した、所が来た人は和尚の聲を知つて居るので「あなた和尚さんぢやありませんか」といふと和尚「本人が留守だと言ふのだから間違はないよ」と濟したものだつた。

又仙厓は人に禮を言はぬ人であつた、そして其の言草が面白い「禮を言ふと折角受けた

恩がそれきり消ゆる様な心地がするからいつまでも恩を難有く思つて居るために禮を言はぬのだ」と

**逸話** 仙厓の書畫

仙厓が書畫に達者であつた事は今更言ふまでもないが、初めの中は眞面目な書方であつた、あの猿だか犬だか判明らぬ様なものを書く様になつたのは聖福寺に住んでからの事ださうなが、それはあまり人が頼みに來るからそれを避けるためであつたさか、所がそのをかしげな畫が頗る呼物になつて頼む人は益多くなり毎日々々筆を動かして居たと云ふ事或時の歌に、

うらめしや我隠れ家は雪隠か  
くる人毎に紙置て行く

**逸話** 仙厓と湛元

湛元和尚は仙厓の弟子で漢學などは仙厓よりも上であつたが仙厓の後を繼いで聖福寺の住職をして居る時本堂の修繕をするからとて檀家に寄附を請ふと生憎其の年は大に不作だつたので、明年にして被下」といふ人が多かつたが、湛元いつがな承知せんで「自分の先祖の位牌を祭つて居る本堂の修繕を待てとは何んだ、よし／＼そんな馬鹿には頼まぬ、此方にも考へがある」とて位牌を荒縄で縛つて外に抛り出したものだから門徒替をする人が出來たのを、仙厓の取倣してやつと治まつたものゝ家中の受けは頗る悪く、遂々島流しにされた位の男で随分亂暴な事をした人だつた、京都に遊學する時チカには仙厓に頼み悪

いので、崇福寺の和尚を介して頼つた、處が「宜敷頼みます」と仙厓の返答があつたこの事で湛元大喜び、早速身仕度をして仙厓の許に行き「此の度は種々御心配、難有う御座りました」と言ふと、仙厓イヤナリ湛元の頭をボカボカと擲つて「此の馬鹿奴、京都迄女郎買にうするか」と叱り附けたから、湛元驚いて崇福寺に行つて斯々と話すと崇福寺の和尚「そんな事はない筈だが」と仙厓を訪うた所が仙厓の言ふには一決して京學に不同意ではないが湛元がこん度歸つた時には最早私が擲る事の出来ぬ様に偉くなるだらうと思ひますから頭の擲り納めをしたので」とこの事であつた、湛元之を聞いて師僧の自分を愛し自分を信じて呉れる情に感泣して刻苦研學した。

逸話 仙厓と八代目團十郎

八代目團十郎が長崎よりの歸るさ、天下の名僧仙厓に一度會ひたいものだとして、博多に滞在して居て種々傳を求めて、和尚のお氣に入りの長公に頼んだ、長公早速引請けて和尚を訪ぬると「河原乞食には會はないよ」といふのを一寸でよいからと頼んで、其の翌日團十郎を連れて行くことに定めた。習日長公は團十郎と鹿白院に行つて、次の間で待つて居ると、和尚中々出て来ないから何をして居るんだらうと窺いて見ると爐火を起して居る、長公は「難有い、お茶の御馳走だな」と思つて居ると、いくら待つて居ても出て来ない、又窺いて見ると一人でお茶を飲んで居る、其の内二人共膝が痛んで来るので

長公堪り兼ねて「和尚さん一寸でよいから来てください」といふと「ウム今行くよ」と言ふ許りで一向出て来ない、暫くしてから突然襖を開けてヌツと入つて来た、團十郎「アツ」と見上げると仙厓は「何と言ふ大きな眼玉だ」と只一聲ヌツと奥に入つて仕舞つた、團十郎「ハツ」と平伏した、そして長公に向つて「御蔭で江戸土産が出来た」と大喜び、長公はアツケに取られて居つた、其の後江戸の團十郎の家にお江戸では市川二かはしらね其

仙厓和尚は九州博多の聖福寺にて多くの雲衲を養ひ、只管禪學を鼓吹しておられた、時に誰れ言ふとなく聖福寺の若い雲衲は博多女郎を買ひに出ると云ふ評判が高くなり、いづとなく仙厓和尚の耳に入つたが、和尚は格外非凡、電光影裡春風を斬る底の活禪僧であるから中々聞捨ててはおかない、成程考へて見れば若齡の學僧の事であるから、遊びに出るも無理はない様なものぢやが、併しこの儘に捨ておけば佛祖不傳の惠命を相續することが出来ぬ、此身今生に度せずんば更に何れにか度せんぞ、焦心苦慮せられ、一夜點檢と申して無提燈で寺の境内を巡回して其様子を探られた、前三々後三々と土塚の附近を檢せられたが何分にも土塚が高いので出入する箇

逸話

仙厓若齡の僧を戒む

つた、いつ書いたものやら。といふ仙厓の書いた軸が寶物として藏してあつた、

所も見當らない、處が寺内の眞裏の少し横の方、土地の工合が土塚の稍低きところがある、ハ、ア此處から出入するの、立寄り見ると、下に踏み臺一つおいてある、夜行をなすと云ふ評判のあるも無理はない、此形跡では必然遊びに毎晩出るに相違なし、これを改めさせるは正師家たるもの、本分ぢや、併しながら考へて見れば、今宵は幾人遊びに出でたるかはしらぬが、若し表向きにすれば今宵のものゝみ放逐せらるゝことゝなる、外のものゝても他の夜に遊びに行かない譯でもあるまいと、和尚の眼には自利々他圓滿の涙が充滿した、然らば今晚は見のがさんか、イヤ、後來の戒めにならぬ、然らばこの踏臺を取り片づけんか、イヤ、彼が歸り來つて

足でもくじきでもしては實に氣の毒ぢや、と云ふてこの踏臺まで其儘にしておかれまいと一策を案じ、其踏臺を取りかたづけ、已れ自ら踏臺ならんと老體をも顧みず、寒風の身に徹するも意とせず、體を屈めて雲水の歸り來るを待つて居た、時正に二時と思しき頃十五名程のもの、のこゝ歸つて來た、例の如く先づ一人土塚に上り、足を下して踏臺を探るに、なんだかぐりぐり動くゆへ、後の僧に告て云く「貴僧は踏臺と間違へて、石地藏でも置いたのでもないか」と、僧の曰く「否とよ、君はあはて居るに非ずや」と、恐るゝ景色なく、大丈夫、しつかりした踏臺だから早く下りよと云ふより、どつと飛び下りると仙崖和尚、何んぞ堪へん、血氣の青年がグツ

ト踏み下ろしたものだから、ギャふんとたをれた、僧達は「人だせ」と云ふより、衆僧は飛び下り來りて其様子を見れば、コハ仙崖和尚にてありし、時に和尚、慈顔を以て諭して曰く、「拙僧が今こゝに待ち居たるは、ドカ御身を佛にしたいと思ふ衷情の婆心に出でたものである、これを發表すれば、御前達は下山（放逐のこと）じやけれども、野衲の衷情は、今後の改心を主眼とすれば、今宵の事他言をすることなく、明日より專一辨道せられよ」と涙ながらに訓誡せられた、これを聞きたる衆僧は、大に其師家の婆心に感じ、向後其あしき舉動もなさず、このこと一山の大衆の模範となり、爲めに爾後一人として夜遊するものなかりしと云ふ。

仙崖の和歌

仙崖和尚は扶桑最初の禪窟たる筑前博多聖福寺の大和尚にして、學徳一世に高く、而も奇警飘逸、宛も一休和尚の如く、時の人、彼をよんで今一休と稱せり、今其遺稿たる「捨小舟」の中より和歌二三を抄録す、

述懐

繫れてしばし浮世に墨染の袖の湊の捨小舟かな

早梅

手折らずも今朝咲きそめし一枝は梅の主心に心備へむ

佛

佛とは世にむすぼれのあればこそむすぼれなくばなに佛とは



鶯を聞いて  
大説くことも聞くこともなき我法を  
花の木蔭に鶯の聲

ゼンギヤウホウベン 善巧方便

善く衆生の機に随ふて化益することなり、高僧和讃に  
「釋迦彌陀は慈悲の父母種々に「ローロー」とあり、

歌 何事につけてか世をば厭はまじ

下山 憂かりし人ぞ今はうれしき

これは西行法師の歌であります、眞の自  
覺の起つた上から、昔の事を振りかへりみて  
心の底から感謝をのべた歌である、自覺のお  
こらぬ先こそ、あの人は私を苦しめたの、あ  
の人は私に悪口を云ふたの、あの人が無情で  
あの人が無禮のと、色々人を恨みましたが  
それらの困難や業みが縁となつて、この強情

な娑婆執着の深い私に自覺の念を呼び起して  
如來の御慈悲の門口まで無理やりにせりつけ  
て下つたと思へば、憂かりし人ぞ今はうれし  
き」で、却つて其人達に向つて御禮を言はね  
ばならぬ程である、私共がいろいろの困難に  
出會ふてそれが縁となつて後生こそは一大事  
なりと云ふ自覺が起つたならば、それは皆如  
來大悲の御方便である「幾度か御手にかゝり  
し菊の花」

句 宿かさぬ恨みもはれて野邊の月

宿もたぬ乞食が、ドーン一夜の宿を借して  
下されど、いくらたのんでも素氣なく断はら  
れた、そこで乞食の思ふやう、ア、人に親切  
はないものぢや、これ程にたのむのに、軒端  
位は貸してくれてもよかりそうなものぢやに

それさへ聞き入れて下さらぬとは……と、  
非常に人の不親切を恨み致方なく野宿をしま  
した、さて夜半頃になると云ふと、玲瓏たる  
月が東山へ上つた、フトあたりを見れば爛熳  
たる櫻花が咲き亂れて居る、其絶景をながめ  
て、宿かさぬ恨みもはれたと云ふがこの十七  
文字の意である、人生の行路には種々無量の  
出来事のあるものです、されど笑はれたも謗  
られたも、貧困も病氣も落第も別離も、皆こ  
れ五慾の夢を見ておる我々に後生大事の心を  
よびおこさせて下さる、爲めの大慈善巧の御  
導きであると思へば、不幸の出来事を踏み臺  
として如來の懷ろに飛びこまねばならぬので  
ある。

譬喩 獅子の育兒

ゼンギヨウホウベン

獅子が兒を育てるにも、我兒を健全にして  
雪にも雨にも惱まず、断崖絶壁にも恐れぬや  
うな、確かりした精神にする爲めには、幾度  
も巖頭から谷底につき落とすと云ふことで  
あります、我子を谷底につき落とすのは、大  
なる親の御慈悲である、私共がいろいろの困  
難に出逢ふて、それが縁となりて「人間は不  
定のさかひなり、極樂は常住の國なり、され  
ば不定の人間にあらんよりも常住の極樂を願  
ふべきものなり」と云ふ自覺が起つたならば  
それは皆如來大悲の御方便である。

譬喩 盲兒と親

庖瘡で眼の見へぬ子に、美しい着物ぢやの  
又繪ぢやのと云ふものを枕元へ飾りても、そ  
の子が見る事が叶はぬゆへに、親が目が見る

る小供を呼びよせて、この繪紙みよ、この菓子みよ、この美しい着物の模様を見よと、親が見せてくれるのは、其子に見せる爲めではなる、眼の見へぬ子にそれを聞かせて、其許も精出して薬をのめば、追付眼が開いて見らるゝ程に、親の云ふこと聞いてはやくようなりてくれよ、見ぬ子に聞かせる親の慈悲、今我人は煩惱に眼さへられて浄土を拜むことがならぬゆへ、此觀經で浄土の莊嚴を説かせられて、智慧の眼の開いた善人に浄土の莊嚴を拜ませて下されたは、智者や善人に見せたいのではなる、世の盲冥とて浄土の片端も拜まれぬ今日の我人に、かゝる尊い浄土があるぞ、如來善知識の教へをきいて後生を願へ頓て浄土へまいりて百福莊嚴を拜めよと、拜

まれぬ私に浄土まいりを願はせたいの如來の大悲、實に種々に善巧方便をなして下さるゝ御心盡を思ふてみますれば、尊み喜び報じてもあきたりのなる御恩徳。

**セッコウジ 善光寺** **【寺名】**

信濃國長野市にあり浄土天台二宗に屬す、欽明天皇十三年に百濟國王より獻じたる觀陀如來を本尊とす、

**【因縁】** 月蓋長者の因縁

釋尊の御時代に月蓋長者と云ふ大福自在の人がありました、七珍萬寶に不足はなけれども、子と云ふは娘一人よりなかりたから、蝶よ花よと育て、おりましたたが、二八の春を迎へた時に、非常なる惡病にかゝり正氣を失ふ程の重症に陥りた、耆婆と云ふ名醫をたのみて治療を請ふたれど、耆婆の云はるゝには、

四百四病に治らぬ病はなけれども、此病は惡魔が六根をなやます病ゆへに、針灸藥の療治にはかゝらぬとて斷りせられた、世の中に病人を醫者が見離した程の心淋しいことはなる天竺は廣げれど貴方の御手に叶はねば死なねばなりませぬが、私しの娘可愛の心を御酌取り下されまして、何卒治る方便は御座りますまいかと泣き、御たのみ申しましたら、耆婆の云はるゝには、此上たのんで見るは釋尊より外はなる、佛法の威力で助かることがあろうも知れぬから佛をたのめよ」と申された「それは難有う御座れど、私は元來外道の法を信じまして、是迄佛を敵の様に誇りて居りました、それゆへ托鉢に御出なされても米一つかみ差上げたこともござりませぬ、誠に不義

理なことばかりをしておりますから、如何に病氣がつかいかとて、どうもたのみには行かれませぬ、よし又行いた處で平生の御憎しみで治してやろうとは仰せられますまい」と云ふ、「イヤそれは大きな了簡違ひで佛と云ふものはそんな最負偏頗のなわものぢや、平生近づいて聽聞するものより、汝の如き邪見なものを強いて不便に思召すものであるから、兎や角と云ふて居る中に娘の命がなるほどに、急いで御尋申してみよ」と勧めたれば、子故の闇に迷ふては人目も耻も打忘れ、如來の御前へまいりて、何卒御慈悲にて娘が命の助かる様にして下されど願ふたれば、仰せらるゝ様、其難病を治するには、西方浄土の阿彌陀如來をたのむより外はなるで、汝家にかへり

西に向ふて南無阿彌陀佛を稱へよと仰せられた、長者は喜んで家にかへり、西の椽に檀を設け、莊嚴して、七日の間南無阿彌陀佛々々々々稱へたれば、三日目に彌陀如來は觀音勢至を左右に伴ひ、光明の中に顯はれて長者の家を御照なされたれば、娘を始め同じ枕にねておる五百人の待女がみなことごとく全快した、そこで長者は娘の病氣の全快したるうれしさのあまり、かゝる尊き如來の御姿を人の知らぬは残り多い、ご一かしてこの御姿を末の世まで御残しを願ひたいと御願申したゆへ、釋尊は目連尊者を龍宮へつかはし、閻浮檀金をとりよせ玉ふて、西方よりは阿彌陀如來の光明、此方よりは釋迦如來の光明、二尊二佛の光明の中へ、すつくりと顯はれた

まうたが今の善光寺の如來様である。善光寺の如來は、昔は今の處より遙か南の山の奥で、飯田の城下より少し左へ這入ると元善光寺と云ふがある、之を座光寺と名ける如來様の御臺座にした曰と、後光とが殘らせられてある、御眞體の如來様が今の善光寺へ遷らせられたゆへ、其跡を座光寺と名けたのちや、本田善光が始め難波の堀江から如來様を御供申し上げて、わびしき埴生の小屋に御安置申して居られたが、餘りの勿體なきに、近所近邊の人を勧めて新に御堂を造り、夫へ彼尊を御遷り申上れば、其夜の中に又元の如く御歸り、斯の如くする事三たびに及べども、三度ながら元の西の庇の白の上に御歸

りなされた、其夜如來様から善光への御告に南無と云ふ聲にひかれて根芹つむ賤が伏屋に向ひこそすれ善光よく聞けよ、奇麗な處や清淨な處が望みならば、極樂淨土の檀林寶座に居るけれども、それが望みではなぬ、月漏る埴生の小屋でも、南無阿彌陀佛の聲の聞ゆる其方の枕元に居る程に楽しい事はなぬぞよとの御告でありた。

因縁 牛にひかれて善光寺まいり  
信州更科郡竹間村のほごりに慳貪邪見な老婆がありて、善光寺の側に居ながら一度も善光寺の如來様を拜みにまいりたことがなぬ、或時川端で木綿を晒して居たれば、大きな牛が來て其木綿を角にかけて行くゆへに、とら

れてはたまらじとて、牛の跡よりおいかけに行きたれば、其牛が善光寺の御堂へ這入り厨子の中へ飛びこんだ、そこで無二無三に内陣へ走り込む處を、堂守りの坊主衆が「これは何事であるぞ、狂人が亂心ものか」と咎められたれば、老婆の申すやう「私が川端で晒して居た木綿を牛が來て角にかけ逃げて來たゆへ、追ひかけてまいりましたら、あの御厨子の中へ這入りたゆへ、取返しに行くのちや」と申せば、御堂番の僧衆の申さるゝには「これはあられもなる、あの御厨子は牛部屋ではなる三國傳來の阿彌陀如來ちやと云ふてきかせても、なか／＼合點せぬゆへ、止むを得ず御厨子の戸を開いたれば、一光三尊の靈像光明赫耀として御座なされ、老婆のさらし木綿を

ば御首にまどうて居らせられた、其時初めて  
 如來の御相たを拜み、如何なる慳貪邪見な悪  
 婆も、如來の御方便と云ふことに合點がゆき  
 菩提心をおこし、彌陀の本願をよろこぶ身と  
 なりたごある、これを俗に「牛にひかれて善  
 光寺まいり」と云ふ。

**ゼンシキ 善知識** 【術語】

煩惱の病消を知り、これに的中すべき妙法の藥餌を興  
 ふる名醫の如きを云ふ、圓覺經異疏に「知眞識妄  
 知病識藥」とあり。

**談話** ビスマークと醫師

獨逸のビスマーク、或時病氣にかゝつて醫  
 師を招いておきながら、さて其醫師が來て診  
 察を初め、いろ／＼容體など尋ねますと、う  
 るさがつて一向返事を致しませぬから、醫師  
 は氣色を損じ「それ程醫者に容體を云ふのが

御いやなら、私は診察を御免蒙りますから、  
 其代りに獸醫でもよんでみて御貰ひなされ」  
 と、小言を云ふたご申すことがある、病氣を  
 癒してもらうには其容體を醫師に打明けて話  
 す必要がある、我等は無明業障の病人であ  
 りますから、善知識の大醫王の前に跪いて  
 日頃のあやまれる心中を心底に残さずして、  
 改悔懺悔を致さねばならぬ。

**談話** 來てつぐる人なかりせば衣手に

かゝる玉をも知らずやありけん  
 教へて下さる善知識がなかりたなら佛智は  
 得られませぬ、八百屋お七の芝居をみれば、  
 各かねて承知の如く、寺の扈從の吉三郎に  
 逢ひたいばかりに、八百屋のお七我家に火を  
 つける、終にお上へ捕へられ吟味の時に、公

儀の役人は憐愍を以て「こりやお七そちは火  
 をつけたではあるまいが」と仰せられても、  
 「いわ／＼私は火をつけたに違ひござりませ  
 ぬ」と云ひつゝのる「そちの年は十四であらう  
 がな」と云ふても「いわ／＼十五でござりま  
 す」と云ひつゝのる、お七も命はおしい、助か  
 りたいば腹一ぱいなれど、どう／＼火罪さき  
 まりて火あぶりに遇ふたのは、助けたひの御  
 慈悲ちやほごに、火を落した粗相といへ、十  
 五ではなひ十四と云へと教へておくれる取次  
 の善知識がなかりたからちや。

**歌** 長閑なる時こそなけれ花思ふ

心のうちに風は吹かねど  
 長閑なる花の時節、山も里も一面に咲きみ  
 だれたる花盛り、櫻桃李梨山吹のかざりを

なせし時分は、たい餘のことは思はぬ、ご一  
 ぞ風が吹かせともない、少しの嵐もいやちや  
 もの、花に手をあてるやうに思ふから、心の  
 うちに風はなけれども、我心のせつなさは、  
 斯く思ふと云ふ歌の意ちや、

像末五濁の世となりて 釋迦の遺教かくれしむ

彌陀の悲願ひろまりて 念佛往生さかりなり  
 彌陀の本願はいつにかわりはなけれども、若  
 不生者の御誓は今此末代にあらはれて、一天  
 四海に比類なき南無阿彌陀佛の花盛り、京も  
 田舎も一面に、他力本願の花がひらき、平生  
 業成の香ひのみち／＼た只今の時節、されど  
 同行方の胸の中、不法不信のありさまを御覽  
 なされて、胸もはりさくやうに思召すが祖師  
 善知識の御慈悲である。

歌

寝てあかす人やうらみん子規  
 我れのみおきておどろかさずば  
 夏の夜ふけて子規の幾聲も鳴いて通るを、  
 たま／＼目の覺めた人が聞いて、心に思ふや  
 う、かほど珍しい郭公を、我ればがり聞くは  
 残り多いのみならず、寝ておる妻が後で我を  
 恨むであらうと思ふて、傍に臥して居る妻  
 をゆすりおこして、今子規が鳴いた、はやく  
 目を覺まして聞けよとおこしたと云ふ歌の意  
 夏の夜に喩へたは無明長夜の暗き迷ひ、子規  
 の聲は善知識の御勸化、たま／＼目の覺たる  
 は、宿善到來したる人が閉塞て居たる不法義  
 の目を覺したるが如し、目のあかぬ妻と云は  
 佛とも法とも前後を辨へざるが如し、今宿善  
 開發の人、無上の御法を聽聞申してかほど結

構なる御教を、我ばかり聞て喜ぶは、残り多  
 し、不法義の寢入はなの家内の人か、跡にて  
 恨みなきやうに、残らず聽聞させたしと、親  
 は子をすゝめ子は親を催促し、夫にても妻に  
 ても、兄弟にても主人にても、一族縁者友同  
 行に至るまで、無法義の目を覺さぬ者あらば  
 遠慮なく皆ゆすり起してとも／＼御法座へも  
 参りて、一味の御安心に本つかねば未來も又  
 此世の如く、同じ淨土へ寄合て、一つ蓮の臺  
 に登るべし、若不法義の眠り深く、人の勸め  
 も耳へ入らず、娑婆の一生を一と寝入りにし  
 て、地獄へ落る夜の明け頃眼を覺して後悔す  
 ることも、さら／＼其甲斐はあるまじきことな  
 り。

句

知らぬ道石がもの云ふまわり角

知らぬ山路へさしかゝり、日は暮れかゝる  
 連はなし、道は幾筋もある、はて困つたこと  
 ぢやと思案しておる時に、生憎道するべの石  
 が立てゝある、「右は山道左は京道」と彫りつ  
 けてあるのを見て、やれ／＼うれしやと安心  
 して左の方へ向つて歩みを進めと云ふ、今善  
 知識の御教化の道しるべは臨終捨命の日暮れ  
 時にあたり、本願信じて念佛申せの御勸めの  
 聲がきこゑるなりやれうれしやと安心がなら  
 る。

ゑない檢校でも、手引があると云ふと蛇にお  
 ぢると云ふ句のころ、今我々も善知識の御  
 手引がなくは、菩提心の尊さも地獄のおそろ  
 しさも氣のつく身ではなけれども、それを氣  
 をつけて下されたが善知識の御手引の御蔭で  
 ある。

譬

猿と猿屋

同行は猿の如く善知識は猿屋の如く、猿に  
 お染久松の芝居を教へても、猿屋の目がはな  
 れるとそれてしまふ、同行も信決定したやう  
 でも、善知識の御教化の目が離れると心猿飛  
 んでどこへかそれてしまふ、そこを善知識の  
 御手ゆるめのない御教化に引き立られて、淨  
 土まいるの藝をするのぢや、されば善知識は  
 至極必要である、善知識なくば我等はいつも

句

檢校は手引があるで蛇におぢ  
 「盲目蛇におぢす」と云ふ俚諺の如くで、盲  
 目は足元に毒蛇か居ても一向平氣なもので、  
 之を恐れることを知らぬ、それゆへ時々毒蛇  
 にかまれて難儀をするのぢや、然るに目の見

えなくば我等はいつも

山猿同様ぢや。

善信尼

【人名】

俗名は鞍部島女と云ふ、鞍部村主司馬達等の女なり、敏達天皇十三年惠便法師に従ふて得度し善信尼と云ふ時に年十一、これ我國に於ける僧寶の嚆矢なり、

因縁

日本に於ける僧寶の始まり日本佛教史上に於て特筆大書すべき珍現象は、善信尼の得度を以て僧寶の先頭第一なりし一事とす、今日本書紀の意によりて其大要を述んに、善信尼俗名は鞍部島女と云ふ鞍部村主司馬達等の女なり、敏達天皇の十三年九月に、鹿深の臣、佐伯の連、新羅より彌勒の石像及び佛像を齎し來る、蘇我馬子之を請ひ得て祀らんとし、播磨より修行者惠便を請じ島女を度せしむ、島女時に十一歳なり、出家して善信尼と云ふ、これ我が國に於て出家せ

るもの、始りなり、同時に漢人夜善の女豊、錦織臺の女石、惠便につきて出家し、豊は禪藏尼、石は惠善尼と云ひ、共に善信尼の弟子となる、用明天皇二年六月、善信尼等馬子に請ひて曰く、出家は戒律を以て本とす、百濟に航して戒律を受學せん」と、崇峻天皇元年に馬子の意を得て、百濟國使恩率首信等に隨ひて同國に航し、同三年三月に歸り、櫻井寺に住す、我國の出家にして戒律を受學するもの之を始めとす、我等は善信尼の求法の念厚くして、海外に航して戒律を修めんとするの志を壯とするものなり、善信尼示寂の年時を缺く。

センシヤクシウ 選擇集

【書名】 具には選擇本願念佛集と云ふ源空聖人の選述なり、

忠臣蔵の判官切腹

忠臣蔵の判官切腹、九寸五分を前におき、力彌々々由良之助はまだか」と問へば、「いまだ參上仕りませぬ」と云ふ、暫くためらひて「力彌々々」と呼ばば「由良之助はまだ參上仕りませぬ」と云ふ、ア、合はひで残念と、やがて短刀逆手に持ら引回さんどす處へ、花道かちバタ／＼とにじりよる、「由良之助か遅かりし定めて仔細聞たであろう」と、短刀スラリとぬいて引回し、「由良之助の九寸五分は汝への形見にゆつる」と云ふ一言に、それと云はねと我が鬱忿を晴らせよと云ふにまさりし主人の一言、忠臣無二の由良之助、ハアツト押頂き、きつさき守り血をなめ無念の涙はら／＼、次の間に一家中片

唾を呑んでつめ合ふたれど、恨みの九寸五分を下されたは由良之助たつた一人、吉水の一家中三百八十餘人の御門人はありたれども、選擇集の九寸五分汝へ形見さまのあたり下さされたは我祖御開山たゞ御一人、あの由良之助は表は酒宴遊興にふけり情弱にみせかけても、心の内は大盤石、竹に積りし雪をみても敵を欺く力彌の異見、御開山は表は肉食妻帯の愚かな禿とみせかけても、葦原の鳥を御覽なされても念佛弘通の助縁となされ、おのれやれ疑の首きりて此度は極樂へ連れ歸らんと心の内は金剛堅固。

センシヤクホンゲワン 選擇本願

【術語】 勝を取り劣を捨つるを選擇と云ふ、定散の賭行に對して弘願念佛を指すなり、

豆腐

正客は老人にて其口中はは一箇の齒もなき人ごせよ、稀に此人を迎へるについで、主人さまへ心に心を配る中に、第一たべもの、田舎の事なれば、手近く牛房蓮根など数々はつくりてあれども、それはさしおき、酒屋へ三里豆腐屋へ五里、五里が六里でも厭はず、使を立て、豆腐を取りよせる、正客は我れくのこと、齒がなくて餘の物の喰へぬとは、罪惡のふかき散亂の甚しき、惡をすて善を修むるの行も、心を調べて觀念をこらすの行もたへて及びなき譬へ、主人の心配はかゝる者に相應する安き御法を、五劫の思惟に案じ出させらるゝ阿彌陀如來の御意づくしに喩ふ、手近くにありあふ作物とは萬善萬

行に喩へ、その萬善萬行は我等に不向なりとて選り捨て、十方淨土の中よりぞ本願選擇攝取する、諸佛の誓願海中より専ら名號を稱ふるの一行を選び出し、之を行法の法則として發させられたる念佛往生の願、はるく取り寄せたる物體は豆腐、餘の物をさしおき豆腐を求めたる心はさしおき主人の深切、自餘の行は差おかせられ南無阿彌陀佛にて御定め下された其思召をいへば法藏菩薩の大悲心餘のもの、食へぬ老人に齒のないながらに食べられるやうの御心配とは豆腐の其儘を主人の深切と味はねばならぬ、何れの行も及び難き身なれば地獄は一定住家ぞかし、何れの行も及び難いまゝにて我が計ひもいらす、稱へらるゝ南無阿彌陀佛にて極樂へ迎へんとの御

誓を聞かば、名號の一行にて御助け下さることおぼ、大悲大願の不思議に助けられまいらせて、生死を出づる迷ひ離れさせて頂くぞと信じ奉るゆへに、信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起す」と御示しあらせられた。

乳母の褒めすぎ

或處に我が育てたお姫様をほめる乳母がありて、「私が育てたお姫様は、髪のはるぎわは富士のやう、丹華の唇、蛾雪の齒、腰は束ねたる糸の如く、手足の爪は尋常に、目も細々として御器量がよゝ」と云はれた、其喩を聞く人が云ふには「其方のいふ通りなれば随分の器量ちやが、併しながら残り多いは目の細ひのが惜いことちや、女の目には鈴をは

れと云ふゆへ……」と云ふたれば、彼の乳母はまけぬ氣になり「いゝ一方の目は皿ほど御座る」と云ふた、あまり褒めすぎて片輪者にしてしまつた、過ぎたるは及ばざるが如しとは實にこの事であらう、すべて物に程度と云ふことが肝心である、西山の安心は過ぎたる方、鎮西の安心は及ばざる方で、共に選擇本願の御心を得ておらぬのです、選擇本願の御心を得て御ねんごろに御勧め下さるゝは獨り我が淨土眞宗ばかりです。

セントウ 善導

人名

姓は朱、泗州の人なり、隋の煬帝大業九年、佛滅後一千九十二年を以て生る、觀經疏往生禮讚等の著あり、眞宗にては七高僧の第五祖と崇む、唐の永隆二年三月入寂、年六十九、

善導大師と金剛法師

善導大師が華嚴の大徳金剛法師と問答なされたことがある、金剛法師は後ろに釋迦の像を安置して机の上に四十華嚴の寶典を開きたまひ、善導大師は後ろに彌陀の像を安置して机の上に三部四卷の妙典を開きたまひ、釋迦彌陀二尊を保證に立て、諍ひ玉ふた、其議論の様は、右から問へば左で答へ、前から問へば後ろへ抜け、問つ答へつ答へつ問つ、中々容易に勝負はつかぬ、數番の間答に及ばれた末、善導大師は大聲をあげさせられ「法師暫く御待なされよ、なるほど華嚴大乘の法も廣大にして、上代にありては衆生利益きわまなし、然れども末世の衆生の根機に叶はざれば、今日今後に於ては露いさ、かも利益はなむ、釋迦如來の御時代でさへ、初頓華嚴のそ

のときには、二乗の大衆は如響如啞にけたではなむか、況んや五濁惡世の我等が聞いたて、雲に架橋も同様であらう、彌陀の本願は、當來之世救道滅盡我以慈悲哀愍特留此經止住百歲其有衆生值此經者隨意所願皆可得度と仰せられ、智者も愚者も善人も惡人も、末法萬年の末までも、無量の衆生を濟度なされ下さるゝは、唯この萬行圓備の嘉號たる南無阿彌陀佛の一法ばかりちやと、詞をつくして仰せられたら、金剛法師は煮湯に水をさしたる如く、一言の下に悔ひ改めて念佛門に入られたとある。

善導大師と京姓

善導大師の御時代に、京姓と云ふて長安に住せる放逸無慚の徒がありまして、殺生を

以て業として居ました、善導大師長安にありて衆生濟度し玉ふゆへ、人々念佛を稱へて不善をなさず、故に殺生も自ら止むやうになりましたが、京姓は大に之を恨んで遂に大師を殺害せうと企て、自から刀を持ちて其寺に到り大師に面會を求めました、大師は左右なく立ち出で玉ひ、京姓に向ひて「汝は惡人の京姓なるか」と仰せられ、西方を指し玉へば、淨土の姿が忽然と現じました、京姓之を見て大に驚き、即ち回心懺悔して深く念佛に歸し、佛恩を喜びましたが、彼れは其後念佛相續して、臨終には瑞相をあらはしたとある、ケ様なる殺生好きの惡人でも、攝取したまふが彌陀大悲の御誓願の力であります。

ゼーナ 禪那 【術語】

靜慮と譯す、世間の俗縁を離れ、心に繫累を斷つを云ふ。

禪話 三十棒

臨濟、黄檗に問ふ、如何なるかこれ佛法的々の大意、藥即ち打つこと三十棒、斯くの如く、三度問ふて三度打たる、臨濟之を疑ふて即ち辭し去つて、大愚の處に到りて問ふて曰く、それがし如何なるかこれ佛法的々の大意と三度問ふて三度打たる、過ありや否や、大愚の云く、黄檗與麼に老婆親切なり、備が爲めに徹惛す、什麼有過無過を問ふや、臨濟之を聞いて言下に大悟す、これ臨濟大師が黄檗の處に三十棒を喫却したと云ふ、名高き話である。

禪話 柏樹老師



或る人が高津柏樹老師に參じて悟る處あり  
 夢さめて見ればはづかし寢小便  
 とよむだ、これを黄檗の萬丈和尚がみられて  
 耻かしと未だ夢さめぬ寢ほけ坊  
 と云ふて叱かられたといふことである、耻か  
 しと云ふ習氣がありては駄目だ。

**禪話** 拔隊と月庵

鹽山の拔隊と但馬の月庵と組打の時、一人  
 を組み伏せみれば掛絡をかけたるゆへに、上  
 より「汝何宗」と問ふ、下より答へて云ふ、  
 「月と見て指すことなかれ、また上より「如何  
 なるか劔刀場の一句」と問ふ、下より「香爐  
 上一点雪」と答ふ、又「上より消へて後如何に」  
 と問ふ、下より答へて云ふ「とくれば同じ谷  
 川の水」そこで悟りたる武士をむざく殺す

は如何と思ひ、引き起して助けたとある。

**禪話** 一休禪師の生靈まつり

或人、一休禪師に向ふて尋ぬるやう、「七月  
 には諸宗一統の生靈祭をするに、禪師ひと  
 り營みたまはぬは如何に」と尋たれば、其時  
 の答に、左の歌を詠せられた。

山城の瓜や茄子を其まゝに

手向となすや鴨川の水

山城の國中の田地につくりたる瓜茄子、鴨川  
 に流るゝ水、これを其儘手向けるが一休の生  
 靈まつり、わざく佛前棚をかざり、瓜茄子  
 をそなへ、手向するに及ばぬと答へられた、  
 これは隔歴を離れた禪宗の見識を言ひあらは  
 されたものである。

**禪話** 高宗皇帝と圓悟禪師

床の高宗皇帝が圓悟禪師に問はるゝに「朕  
 素より卿が禪道の高妙なるを知る、得て聞く  
 べきや」と、圓悟其時奏して曰く、「陛下、  
 仁孝を以て天下を治め給ひ、率土の生靈も咸  
 な衣被を蒙る、草木昆虫も雖も各其所を  
 得たり、これ佛祖所傳の道なり、此道の外  
 別にあるなし、若し別にあらば佛道にあらず  
 と申されたとある、法華經にも「一切の世間  
 民を安んじ物を濟ふ、これ諸佛の道なり」とあ  
 つて、佛道と世間の道と決して二物ではない

**禪話** 惠照大師と四料簡

臨濟惠照大師、晚衆に示して曰く、或時は  
 奪人不奪境、或時は奪境不奪人、或時は人  
 境俱奪、或時は人境不俱奪と、時に僧あり  
 問ふ、如是奪人不奪境、大師曰く煦日發生し

て地に舖く錦、嬰孩髪を垂れて白きこと糸の  
 如し、僧曰く如何これ奪境不奪人、大師曰く  
 王令已に行はれて天下に偏し將軍塞外に煙  
 塵を絶す、僧曰く如何これ人境兩俱奪、大  
 師曰く并汾絶信獨處一方、僧曰く如何是れ人  
 境俱不奪、大師曰く王寶殿に上れば野老謳詠  
 す。

**釋** 四料簡の新釋

無邊俠禪渡邊子爵、或時臨濟の智識に向つ  
 て、我に四料簡の新釋ありとて左の如くもの  
 せられたとある。

如何是奪人不奪境

答へて曰く、

鐘は鳴りやせぬ、撞木がなるよ

撞木がなければ、鳴りはせぬ

如何是奪境不奪人

答へて曰く、

鐘が鳴るのよ、撞木はならぬ

鐘がなければ、音がせぬ

如何是人境俱奪

答へて曰く、

鐘もならない、撞木もならぬ

鐘と撞木の間がなる

如何是人境俱不奪

答へて曰く、

鐘もなりません、撞木もなるよ

鐘と撞木で音がする

ボーン

ゼンラン

善鸞

人名

親鸞聖人の第三子にして慈信房と號す、一宗の教義に反する所あるを以て法を嗣ぐを得ず、相模越前等の地

に流瀝し、弘安九年三月奥州大綱に寂す、壽七十、

因縁 善鸞上人の御勘當

親鸞聖人の御病氣をき、傳へて、御長男の善鸞様が、遙々北國より御上りなされたは霜月二十五日の夜でありた、裏の雨戸を御叩きなさると云ふと、妹、御の彌女様御出ましなされ、御兄妹が久振りの御對面「オ、これは何方かと思へば兄上様か」と仰るなり善鸞様、これ、彌女、父上様の御病氣とき、我は上りて來たが御様子は如何であるぞ、御老體のことなれば何れ今度は御往生であろうと道路の風説、きくより急いで上りて來たは外でなぬ、何卒御存生の中に御勘當御免に預り、一日たりとも御介抱と急いで上りたこの善鸞、何卒兄妹の好しみに、御勘當御免ある様御詫

の程をたのみ入る」との仰せに、彌女様も御最もに思し、早速御父公御開山様の御枕へ行いて、右の趣き御願になりますと、御開山は重き御頭りを舉げたまい「野に住む雉子夜の鶴、子を思はぬものはなる、我れとても善鸞不便とおもはぬではなけれども、廢立の正意を傳へる親鸞が、廢立明かならぬ善鸞を、往生間近き只今に至り、恩愛の爲めに勘當を許したかと、聞く人爰に、過を生じ、後生の大事を仕損するならん、數多有縁の御門徒と善鸞一人とは替へられぬぞ、再び善鸞がことは云ふべからず」と、仰せによりて彌女様、障子引き明け雨擔まで御出ましなされたら、善鸞様擔の下にて立聞したまふ「定めて様子は御聞き取り勘當御免は叶ひませぬぞ」と

ではあろうが彌女殿、モ一度願ふて下されたい」と仰せられる聲に御開山「これ彌女そこ何の用事があるはやくこゝへ來たまへ」と仰せに内に御這入なされた、善鸞様は大聲あげて泣き玉ひ、「はるく、上りて來たれども勘當御免の願も叶はず、障子一重内と外、御聲はこゝで聞きながら御姿さへも拜まれぬか」と男泣きに泣かれた、御開山は聲高々と御稱名どうと、御免はなかりたぞや、これ全く今日、我々に廢立の正意を明かに知らせん爲めに、御長男を勘當してまで、活きた手本を書いて下されたのぢやぞや。

ソの部

ソウギ 宗祇 人名

姓は三善、自然齋と號す、連歌の名人なり、文龜二年七月、箱根湯本の逆旅に死す、年八十二、

花の下の宗匠

宗祇法師は紀州在田郡藤並と云ふ所の人で姓は三善、氏を飯尾と云ふて世々伎樂を業として居られたが、宗祇は幼少からそれが嫌ひで出家の志、ふかく終に寺に入つて戒律堅固の僧となり、甚深微妙の法を味び、目には華嚴世界の美を見、耳に天籟の音楽を聞き、名もなき鳥の囀り塵にそまぬ花一輪、風流の心やみ難く、仕住門院の僧心敬と云ふ人につい

て和歌を學ぶことゝなつた、其後、宗祇三十歳の時、當代、の名家猪苗代兼裁と云ふ人を訪ふて「われこれまで看經の旁ら和歌の道に心を傾けたが、未だ門にだも入ることが出来ぬどうしたらば堂に進むことが出来るであらうか」と云はるゝと、兼裁の答ふるやう、「御身の年、今十年若かりせば我れつとめて斯道の妙手たらしめん、惜いかなハ遅れてござる」と答へられた、すると宗祇の云ふやう、「わづか十年おくれたりどて何程の事がござりませう、日夜黽勉して怠らなかつたならば今より十年の後は他人の二十年も経ぬ程のことが出来ませう、されば十年位おくれたからどて妙手になれることはありますまい」と申しますると、兼裁はこれに感じて「御身

の熱心は到底われの及ぶ所にあらねど、及ぶかぎり指南致しませう」とて、苦學十年ついに其堂に入つたのであります、何事につけても、妙手とか名人とか云はるゝ人の心がけはまた特別なものでござります、一たび其蘊奥に達してから、宗祇の句と云ふものは、千句萬句ことごとく金玉の響をなして、終に時の帝より「花の下の宗匠」の名を賜はるに至つたのであります。

宗祇法師と小倉色紙

宗祇法師の頃に、和歌の達人として有名なのは東常縁と云ふ人であつた、宗祇は其名を慕ふて態々美濃國に趣き斯道の話せられ

たが常縁も其凡ならぬに感じて、古今集を傳授し、且つ自ら秘藏して居た小倉山莊色紙百枚の半を割いてこれに與へられた、宗祇はこれを受けて京都へ歸る途中で、船に乗ると一枚を船頭に渡し、これは小倉の色紙とて世に珍らしきものなれば、これを金に代へたなら、其許が一生安樂に世を送ることが出来るぞと云ひ、其後、人に逢ふ毎に一枚づつを與へ五十枚をことごとく他人の手へ渡してしま

して保たしむる」とは妙ではありませぬか。

歌話 宗祇法師と拂子

宗祇法師、香の烟りの匂ひの濃なるを愛して常に長く髯を蓄へて、それに香氣をも蓄へられたので尺餘に及んだと云ふことである。或時山中を旅行せられたら盜賊が出て行李をことごとく奪ひ取つた、しかし宗匠は少しも騒がず、するまゝに任せて身には一物をもあまさず悠々としてゆかるゝと、盜賊追ひ來つて「尙一物あり我にわたせ」と執拗く申しまゝす、宗祇云ふ、「モハヤ一物も汝に與ふべきものはない、もしあらば汝の云ふまゝに與べし」と云はるゝと、盜賊「さらば其髯を與へよ、拂子となすに適すれば、値高く賣るべし」と云ふ、宗祇からゝと笑ひ、

我が爲めに拂子ばかりはゆるせかし

ちりの浮世をすてはつるまで

と咏せられた、さすがの盜賊もこれにて大に感悟し、さて「難有き智識かな、それとも知らず今までの無禮御するし下され」と、奪ふたものを返して山中を送り出したと云ふことである。

歌話 宗祇法師と連歌の功德

宗祇法師の隣家に夫婦くらしの若者が居りましたが、或時其妻が産に惱んでおるので、宗祇、取りあへず、摩訶般若はらみ女の奇特かなと咏せられたを、弟子の宗長が、一二もすんで三(産)の紐とく来るのとつけました、その奇特にや、やすく産の

紐をといたので、其頃の人達は連歌の功德ちやと云ふて賛嘆せられたとある。

ソウキヨウ

雜行

彌陀の淨土に疎遠の行なるが故に一ミ云ふ、選擇集に五種の正行に對して五種の雜行を擧げたまふ、

歌

餘處に立つ心よ如何に友千鳥

月も眞砂も清き濱邊に

奇麗な濱邊に月は隈なく冴へわたり、何不足なき此風景に群れ遊び居る千鳥の中に、一羽離して餘處へ飛んでゆくのは、何が此濱邊に不足なことがあるのかと咎めた歌の意であるが、今この淨土眞宗は、法門の源は法藏菩薩の願心より起り、釋迦出世本懷の法門第十八願の濱邊、御教化の月影至らぬ處もなき家に生れて居ながら、他宗他門の眞似をして

ソウキヨウ

雜行雜修とにげてあるくのは何か不足であるのちや、よく心を鎮めて聽聞せねばならぬ。

歌 谷川の清き流れにすむ石も

谷川の清き流れにすむ石も手に取りてみよ垢つきぞかし。谷川の水は奇麗にして、其谷川の中にある石をながむれば、實に奇麗にみゆれども、一つ一つ手に取りて調べてみると、存外水垢がありて、きたなるものちやと詠んだ歌の意、ケ様により集られた各々方は、淨土眞宗の一天四海に比類なき、清き流れの岩の如く、ながめた處は、耳には名號のゆはれを聞き、口には念佛をこなへ肩には肩絹頭に帽子手に珠數つまぐり、清き信者の様に見ゆれども、一人々々の腹底を調べて見ると、存外定散自

力の水垢がありて、うつくしふ他力の信心を得た人は甚だ稀なものぢや、依て蓮如上人も御一流の義をうけたまわりわけたるものはあれども聞き得るもの甚だ稀れなり。と仰せられてあります。

歌

雨ならば宿もかるべき夕暮に

霧にそいたく袖ぬらしつゝ、旅路より故郷へ歸り道に、モハヤ二三里で我家、日は暮れかゝる、霧は降る、如何はせんと思へども、大雨なれば宿を取り一夜を明すなれど、長の旅路、もはや二三里で我家なれば、霧くらは辛抱して歸宅せうと、傘も持たず足を早め、我家にかへりて着物をみれば、霧さめに強ふ着物をぬらしたと云ふ歌の心ちや、御同行も丸々佛も法も知らぬも

のなら地獄行も必定ぢやが、折角御化導きながら、難行難修の霧さめの爲めに、又珍しからぬ流轉輪廻の身となりては、まことに殘念なこと、云はねばならぬ。

歌

ますら男が耕すとは待つ雨を

農夫は春の朝に耕へそうとて雨を待つておれど、大宮人はこれを思むらんで、花見をしよう、遊山に行こうと云ふ望みのある大宮人は之を思みきらうと云ふ歌の意、花見遊山の時は農夫の喜ぶ雨を却てきらう如く、聖道白力の菩提心を耕すときには善根功德の雨を待つけれども、第十八願の花見の時には、これが邪魔になるゆへ、難行難修と御嫌ひなされたのである。

樞機と柿の種

或家に普請をして大工が樞機を造つておいたが、翌日からとんと工合がわるい、そこで大工を呼んであの樞機は工合がわるくてとんと下りぬ、あんな下手なことでござうぢやと云ふた、大工はそんなことはない筈ぢやが大工がいつて見たれば、下りぬ筈ぢや柿の種がはさかつてあつた、今の大工の親様が五劫に思惟して御成就なされた南無の樞機は助くるぞよの下に助けたまへと落ちねはならぬのに、聞いてもく助けたまへの樞機のおちぬのは難行難修自力の柿の種がはさかつてあるゆへぢや。

毒断

病人を醫者が見て、此大病はたしかに請合

ソウギヤウ

ふて療治は致そうが、薬りを吞むかど尋ぬれば、病のななることならざんた薬でも吞みませうと答ふ、しかし薬は吞んでも毒断ちがなれば薬はきかぬ、此義は如何と問へば、それは命にかへての毒断なれば、どの様な辛抱も致しませうが、其毒断のものからは何々でござると云ふ、醫者の曰く、其毒断のものは一色や二色ではなる、言で云ふても云ひつくせぬ、多い毒断ぢや、その毒断を一々聞くには及ばぬ、其許の食ふてよいものは飯ご梅干、其外は何品も喰ふことはならぬと云へば、毒断はどれ程ありても、喰ふてよいものを聞いておけば、あとの毒断のいろくは聞かずとも分りた、今無明業障の大病を治して淨土まいりの本腹がしたひと思ふなら、六字の

薬を呑んで雑行の毒断が大事ぢや、其毒断の雑行は數限りの知れぬ事なれば、それを一々聞くには及ばぬ、南無阿彌陀佛の飯に信心の梅干の外は、皆淨土まいりの毒とさいたならこれ程早くわかる事はあるまい。

因縁 蒼虬翁と唐物の盆

蒼虬翁が茶人藤井某を訪ひたる時、骨董店より持ち來れる唐物の盆あり、泥畫にて桃李の中に婦人の立てる姿が描いてあるが極めて古雅にして愛すべきものである、されど更に其畫がなかつたなら、更に一段の妙であるのに畫のあるだけが白壁の微瑕であると評したとある、古雅なる盆もなまじい畫の爲めに却て其雅致を損する如く、悟道もなまじい識見があると却て眞の悟道を傷くるものである、

彌陀をたのむ信心も、雑行雑修のなまじいはからいがあると、他力本願の大道へ出ることは出来ない。

ソウシ 曾子

孔子上足の弟子なり、孝行を以て名高し、

談義 曾子と曾元

曾子が父の曾皙に事へたるに、酒や肉あればこれを父に薦め、さて食事がすんで膳を引く時に、餘りがありますと何處ぞへやりませうか」と尋ねた、又父が「餘りがあるか」と尋ねば「有ります」と答へた、其後曾子の曾元も父の曾子に孝行したれども、前とは少々様子が違ふて、父が「餘りがあるか」と問ふても、「ありませぬ」と答へて他へはやらせなんだ、併し曾元は酒肉を惜んで斯く云ふ

のではない、父の氣に入りたる品なれば、復後に進せようと思ふからでありた、孟子にこの二人の孝行を評して「曾元の孝は口や體を養ふ孝行、曾子の孝は志を養ふ孝行である」と申された。

談義 眞實の學問

公明宜と云ふ人が曾子の所へ學問に行かれだが、三年の間曾子の傍に居たれど書物一卷讀んだことがなる、或時曾子が尋ねらるゝ様「宜我が門下に居して三年未だ曾て書を讀まず何が學ばざるや」と仰せられた、其時公明宜の申さるゝには、弟子何を學ばざらん晝夜學んで居ります」と申上られた、そこで曾子が「宜何をか學ぶ、其許は書物一卷讀みもせず、何を學んで居たぞ」と御咎めなされ

た、其時答へて申さるゝ様「夫子の宮廷に於ける父母在す時は叱咤の聲犬馬に至るまで之を聞かず、我悦んで之を學べども未だ能はず夫子の賓客に於けるや謙敬にして未だ曾て惰せず、我悦んで之を學べども未だ能はず、夫子の朝廷に於けるや下に嚴臨して未だ曾て毀傷せず、我悦んで之を學べども未だ能はず」と申した、其時曾子席を避けて仰せらるゝには「宜が學ぶ所我及ばざるなり、能くこそ學んだ、それでこそ眞の學問ぢや」と御譽めなされたことがある、これは何程書物を讀んでも物識と云はれても、親の恩を知り、身を修め守らねば一丁字も知らざる愚人にもおころと云ふ誠めぢや。

談義 曾子の三省

孔子の弟子に曾子と云ふ人がありました、この人は日々に三たび我身を省みた人であり、即ち「人の爲めに謀つて忠ならざるか」「朋友と交つて信ならざるか」「傳へて習はざるか」と、この三點について毎日反省した人であり、是に由て之を觀るに、曾子の如きは嚴格なる規律的生活を以て一生を送つた人のやうに見えます、即ち曾子は一度の洗面に三回の洗心を實行した人であり、孔子の弟子中にも有數なる曾子の人格は、この規律が造つたものでありませう。

**ソウジヨウ 相承** 【術語】

一器の水を一器にうつす如く、師資相傳ふるを云ふ、

**水 源**

水を一口酌んで呑むにも其流れ出た源を

知らねばならぬ、きたなひ堀溝や田の中から流れ出た水なれば飲まればせぬ、又世間の茶噺でも、其噺は何處の事ぢやと尋るに、イヤ何處の事かしらねども、渡船の乗合噺で聞いたと云ふ位の事ならば信じ難い、何月の何日何と云ふ處でケ様な事がありた、噺した人は村役人ぢやとか、某甲であつたとか、屹度確かな源が知れねば本真にはならぬ、依て佛が御説法なさるゝにも、所は祇園精舎、説人は三世了達の釋迦如來、聞人は文殊普賢等の大菩薩、四大聲聞天龍八部、それを傳へさせられたは多聞第一の阿難尊者、如是我聞と紛れのなむところで、佛の經文が信せらるゝのである、今此南無阿彌陀佛の名號は、十劫正覺の大音宣布より、釋迦如來之を傳へさせ

られ、七高僧の相承によりて紛れなき彌陀の本願を手近く聽聞することが出来るのぢや。

**歌** 傳へ来て今もさすがに濁らぬは

わが山川のながれなりけり

これは慈鎮和尚の御歌、信濃の山奥から流れ出た水が越後に居ながら我家まで、覺に傳へて其水を汲んで呑む如く、「これより西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり名けて極樂と云ふ、其土に佛在す阿彌陀と號す今現在にして法を説き給ふ、十萬億のあなたの今現在の御呼聲を、釋尊西天にあらはれて之を説きのべさせられた、其遠き天竺の御説法を此日本に生れながら我家々の御内佛まで、御和讃御文の御教化が届かせられ、朝な夕なに聲聞すれば、造作もなることこの様に思へども、十丁

も二十丁もある處から我家へ水をさるゝにも、長い間の事ぢやから、覺に一寸や二寸の切れ間がありてもよきさうなものなれども、少しの切れ間がありても水は届かぬ、十劫正覺の曉より今日此御座にいたるまで、三朝淨土の御相承に一師の切れ間でもありたなら聽聞は出来ぬのぢや。

**ソウドク 雜毒** 【術語】

施戒等の行を修しても貪瞋等の毒雜るが故に一と云ふ、

**歌** 恩きせて恩きせ顔をする人は

恩にはあらで恨みなりけり

人の難義を救ふてやる處は善根のやうであれど、其救ふてやつた人が禮の云ひやうでも悪いと云ふと、あの男は恩知らずぢや、義理

知らずぢやと云ふて、いろ／＼な悪口雑言を云ふのは、恩にはあらで恨みなりけりて、其人より怨まるゝやうになる、これが世の中のならひぢや、我々の積む善根や功德が丁度その如くで、初めは佛果菩提の爲めにと思ふてかゝれども、すぐに煩惱の毒かませるから、それで雑毒の善、虚假の行となりて往生浄土の因にはならぬのぢや。

ソギヨウ 祖曉 【人名】

甲斐法泉寺の第二世なり、字は天巖、甲斐南都留郡寶村の人、享保十六年十一月寂、壽六十五、

逸話 祖曉の引導

曹洞の傑僧、甲斐の祖曉、或時寺務多忙にして寸暇もあらざりしに、突然某家より死亡を報じ來り其引導を請へり、祖曉和尚もあま

り卒かのこことなれば引導を作ること能はず、しかも棺に向ひたるに、唱ふべき言句もあらざりけるに、其中に大雨降り來り、一疋の犬雨に驚きて便所の方へ逃れ去るを見たり、時に和尚忽然一句を吐いて曰く、  
天、鎗を下す數十本、犬東厠に走る焉直去、甲斐の祖曉に轉結なし、喝  
と云ふて引導を渡したとある。

ソクコウニウナン 觸光 柔軟 【術語】

光明の照益を受けて身心ともに和らぐを云ふ、

因縁 妙喜尼の喜び

豊後國速見郡鶴見村に妙喜と云ふ尼があり、若き時に夫及び一人の子を先き立てたが御縁となりて剃髮染衣の身となり、終日終夜稱名念佛怠ることなく喜んで居られました

が、或時人ありて此尼の柔軟を試みようと思ひ、水をかけたれど、聊かも怒る色がなかりた、「何故に悲らざるや」と問へば「天より暴雨ふると思へば怒るにも及ばぬ」と答へた、又或時人の鞭うつあれど、少しも怒らぬ、なせかと云へば、「家根の上から瓦が落ると思ふておる」と云ふた、或時、本堂へまいり關がりにて佛を拜んでおりしに、小僧あはて、妙喜を踏みたおしたれど、少しも怒らず只佛恩／＼と云ふておる、それを如何と問へば、「我今既に死すべきに是をまぬかれしは、佛恩なり」と云ふた、又或時飯をたくに誤りて手を釜の中に入れ沸熱して肉爛て疼きけるを亦「佛恩／＼」といふ、人笑ふて、其様に痛い目にあいながら佛恩／＼と云ふは如何と云

ソクシンジヨウフツ

へば、尼の云ふに、これは過ること幾千萬倍か限りしられぬ地獄の苦をうくべきを、佛願力の不思議にて今ははやこれを免れ、今の少しの苦は轉重受輕の御利益であります」と云ふて喜はれたとある、これ等が觸光柔軟の御利益と申ものであらう。

ソクシンジヨウフツ 即身成佛 【術語】

此現身にして成佛得脱するを云ふ「父母所生身即證大覺位」とあり、

譯語 耆闍摩羅と千佛の一數

天竺に耆闍摩羅と云ふ人があつて、性質至つて悪い人であつて、常に生き物を屠り殺すを業といたして居たから、その罪業も中々深くあつた、然るに不思議なことには、或日釋迦如來の御化導に預り、忽ち悟りを開いて、



持つて居た屠刀を抛げすて、  
「我も千佛の一敷なり  
と云はれたと申すことぢや、我も千佛の一敷  
といふは、今迄こそは知らずくにあらゆる  
悪しき事をもなしたれ、かく難有き御教化を  
うけて其御教化のまゝに行ふ上は、この身こ  
のまゝ直に三世諸佛の一人であること云ふこ  
とです。

ソクトクオウジヨウ

即得往生

【術語】

本願を信する一念同時に往生の定まるを云ふ、眞婆鈔  
に「即得といふばすなはちうさなり、乃至うるこいふ  
は定まる意なり」

除夜と元旦

いそがしい商人が或年の大晦日の晩、親方  
の宅へ歳末の禮に行かうと思ふて居たが、彼  
是としまいおくれ、漸く家の用事を終りてか

ら、出かけた、處が親方の宅へ行くなり、一  
言の挨拶せぬ先にハヤ雞が鳴いた、雞の鳴  
聲きいたらモウ歳暮の口上はのべられぬ、新  
年御目出度うと云ふて歸りた、聞其名號の一  
念に即得往生と定りたりや、助けて下された  
たのみますの歳暮の口上はいらぬ、さてもう  
れしやの年頭の御禮ぢや。

ソクラテース

【人名】

希臘の大哲人なり、始めて人間觀察を全ふして偉大な  
る倫理觀を立つ、

談叢

ソクラテースの雄雞の債

希臘の哲學者ソクラテースは非凡なる智識  
を備へ、大に當時の爲めに教化を布かれたり  
しが、非道なる難にかゝり獄中に死せらるゝ  
の際、司刑の吏、毒酒を與へ、これを飲み盡

して此中を行き戻りすべしと云ふ、ソクラテ

ース神色自若、靜かに諸神を遙拜して後、其

言の如くせらるゝに、毒氣總身にまはり、手

足もふるへ、氣息も絶々にたゞられつゝ、眼を

開き聲を發して隨從せる門弟子に告ぐるやう

「我がヤスクラフ（これは希臘の醫術を司

る神の名で、國人此神に祈つて病愈ゆるとき

は雄雞を献納して恩返しとするの習慣がある

其神様に雄雞の債あるを想ひ出たり、我に代

つておさめくれよ、我今過にし七十年間を回

顧するに、心ずみのせぬ事は唯此一事のみな

り、もはやこれにて心晴れのせぬ事なし」と

云ひて安然として終られた、誠に有道の大君

子である。

ソトウバ

蘇東披

【人名】

ソトウバ

名は賦字は子瞻、漢文の大學者にして而も禪學に達す、

談叢 東坡の參禪

蘇東披或時、玉泉の皓禪師を訪ふた、禪師

が、

「貴官の名は」

「秤」

之は天下の名僧知識を秤にかけて見やうとし

たからである、すると禪師は大喝して、

「此一喝の重き多少ぞ」

と、東坡一言も出ず終に禪に志し、佛印禪

師に參じた、ある日、東坡佛印の室に入ると

禪師叱つて曰ふた、

「此間汝の坐處なし」

東坡いふ、

暫く和尙の四大を假りて禪床とせん

佛印曰く、

山僧四大本無、五蘊有にあらす、何を以てか禪床とせん、

流石の東坡も返答が出来ず、後東林の總禪師に非情説法の話をかき、曉馬に乗つて山紫水明の所を過ぎ豁然として

溪聲便是廣長舌

山色無非清淨身

と吟じて悟る所があつたさうである

詩 廬山烟雨浙江潮

未到千般恨未消  
到得還來無別事  
廬山烟雨浙江潮

これは蘇東坡の詩であります、廬山や浙江と云ふのは支那で非常に景色のよい處ぢや、

そこでどうかしてゆきたいものぢやと考へたこれは悟の境界にゆくまでは、ごーか其境界にゆきたい、如何なる立派なところであろうかと思ふて居たが、到り得かへり來りて別事なしで、いつて見た所が別の事になる、やはり廬山は烟雨、浙江は潮ぢや、それを未だ到らぬものはさまざまに迷ふが、其極に達してみれば迷と云ひ悟と云ふべきはなる、悟りの悟りくさきはまことの悟りぢやなる、まことの悟りは迷もなく悟もなる、しかしわれは中々此境界にいたることが出来ぬのであるから、佛祖正傳の大戒をうけて、この身このまゝ諸佛と同じ位に入り、凡聖一如迷悟不二の境に入れ、これ禪宗の特色でありま

雜錄

九想詩

紅粉翠黛唯綠白皮。男女姪樂互抱臭骸。身冷魂去弃之荒原。雨灌日曝須更爛壞。燒即爲灰焉見昔質。埋亦爲土。誰思舊交爲之惜。名其名冷於谷響爲之求。利其利空於春夢順。我以爲恩愛逆己忽作讎敵。順逆二門豈不忘緣。皆是執無我之我計。無常之常。四種顛倒。眼前迷亂。世人猶可耻。況於釋子乎。

一新死想

平生顔色病中衰。芳體如眠新死姿。恩愛昔朋留猶在。飛揚夕魄去何之。觀花忽盡春三月。命葉易零秋一時。老少元來無定境。後前難遁速與遲。さかりなる花のすかたも散りはて、

哀れに見ゆる春の夕暮

花も散り春も暮れゆくこのもどに

命もつきぬ入相の鐘

二 肪脹想

肪脹新死巨名言。既經七日貞纒殘。紅顔暗變失美麗。玄鬢先衰纏草根。六腑爛壞餘棺槨。四支洪直臥郊原。郊原寂寞無隨者。獨趣冥途中有魂。

あさからす死なばごもにと契りける

人はよそなるよもぎふの宿

散やすき秋の紅葉の霜かれて

見しにもあらぬ人のいろく

三 血塗想

骨碎筋壞在北邙。色想變異難思量。腐皮悉解青黛貞。膿血忽流爛壞腸。世上無常追日現。身中不淨此貶彰。

自斯親友捨空去。蕭颯涼風似問裳。  
 みな人のわがもの顔におもひしに  
 此身のはてのなれが姿よ  
 日にそげてかわる姿のまゆすみは  
 消てあどなき露の身ぞうき

四 蓬亂想

縦傾海水雖爲洗。蓬亂相時豈得清。  
 白蟬身中青蠶々。青蠅肉上幾營々。  
 風傳臭氣二三里。月照裸屍四五更。  
 悲哉叢邊新舊骨。年々相續不知名。  
 恨みても甲斐なきものは鳥部山  
 まくすが原に捨てらる身は  
 何とたゝかりなる宮をかざるらん  
 かゝるべしとは兼てしらすや

五 噉食想

野外人稀何物有。爭屍猛獸不能禁。

朝見昉脹爛壞貞。夕聽虎狼噉食音。  
 飢犬吠嗥喪歛地。食鳥群集棄村林。  
 今生榮望夢中夢。對是豈無慚愧心  
 これを見て身はうきものと思ひしれ  
 何の恨かこゝにあるべき  
 鳥部野に争ふ犬の聲きけば  
 かねてうき身のをき所なし

六 青瘡想

可憐累々古墳邊。顔色遂消筋節連。  
 餘肉半青春草上。殘皮空瘡晚風前。  
 秋霖洗處骨徐露。朝日照時首欲穿。  
 此質任他爲野物。傷哉多劫溺黃泉。  
 はかなしや朝夕なでし黒髪の  
 よもぎがもとの塵ごころなれ  
 思ひきや鳥部の山にすてられて  
 犬のあらそう身なるべしとは

七 白骨連想

一碁未盡爛膿盡。五體相連殘此身。  
 飲器空壤留在枕。弊衣纒掛化為塵。  
 昔斯朝廷紅顔士。今則郊原白骨人。  
 雲雨朦朧原上夕。終夜啼哭守屍神。  
 皮にこそ男女の色はあれ  
 骨にはかわる人かたもなし

かざりつる姿は野べに散はてゝ  
 残るかばねのなれの姿よ

八 骨散想

蕭疎蔓草遂纏骨。散彼捨斯求得難。  
 爪髮分離盈野外。頭顱腐敗在岩端。  
 西陵雨夕年々朽。東岱風貶處々殘。  
 忽成龍門原土土。枯榮不識昔誰棺。  
 露の命消にし跡を見よかほに  
 瓦花が本に残るかばねぞ

我思ふ身は皆野べに散りはてゝ  
 あさ地か本のちりとなりけり

九 古墳想

五蘊自元可皆空。緣底平生愛此躬。  
 守塚幽魂飛夜月。失屍愚魄嘯秋風。  
 名留無貞松丘下。骨化為灰草澤中。  
 石上碑文消不見。古人墳際淚生紅。  
 鳥邊山すてにし人のあどへば  
 塚にぞ残る露の白玉  
 かきつけし其名はやく消えはてゝ  
 誰とも知らぬ古そとば哉

ソノジヨ 園女【人名】

伊勢松坂の産、洞官渡會氏の女なり、後、禪に參し薙  
 髮して尼となり智鏡と云ふ、

芭蕉門下の園女は丈夫の氣魄あつて俳諧に

も造詣ふかゝりしは何人も知る所なるが、彼の女が雲居和尚に答ふる文に、

來書の旨趣拜見申候、不<sub>レ</sub>求真不<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>妄者大道の根源、誰も存ずるところ、憚

ながら珍しからず候、一心源頭に上り候

ての所作、柳は緑、花は紅、唯其儘に

して常に句を云ひ歌に綴りて遊び申候こ

とに候、無益の口業にて候は、一切の

經も無益の口業にて候、法のくさきこと

を嫌ひにて、我平日の行は念佛の句と歌

となり、極樂へ行くはよし、地獄へ落つ

るはめでたし。

誰か見ん誰か知るべき有にも非ず

無きにもあらぬ法のももしび

とある、以て園女の見識と、其遊ぶ所の樂み

を見るべきである。

ソロリシンザエモン 曾呂利新左衛門【人名】

和泉國大島郡の人なり、和歌を善くし滑稽に長じ豊太閣に仕ふるこゝ三十年、怒りを和らげ愁を慰むるを以て大に寵愛せらる、慶長八年九月歿す。

談叢 五字七字の誠め

豊公の近侍に曾呂利新左衛門と云ふがあり

た、此人中々頓智のある面白い男でありたが

或時徳川侯の詰所へ入りて云ふ様、「世の中の

人は福の神ちやと云ふて大黒天を祭りて居る

が、何故福の神であるかと云ふことを知らぬ

それを知りて居るは自分ばかりぢや」と云ひ

ますから、家康は「それはどうゆう譯である

か」と問はれましたら、新左衛門の答に「大

黒天の形は肩を高くつくり其上に頭巾をかむ

りてござるのである、これは上を見ずして奢

の心を制へ其本分に安んずる姿である、よく

其分を守りてさへおれば、幸福は自ら出て

来るものである、そこでこの心を大黒に象つ

て人の教へとしたのである」と申しますること

家康は、成程それは面白い説き方ぢや、昔か

ら五字七字と云ふことがある、五字とは、う

へをみな、七字とは、みのほどをしれぢや、

この二つをよく守りさへすれば、貴きも賤き

も自と幸福であらう、古き歌にも、

上をみな身の程を知れ人なみに

あるべきやうに時に隨へ

といふことがある、彼の大黒の頭巾を被りて

ござるは、常に上を見ざるが爲めであらうと

話されたとある。

談叢 茶道の極意

豊太閣の云はるゝに、千利休を始め出入の

茶人が代り、御茶をたて、くれるが、ご

も湯加減が熱かつたり冷かつたりして上加減

と云ふのは少いものであるが、其中で曾呂利

新左衛門の點てた茶のみは上加減であると御

賞讃になりました、或人これを怪みて曾呂利

を別室に招いてきゝますと、曾呂利の曰く、

これは曾呂利流の茶道の極意であるから、他

言はなりませんと云ふて念をおし、言をつ

いて云ふやう、それは餘の儀ではござらぬ、

拙者の流は、たてた御茶を一寸一口呑みて、

熱ければ水を入れ、ぬるければ湯を増して、

我が口に丁度適合したところを定め、呑み口

と已れの口を拭ひ、知らぬ顔の半兵衛で、イ

ト恭しく殿下の御前へ差出すのであると申

されたとある。

【歌話】死後の望み

曾呂利新左衛門、病重く頼みすくなく見れば、太閤ふかく惜ませ玉ひ、死後の望み何なりとも叶へのかわすべし、遠慮なく申せごありましたから、曾呂利長まりて、

御威勢で三千世界手に入らば

極楽浄土われにたまわれ

【歌話】御渡海の狂歌

豊太閤、朝鮮を征伐せんとするや、今日御渡海ある、明日御渡海あると、世上の風説喧しき時、曾呂利新左衛門戯れに、

太閤が一石米を買ひかねて

今日もごどかひ明日もごどかひ

といへる狂歌をよんだ、これは御渡海と五斗

買ひごをかけたものである、秀吉この事をき

いて大に怒り、我今一天の君を輔佐し奉る關

白職を帯るものであるが、それを「太閤が」

と呼びすてにするは過言甚しとて怒り玉ふ

と、曾呂利申すやう、貴殿と天子といづれか

尊くおわしますや、秀吉曰く、それは知れた

ことで、我は臣下なればいかで肩が比へられ

ようぞ、曾呂利曰く、然ればさのみ怒り玉ふ

な、既に天子のことさへ、君が代ごか君が

爲めごか申すではありませんかと云ひました

ら、秀吉ふかく其秀才を愛し、その後は近侍

せしめられたとある。

【雑言】木賣と胡瓜

曾呂利新左衛門、或時豊公の御前へまいり

唐突に申止るに「只今登城致しまする途中に

夕の部

タイイク

體育

【世語】

世界第一の健康者

英國のサンダフは十歳の頃甚だ弱かつたが或時父と共に他へ行き古人の石像を見たれば如何にも大きくして健全そうに見へた處より大に心に感じ、我もこの石像の如く壯健なる男子となりたひと思ふ處より大に體育に力をつくし、遂に世界第一の健康者大強者となりた、而して其發達の順序をのべたる言中に、身を健康にするは學問するのと同じく始より

て、不思議にも胡瓜が胡瓜を食ふて居るのを見てまいりました」と申上ると、豊公も、

「それは如何にも不思議千萬なる觀物なり、新左衛門案内いたせ、此方も一見せん」と仰

せられますと、新左衛門は委細かじごまりま

したと云つて、直に先導して城門の外へ出で

暫く行く中に、一人の老爺が荷ふた薪を側に

おいてやすみながら胡瓜を嚙つて居るのを指

さして、彼れを御覽あそばせ」と申上りますと

豊公は不審の面もちで「これ、新左、あれ

は薪を賣る老爺が胡瓜を食ふて居るのではな

るか」と言はれると、新左衛門はぬからぬ顔

學士たり博士たるもの天下第一人もなし、皆困苦勉強の結果なり、體力を養成するも亦同じつとめて體育に力をつくせば健康者とならざるなし」とある。

ダイガ 大我 【人名】

山城國八幡第二十二代なり、字は孤立、白蓮社天譽と稱す、天明二年八月入寂、壽七十四。

大我上人の道歌

大我夢菴は大悟徹底して浮世を茶にしたる上人なり、自ら記して曰く、  
我むかし紙袋にて、夏は蚊をふせぎ、冬は寒さをふせぎて楮庵主人といひ、又は紙袋法師といふ、其袋にかきける、  
世の中をふくろひひとつに入替て  
おもへばかろきわが身なりけり

又歳暮の述情としてしるすらく、

貫ふこといやでござるといひながら  
とらねばならぬくれて行年  
來る春をまつおの浦の人なみに  
もしほの世話をやく年の暮

掛取りのこんとしりせば門さして  
留主と答へてあはざらましを  
年の暮たへて掛取りなかりせば

かりの世の中すみよからまし

タイガドウ 大雅堂 【人名】

姓は池野名は勤、秋平と稱す、大雅堂は其號なり、京都の人にして畫家を以て著はる、安永五年四月歿す、年五十四。

逸話 大雅堂の無我

大雅堂は非常に無我の人であつて、其平生の行ひは人の意表に出ることが多くありまし

て、或時難波の方へ出立するに當りて、筆を携ふるを忘れて出行きました、妻の玉瀾がこれを見つけて、筆をうつて後より走り建仁寺の前にて追ひつきまして筆を渡せば、大雅は推し戴いて、何處の御方かは存じませぬとよく拾ふて下されましたとて、叮嚀に禮を云ふて別て去れば、妻も何事も云はずして歸つたごある、斯の如き無我無心なる雅人の胸中には、實に天國の樂みがあります。

ダイギヨウ 大行 【術語】

第十七願成就の名號を指す、如來回向の行なるが故に一と云ふ、

譬喩 旅費

京都へまいりたいと思ふても、まいる旅費を持たねばまいられぬ處を、親の方からいよ

其方まいり度は、乃公がまいらせてくれる、其心になつたならば、つれてまいらせたと思ふて、幼い時からこしらへておいた、これさへあれば支はなると渡してくれた、其金が瀛車にもなれば電車人力車にもなる、又宿料にもなる、之を使ふてまいりて來いと渡された其金、悴の方では難有やまいりませうと受取つた處で、まだ一錢もつかわぬ中に、ハヤ京参りが定まり安堵の身の上となつた、夫から家を出立して京都へ到着するまでは、毎日つかへども、已がはたらきでまいると思ふ道理はなる、一錢つかうも二錢つかうも、親の汗や油の賜物、親の御蔭でまいられぬ京都へまいる事のうれしや難有やと、喜びのつかひ心なり、今もそれと同じ事て、

浄土へまいりたひと思ふても、一善一行後生の種を持たぬ我身、如何しやうと思ふた所へ彼等の方から呼びかけて下され、我等が宿善に催されて、まいりたやの機になるのを彌陀は待ち兼て居た程に、サア此名號を與へる程にご御興へなされた南無阿彌陀佛一行と言ふは無碍光如来の名を稱するなり、此行はもろくの善本を攝しもろくの徳本を具す極速圓滿真如一實の功德寶海なり一布施の行にもなるぞ、持戒の行にも間に合ふぞ、此名號を稱へるばかりで助けるぞと御興へなされた南無阿彌陀佛を、無善造惡の私か、稱ふるばかりで御助け、やれうれしやまいりませうと受取る信の一念に、一と聲も稱へぬ中にハヤ往生定まり浄土まいりの身となつた、それから

浄土へまいるまでは、五年でゆきつこうが十年でまいろうが、日々夜々に稱へる念佛は、我が稱へた力でまいると思ふ道理はなる、この稱へる南無阿彌陀佛が、五劫兆載永劫の大悲の御紀念、あなたの御蔭でまいる身になつた事のうれしや難有やの思ひ、稱ふる念佛の行體は浄土まいりの種の正定業の念佛に違ひはなるいが、行者の稱へごころ、嬉しや難有やの御恩報謝。

鷄と梟

鷄と梟が寄り合ふて斯う云ふ話をしたそうなる、梟曰く、汝は風雨の日でも雪霜の朝でも時を違へずに鳴くことは何ぞ心に覺へありや、鷄曰く、我れ鳴かんとする時は足の蹴爪があたゝまる、それを相圖に鳴くなり

汝は晝鳴くことなし夜になれば必ず鳴くは何ぞ覺へありや、梟曰く、夜になれば仰いて上を見れば月星の光りあり、それを目當に鳴くなり、鷄曰く、晴れたる夜はさもあるべし雨天にて曇りたる夜は何を目當に鳴くやと、茲にいたりて梟は返答につまり「雨天の夜はよい加減に滅多鳴きをするのちや」と答へたごある、念佛行者にもよい加減に滅多鳴きの類が多いやうに思はるゝ、他方の信心を決定せず、定散二心の迷ひより、念佛だにも申せば助かるやうに心得て、滅多矢鱈に起行をばげみなごするは、梟の滅多鳴き同行ぢや、他力の信者は信決定の上より佛恩を喜ぶのであるから、如来の大慈に催されて稱名念佛するのであります、之を他方催促の不行と云ふ

タイゴウ

大綱

人名

名は明宗、字は一ト、小田原最乗寺了庵和尚を師とし大に得る所あり、永享九年正月寂す、壽缺く、

瓢箪の圖贊

大綱和尚に瓢箪の畫贊あり、其辭に曰く、瓢々、汝眞瓜の位もなく西瓜の暑を拂ふ徳もなし、しかれども、氣の輕く中むなしくして無欲なれば、仙人も汝を友として酒を入れて腰に携へ、或は駒を出して樂めり、汝瓜の類に似て庖丁の難にあはざるは智なり、鯨を押へてのがさしむるは仁なり、羽柴公の馬印となりて強敵をくだくは勇なり、汝性は善なりと云ふべし。

ぶらくとくらす様でも瓢箪の

胸のあたりにしめくゝりあり

ダイゴテンオウ

醍醐天皇

【人名】

名は敦仁、宇多天皇の太子なり、宇多天皇の禪を受け  
て位につき在位二十二年改元するこゝ三度、延長六年  
崩す、壽四十六、

醍醐天皇の大御心

醍醐天皇は慈悲の心ふかくましくて民を

憐れみ恵みを施しておられたが、或冬の夜、  
寒殊に烈しき最中に、天皇俄に御衣を脱がせ  
給ひて、朕が民を思ひやるに、朕獨り暖な  
るべからず、との玉ふたので、傍に侍せし人  
々皆感じ入つたごある、後の人その大御心を  
體し奉りて、

おほふべき袖こそなけれ世の中に

寒けき民の冬のよなく

ごよまれたごある。

いふならく奈落の底に入りぬれば

刹利も首陀もかはらさりけり

これは醍醐天皇の御製であるご申傳へます  
天皇崩御ましくて後、冥土にて日崩上人に  
逢ひたまひ仰せらるゝやう、「我れ娑婆にあり  
し時、五つの罪をつくりし報ひにて、今は地  
獄の苦患を受く、五つの罪とは、天子に父母  
なしご思ひ父帝に孝行をつくさるること（是  
一）帝位は嚴しくして犯すべからざるものと  
思ふるよりおのづこ高慢の心おこる（是二）、  
聖人を流刑せし事（是三）、六齋日に罪人を刑  
せし事（是四）、日本は神國なれば佛道を尊信  
するの謂れなしこの邪見を起せしこと（是五）  
此五罪によつて今の地獄の苦を受けつゝあり  
幸に上人に遇ひ奉ること、實に盲龜の浮

木である、娑婆にかへらば朕の爲めに追福を  
修せよ」とて、上の歌をよまれたごある、刹  
利とは貴顯、首陀とは卑賤、尊き天子でも賤  
しき非人乞食でも、さらにかはりのないが後  
生の一大事であるご云ふこゝろです、

ダイジヨウ 大乘

【術語】

梵に摩訶衍、茲に大乘と云ふ、大は小に簡ぶ、乗は運  
載を義とす、衆生を運載して生死を出離せしむるの教  
法をさす、

尾張大根と北國

名古屋では大根が土地に相應するゆへ大き  
な味ひ好ひものが出来るが、同じ種を北國へ  
持ちて来て植ゐると、初年は殆んど似たやう  
なものが出来るけれど來年からは段々こまか  
くなりて遂には地方の大根ごかはらぬやうに  
なる、これ土地に相應せぬ故ぢや、印度や支

ダイシヨウ

ダイバタツタ

那は大乗佛教の不相應の地と云はねばならぬ  
印度の如きは釋尊の出世ましくた土地ゆへ  
佛教の本源なれども今は小乗のみである、支  
那は佛教の本家なれども大に今は衰へておる  
然に日本は末になる程盛んになる、昔は皇室  
佛教と云ふて、中々一般の人民が聞くことが  
出来なかつたが、今は津々浦々まで布教の聲  
のこいくやうになりた、日域大乘相應地の御  
言がますます事實となりてあらはれて來るの  
である。

ダイバタツタ 提婆達多

【人名】

天熱と譯す、生るゝ時八天等の衆心皆驚熱し無性なる  
を以て天熱と云ふ、

提婆の因縁

提婆は釋迦如來とは從兄弟であつたなれど



も、實に惡逆無道、佛に三十二相、提婆に三十の相、佛は八萬の法を知る提婆は六萬の法を知る、釋迦如來の御背が一丈六尺、提婆一丈五尺五寸、丁度十五夜の月と十四夜の月ぐらい、そこで提婆が思ふやう、釋迦さへなければおれが佛ぢや、あいつ殺せば已れが獨り敬はるゝと、佛を殺す手段を考へた、或時三十二相の中頂きの肉化相と足の裏の仙福輪相がない、そこで鍛冶屋で仙福輪相のかたちをこしらへて、赤く焼いて足の裏へじばつと焼きつけた、處が難義や其かたが足の裏へくいついて、ちよつともこれぬ、サア大變、足はやけてはれる、如何様に取りうとしても、さうしても取れぬ、それで提婆は醫者にこれを取つてくれとたのまれた、處が醫者の云ふに

はこれは取れませぬ、惡心増上の報ひぢやで我々の治療ではとても取れる時節がないと云ふ、そんならどうしやう、これを取つてくれる人は三界獨尊の釋迦如來より外はないと云ふゆへ、提婆も是非に及ばずエ、忌々しいことなれども歩くに歩けず駕に乗りて釋迦如來の御前へ出て、能く／＼中が悪かつたと見へて、佛の顔を見るやいやであつたのですたれおろして、足ばかりを差出し、「釋迦これをおせ」と云ひたいつもりなれども、まさかさうもよう云はず、なおして下されと云ふたれば、柔順慈悲の釋迦如來、不便のものと思召大光明を放つて足を御照しなされると、不思議や金のかたは忽ちこれでもとの如く奇麗になつた、其時「瞿曇沙門坊主をやめて醫者

になれ」瞿曇沙門とは釋尊のこと、其方は上手な治療をやつたな、佛をやめて醫者になれと云ふたやうな強情な惡人、いよゝ、惡業増上、大地引さけて今地獄へ落るの一段に、せつない時の神だのみ、南無阿彌陀佛と稱へた其功德で、無量劫の後天王如來といふ正覺をとるべしと御説きなされた。

ダイヒ 大悲 【衛語】

慈悲に大中小の三あり、無縁の慈悲を指して一と云ふ、觀無量壽經に「佛心トハ者大悲悲是レナリ以テ無縁ノ慈ニ攝ス諸ノ衆生トモあり」

わびぬれは今はた同じ難波なる

元良親王が御息所に忍んで通はせられたが事あらはれて後、此歌を詠んでおくられたとある、俗に云ふ「ぬれぬ先こそ露をも厭へ」

で、人に知られぬ中ならば忍びもせうけれどとても斯く顯はれた上からは、みをつくしてもあはんどぞ思ふ、命をすてゝなりとも志を遂げやうと云ふ歌のころ、みをつくして云ふは川の中に木を立て、水の浅い深いを知るものゆへ、朽れば立てかへ／＼して、いつまでもなくなることはなむ、そこで身を盡くしと、みをつくしとを兼ね合せて、まんだ歌ぢや、隨宜轉用して喜べば、元良親王に喩へたは本師法皇の阿彌陀如來、御息所とは御座の同行、みをつくしてもと云ふは、假令身止諸苦毒中我行精進忍終不悔と、惡人女人を淨土へまいらせすは、我は彌陀とは呼ばれまいと、大悲大願の御念力から、兆載永劫の永の間、苦の中毒の中に沈ませられ、たどみ此身

はどのやうになろうとも、衆生の爲めなら厭  
ひはせまいと仰せらるゝ御慈悲の御念力から  
大悲大願をおこして下され世に超ゆる誓の海  
の、みをつくし、たつる思ひのつくる間もな  
しで、塵點久遠の昔から、ごうぞ〜ご思召  
さるゝ御念力の届かせられたが一念歸命であ  
る。

歌 來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに

やくや藻汐の身もこがれつゝ

此歌は、まてごも〜音信もせず、今宵も風  
のたよりだになく、我ばかりやくや藻汐の身  
もこがれて待つものをつれなる戀を恨んだ意  
ぢや、今如來の大悲十劫の曉から此生は々  
々と待兼て下さるゝのに、其待たるゝ我人は  
空吹く風とき〜なしてまいる心のなきものを

今日唯今までまちわびて下されたが如來の大  
悲である。

歌 あはれさよ夜半にすて子のなきやむは

母に添乳の夢やみつらん

捨子と云ふも親の慈悲で、三千界は廣けれ  
ど、憎んですてる親はなる、貧苦にせめられ  
詮方なく、慈悲ある人の門前にすて〜おく、  
捨てられた子は親を尋ねてキヤツキヤ〜と  
泣き叫ぶ、其聲を聞いたなら、如何な氣強い  
ものぢやとて、それが泣かずに居られふか、  
そののみならず、今迄ないて居た子の少しな  
きやんだは、親に添乳をしてもろうて寝たる  
夢を見たのであろうか云ふ、聞くもあはれ  
な今の歌ぢや、今も其如くで、三世の諸佛も  
さすが御慈悲の御身なれば、悪んで御捨てな

されたではなる、相たを見れば五障の女人、  
形を見れば五逆の悪人、とても濟度の手が  
きたゆへ、不便ながらも御捨なされたのぢや  
ぞや、然るに難有いは御座の我れ〜、阿彌  
陀如來の光明の懷ろに抱き込まれ、南無阿  
彌陀佛の乳房をすはせ玉ふたればこそ、今に  
死しても淨土まいりと、大悲の親様と添ひ寝  
をさせてもらい、迷ひの夢のさめ次第、ハヤ  
安養の御淨土へやす〜國がへをさせてもら  
うのである。

句 紅梅や飛脚の顔もねじむかし

急がしき飛脚も、あまり美しく咲いた紅梅  
の花には我を忘れて詠めて通る、悪業煩惱に  
取紛れ、地獄のたねこしらへがせわしさに、  
これではならぬ〜と、佛ごも法ごもおもは

すに、地獄行の飛脚同様の身の上が、彌陀の  
本願の不思議を聴聞し、至心信樂已れを忘れ  
て、かゝる機までも御助け候へと、往生程の  
一大事あやうげなく如來に担任さるゝのは、  
私こととは思ふは、十劫正覺の曉天から、一  
度は〜と云ふ、大悲深重の紅梅から信せさ  
せて下されたのぢや。

句 折るよりも來ぬ人にくし梅の花

清香馥郁なる梅の花盛りには、心なく枝折る  
人も憎くけれど、それよりも猶一層恨めしい  
は、見に来てくれぬ人ぢやと云ふ句の意、今  
も丁度其如くで、寶樹の葉一枚から、寶池の  
水一滴まで、みな御座の我れ〜の爲めに御  
成就下された御淨土であるのに、それをそれ  
ども知らずに居るが何よりの恨み、聞かぬな

らばせめて誘つてくれよ、誘る人よりも聞いてくれぬ人が猶一層恨めしいとあるが如來の大悲。

古語

賤臣叩心飛霜擊於燕地  
庶女告天振襲風於齊堂

郷行と云ふ人、燕の景王に仕へて忠臣なりしが、倭人共これを讒言し、わるなしに云ふたを取り上げ、咎なき郷行を入牢申付けられしかば、郷行その亂暴なる刑罰を受くることを無念に思ひ、心を叩いて天に訴たれば六月の炎天に大霜がふりたどある、又一人の女が夫に先達たれ姑と共に細き烟を立て、居たが、夫の妹に心悪しきものありて、嫂を追ひ出そうと思へど孝行のほまれ高きゆへ意の如くならず、ついに悪心を起して母親を

殺し其罪を嫂にあぶせかけたので、ついに召捕られ親殺しと云ふ悪名の下に刑を受くることとなつた、彼女は誠に冤罪を蒙り、無念殘念のおもひで天に向ひ號泣しましたら、不思議なることには、俄かに黒雲がおこり、雷鳴ひびきわたりましたが、此甲にあたつて其國の君齊の景公が臺に登り酒宴最中であつたに、生憎臺の上へ落雷して齊公は即死せられたとある、この二つの話を云ひあらはしたが前に掲げた古語の意であるが、これらは罪なくして刑罰にあふはさて、口惜いと云ふ一念の心骨髄に徹したゆへ、天よりも其御應へがあつたので、わづか人間の心でさへ、其心に眞實があればそのまことは天まで響きわたる、況んや阿彌陀如來の利他深廣の大慈大悲

乃央過去の昔より何卒して助けたい救ひたいと思し召し初められた清淨眞實のまことの御心が、一切衆生の心の底にひいきわたりた、郷行や庶女の凡夫の誠でさへ天にひいく、今は如來の御誠が凡夫の胸にひいかせられたれば、今は其響にゆりおこされて、後生御助け候へと御こたへ申すやうになるのであります。

タイムリヨウジュキヨウ

大無量壽經【經名】

眞宗正依の經典なり、釋尊の出世本體にして第十八願を開説し他力至極を顯はす、

譬諭

水に溺れたる人

こゝに水に溺れたる人があらうに、やれく可愛やむごや、助けたいと云ふ慈悲はあつても、泳ぐ智慧がなければ流るゝ人を助く

タイムリヨウジュキヨウ

ることは叶はぬ、又何程水練に達した人でもこの寒さにどうして水の中に飛び込まれうぞと、目の前に溺れて苦しむ人を見ながらも、仕方がないよと唯ながめて居て、身をすて、も助けたいと云ふ慈悲がなければ溺れるものは救はれぬ、依て諸佛如來の衆生濟度も、智慧と慈悲とが揃はねば衆生を御助けなさるゝことは叶はぬ、然るに諸佛如來はいづれも智慧と慈悲とのましまさぬ佛はない、慈悲の二つ皆揃ふてあれども、末代の悪人女人、罪業深重のものゆへに諸佛の悲智の力にも及ばせられぬ我人の身の上、依つて蓮如上人は、そもく男子も女人も罪のふかゝらんともがらは諸佛の悲願をたのみても、今の時分は末代惡世なれば、諸佛の御ちから

にてはなかく叶はざる時なり  
 と仰せられた、このちからとある一言が、諸  
 佛の大慈力と大智力とをこめさせられてあれ  
 ども、今日の無信闍提の悪人、五逆十惡のい  
 たづらものは、助くること叶はぬと御見捨て  
 なされた、諸佛の慈悲にも智慧にももれたが  
 今日の人の上の身の上や、然るに今阿彌陀如  
 來の五劫思惟の御修行、今の如き諸佛のすて  
 玉ひた女人を、阿彌陀如來ひとり我助けずは  
 又いづれの佛の助け玉はんぞと思召して、無  
 上の大願をおこして我れ女人を助けんとて五  
 劫があひだ思惟し永劫があひだ修行して、世  
 に超るたる大願をおこして、女人成佛といへ  
 る殊勝の願をおこします彌陀なり」と仰  
 せられて、一切諸佛の智慧と慈悲とを彌陀一

佛に満足ましく、御智慧をいへば深廣無涯  
 底、御慈悲をいへば以無縁慈攝諸衆生、智慧  
 から云ふても慈悲から云ふても不足はない、  
 たのむ衆生をあやまたず、本誓重願むなしか  
 らず、必ず救ふ程に深く信せよと、釋迦如來  
 は大無量壽經に、如來の智慧と慈悲とを説き  
 あらはされたのである、即ち大經の正宗分を  
 善導大師は七科に分たせられて、  
 此彌陀の本願四十八願なることを明す、  
 願々皆増上の勝因を發す、因に依つて勝  
 行を起し、行に依つて勝果を感じ、果に  
 依つて勝報を感成し、報に依つて極樂を感  
 成し、樂に依つて悲化を顯通し、悲化に  
 依つて智慧の門顯開す、然るに悲心無盡な  
 れば智も亦無窮なり、悲智實行して即ち

廣く甘露を開く、茲に因て法潤普く群  
 生を攝する也、

と仰せられて、此善導大師の思召が、大經一  
 部は如來の大慈悲と大智慧とを説くより外は  
 ないこと見込みせられたが、此七科の御指南らや  
 初め勝因段より、勝行段勝果段勝報段感  
 成極樂までは、因位の大悲願成就の相、次の  
 悲化段と云ふは大悲攝化で、これまでか彌陀  
 の大悲門を明したまひた御說法、次が第七の  
 智慧段、こゝが大慈に因つて智慧を顯はした  
 まふ處で、彌陀の佛智不思議で助かるまじき  
 ものを助けたまふ程に疑ふなご、不了佛智の  
 疑を戒め明信佛智の信心を御勧めなさるゝ  
 斯くの如く大經一部は阿彌陀如來の御慈悲  
 と御智慧を説き述べさせらるゝより外はない

これが善導大師七科の思召ぢや、  
 彌陀の大慈ぶかければ、  
 佛智の不思議をあらはして  
 變成男子の願をたて  
 女人成佛ちかひたり

御慈悲をいへば水の中でも火の中でも御見捨  
 はない、御智慧をいへば五智満足の如來の御  
 智慧、こゝの處をよくよく聞ひらいてみれば  
 遠慮氣兼の手をはなれ、かゝる機までも御助  
 け候へど、彌陀一佛をたのみ奉るより外は  
 ない。  
 假名手本忠臣藏  
 假名手本忠臣藏と云ふ十一段續きの淨瑠璃  
 本がある、其中には高野師直の戀、鹽谷判官  
 の短氣、勘平の忠死、由良之助の智謀等いろ

くさまくのごとが出来てあれど、其宗とす  
 る處は敵討、其體を云へば忠臣の二字、忠臣  
 を骨にし敵討をたてものにして、十一段の草  
 紙が出来ておる、今なぞらへて云へば、祖師  
 聖人は大經の宗體を判じて、説如來本願爲  
 經宗致、以佛名號爲經體と仰せられてあ  
 る、宗は主也尊也要也で、其一經の主として  
 尊び、又要めとする處を宗と云ふ、俗に云ふ  
 たてものこと云ふ程のことなり、體とは其一經  
 の骨のことなり、大經は本願をこくがたても  
 のとなりて、名號を骨としておるなり。

タカクラテンオウ

高倉天皇

人名

名は憲仁、後白河天皇の第五子なり、六條天皇の禪を  
 受けて位に即く在位十二年改元四度位を太子言仁に讓  
 り明年崩す、壽二十二、

談義

高倉天皇の美德

高倉天皇は賢明仁孝の御方であつたことは  
 誰も能く存じて居るのであるが、天皇の幼い  
 時に紅葉を献上したものがあつたので、天皇  
 は極めて之を愛せられ、藤原信成に命じて大  
 切に之を守らせられた、處が或日の事、仕丁  
 の一人が、信成の留守に其枝を剪つて薪とし  
 酒を暖めて飲んだので、信成は歸つてこの有  
 様を見て大に驚き、早速仕丁を縛り上げた、  
 たまく天皇は信成に其紅葉を奉るやうに  
 この命令があつたので、信成は有體に事の次  
 第を申しあげ、全く臣の不注意より出来した  
 ことでありますから、如何様にも處罰仰せつ  
 けらるゝやうにと叩頭して罪を請ふた、する  
 と天皇は從容として「唐詩の中に、林間煖  
 酒燒紅葉」と云ふ句があるが、誰か仕丁に

教へてか様な風流させたのか」といはれ、別  
 に何等の叱責もなかつたのである、實にこれは  
 寛量の美德と申さんければならぬ。

タカヤマヒコクロー

高山彦九郎

人名

名は正之、字は仲繩、上野新田郡細谷村の人にして、  
 勤王の志士なり、寛政五年六月久留米に歿す、壽四十  
 七、

談義

高山彦九郎と強盜

高山彦九郎が或夜江戸を出發して郷里上州  
 へ越いたが、板橋驛にさしかゝつた頃はハヤ  
 良夜中であつたところが、橋の上に、筋骨逞  
 しい二人の偉男子が、頭を橋の中央に並べて  
 足を欄干の方へ出し、一の字なりに臥て居つ  
 たので、狭い橋のことであるから、ドコか兩  
 人の身體を踏まなくては、通行が出来ないの  
 である、ソコ彦九郎の思ふに、是れは官道

タカヤマヒコクロー

である、彼等が臥てをるのは、官道を塞ぐ罪  
 があるから、遠慮に及ばぬ、踏んで行くがよ  
 いと、一方の足で一人の頭を踏み、他方の足  
 で他の一人の頭をふみ、悠々として通り過ぐ  
 ると、二人の男子は直ぐに起き上り、大切な  
 人の頭を土足にかけたといふもので、刀を抜  
 いて彦九郎を斬りかけたが、彦九郎はビツク  
 リともせず、大喝一聲「咄」と呼で、其の儘  
 行き過ぎたので、二人の者は辟易して追撃し  
 なかつた、元來此兩人は強盜の巨魁で、平  
 生部下の者共をつれて富豪を脅迫して、金銀  
 を貪ぼるを仕事として居るものであるが、後  
 捕はれて獄屋に這入つた時「我等は平生脅迫  
 を仕事としたもので、左程怖しいと思ふこと  
 に出遇はなかつたが、何日か板橋の上に伏し

て通行の人をおびやかし、衣や財を奪はうとした際、一人の小男に出遇つたが、其小男が眼を瞋らして我等を呵り飛ばした時は、怖い目に遇つた事がない、今日になつても、其時の事を想ひ出すと思はず身ぶるいかする」といつたことである。

高山彦九郎の敷へ歌

高山彦九郎は寛政の奇士である、曾て皇城を拜して、皇恩を慕ふあまり、

我れを我れごしろめすかや天皇の

玉の御聲のかゝる嬉しさ

の和歌を詠せられたとある、又孝道を説くの敷へ歌がある。

一ツトヤ、人に生れし印には

親に孝行せにやならぬ

二ツトヤ、二人の親に預りし

體を大事にせにやならぬ

三ツトヤ、三年の間の母親の

苦しみ玉ふを思ひ知れ

四ツトヤ、よく思へば親程に

大事のものは外にない

五ツトヤ、何國の浦でも孝行の

人には御恵みあるぞかし

六ツトヤ、むかし々の教には

孝行ばかりは徳のもごと

七ツトヤ、何事よくても二親に

不孝なものは人でない

八ツトヤ、やつぱり親をば我身ぞと

思へば大事になるものぞ

九ツトヤ、心をよくつけて見よ

ひとりて大きくなるものか  
十フトヤ、とほから此歌おぼへたら  
世話をばやかかせず親達にく

タキクワクタイ

瀧鶴臺

人名

名は長燈、通稱八、長門藩の侍醫なり、安永二年正月歿す、年六十五、

瀧鶴臺と其夫人

長門藩の侍醫に瀧鶴臺と云ふ人がある、或時同藩士の娘に極醜婦がありまして、其不別嬪娘の評判といつたら近所近邊知らぬものもない位です、娘盛りになつても誰一人として貰ふと云ふ縁談を申込むものもありませんので、親は氣は氣でなく、ごんな所へなりとも嫁入りをさせたいと急りますれど、しかし娘は平氣なものです、少しもそんなこと

タキクワクタイ

に頓着なく、白粉もつけず紅もさす、髪は自分で結つて世間の娘達のやうに伊達風流の粧などいたしませんから不別嬪はますます不別嬪の評判が高くなるのです、或日、母親はそれとなく娘の氣を引いて見やうと縁組の咄を持掛けると、娘は鶴臺先生ならば嫁に入つても可いが其他の人は厭ですと木で鼻を拭だやうに色も露氣もなくキツパリと言ひ切つたので、母親も驚くまい事か大に驚いて暫しは開いた口も塞らず唯た呆然れ返つて居りました、ツは鶴臺先生と申せば當時萩の藩中で一番の大學者で男振も器量も佳くありますから母の此返事を聞いて吃驚したのも無理はありません、實に提燈に釣鐘釣り合はぬ縁ですもの母が聞いてさへ吃驚しますもの他人が聞い

たら何なに驚く事か嘲る事か知れません實に身の程を知らんにも程がある、小馬鹿の娘と……所が鶴臺先生この事を聞き出しましてッは面白い己の所へ来い、己の嫁になりたいは、之れ知己と云ふものだから、己が貰つて女房とせんと、早速、縁談調うて夫婦仲能く暮らして居りましたが、女房の起つ折りころ、と赤き鞠子の袂の中より轉がり落ちしを鶴臺先生見て不思議に思ひ、それは何の爲めなるかと問はれますと、女房はさも耻しげの風にて「あのこの鞠子ですか、この鞠子は妾が此方へ来てより拵へつゝあるので……その譯ですか、其譯は斯うなんです、妾はまことに不束ものですから過失ばかり多く、それを矯め直さんと致しまして、赤の鞠子と白の鞠子と二つ拵へ過失のありし時は赤糸を巻き又善いことのあるときには白糸を巻き、初めの程は過失ばかり多かつたから、赤の鞠子が自然と大きくなりましたので、これではならぬと一層物事に注意を加へ、萬事慎しみてやりましたら、今では赤の鞠子と白の鞠子と同じやうになりました、これ御覽なさい、此通りであります」と赤白の鞠子を二つみせませと、鶴臺も其心かけのわらいのに大に感せられたとある。

タクアン

澤庵

人名

澤庵禪師の幼時  
澤庵禪師の幼時

品川東海寺の開山澤庵禪師は、義禪和尚の

弟子で、幼名を禪二と申して、幼少から禪學を修め、才力も一寸ありたものであるから、問答などを致しても、三度に一度は義禪和尚もまいると云ふ始末でありた、或時義禪和尚が突然に手をお拍ちになつて云はるゝには、「禪二やこの手の音は左の手で鳴るのか、又右の手で鳴るのか」と問ひますと、禪二はつか／＼と進んで鬮を兩足に挟みて曰く「御師匠様、私は左の座敷へ這入りますか又は右の座敷へ這入りますか」と、時に和尚の曰く、貴様は拙僧が左へ這入るといへば右と云ひ、右へ這入るといへば左と云ふであらうがや」と申しますと、禪二とりあへず「お師匠様も私が手の音は、左か鳴るといへば右と云ひ、右か鳴るといへば左と云ふのでござりませう

と云ふたごのことであります。

澤庵禪師と雲水  
禪二は本堂の掃除をして居りますと、門の方から行脚僧が這入つて来て「たのむく」と呼ばはりますから、禪二は早速庫裡の方へまいりまして應接に出ますと、雲水僧の曰く「拙僧は越前の〇〇寺のものであるが、當寺の和尚と一つ問答をしてみたいのでまいりました、大和尚は御在宅であるか」と尋ねました、禪二「ア、折角の御出であるが、和尚は風邪でねて居らるゝ、面會謝絶である」と答へた、雲水も閉口して「然らば他日伺ひ申さん」とて立ち去らんと致しますと、禪二曰く「もしく貴僧も折角の御尋ねであれば、何か問答とあれば拙者がやりませう」と促す

と、雲水僧の曰く「貴様のやうな豆小僧が、  
 なんて問答が出来るか」と冷笑した、禪二「  
 ヤア貴僧は餘程馬鹿ものである、姿が小さい  
 と云ふが、成程重い荷物でもかつげとか、脊  
 おへとか云へば出来ぬかもしれぬが、禪學上  
 の問答は姿の大小には関係はないことだ、山  
 椒は小粒でもひり／＼辛ひ、大きな唐辛でも  
 辛くないのがある、なんだ馬鹿にするな、獨  
 活の夫木め」と、雄辨滔々とのべますから、  
 雲水僧も驚いて「イヤハヤ能く喋舌る小僧だ  
 近頃以て面白い、一つ試みに拙僧に尋ねろ」  
 と申しますと、禪二「よろしい、尋ねることも  
 併し拙僧を小僧と思ひ馬鹿にしたから普通で  
 はならぬ雲水僧」、然らばどうする考だ、  
 禪二「貴様も鐵骨を持つておらるゝ、拙僧は

幸ひ箒を持つて居るから、私の間に答へらる  
 れば貴僧は拙者を三十棒でも四十棒でも叩  
 き下さい、それと同時に私の問が答へられぬ  
 と、此箒で打つて／＼打ちまくる考へである  
 と申しました。  
 時に雲水カラ／＼と笑ひ「これは面白い約  
 束ぢや」と、早速承知をいたされた、雲水の  
 曰く、何でもきけ、禪二曰く「然らば問ふ、  
 三度問ふ、三度問ふて答へぬと打擲するぞ」  
 と念を入れて問ふて曰く、  
 いんせつの、ねやのたんべう、つくいす  
 か、  
 とは如何に」と申しますと、雲水僧、無言、  
 又曰く、  
 いんせつの、ねやのたんべう、つくいす

か、  
 とやります、雲水僧には更にわからぬ、又問  
 返して、

いんせつの、ねやのたんべう、つくいす  
 か  
 と三返問ひますと、例に依つて分らぬ、禪二  
 はこの時と思ひまして、箒で十も二十も打つ  
 て／＼打ちまくりました、すると雲水僧もほ  
 う／＼の体で飛び出したとのことでありませ  
 ずこれは考へてみれば何でもない、禪二が普通  
 のことをきけば必ず答へるから、彼の考への  
 及ばぬことを尋ねんものと、  
 雪隠の屋根の飄簾數いくつ  
 と云ふ句を倒に「いんせつの（雪隠）のね  
 やのたんべう（屋根の飄簾）つくいすか」數

幾つ」と云ふたので、雲水僧の考へ以上の所  
 を尋ねたが、彼れの英智なる所だ。

澤庵禪師と但馬守

品州東海寺の澤庵禪師は三代將軍の御歸依  
 深かつた方で、或時將軍が、  
 海に近くして遠（東）海とはこれ如何、  
 と仰せらるゝと、直に、  
 大君と稱して小（將）軍と云ふが如し、  
 と申上られたそうである、當時幕府の劔道指  
 南番たる柳生但馬守は澤庵禪師の門に入つて  
 禪法を修め之を劔道に應用して、ます／＼其  
 技神に入つたと云ふことであるが、一日禪師  
 が、將軍に御目見をして、御殿を下ろうとす  
 ると、但馬守はいつとなく顔色青さめて兩眼  
 に涙を宿しておるのを見つけ、その譯を御尋



ねになると、但馬守は「御存じの通り私には三人の男子がござります、長男十兵衛は只今大和正木坂におりまするが、剣術を學ぶに熱心すぎて、發狂いたし手もつけられませぬ、次男は病身、三男は家出して今に行衛不明でござる、三人も男子を持ちながら、家をつくべきものが一人もないかと思へば、先祖へもすまず、爲めに一方ならぬ心痛を致しますと云はれた禪師は大に同情を表し「それはごいも氣の毒千萬、病身のものには醫者、家出は警察長男の發狂丈は何とか癒してやりたいと」仰せられ翌日飄然として品川を去り大和正木坂の陣屋に来て「たのむく」と云ふ家來が来て「ごころから来たか、十兵衛の病氣を癒しに来た」いやごころから来たのか「雲水だから

大かた山のへんから出て来たのだらう」家來は驚いて之はまた主人以上のキ印がまいこんだと思ひ早速主人にとりつぐと十兵衛大に怒つて「すぐに座敷へ通せ不届な坊主だ」一うちに殺してやる、そこで禪師は座敷へ通りつと十兵衛の顔色を見つめて居られる、十兵衛に向つて「ね前は天下の名人だと威張るが何を知つてる、少しばかりの劍術に高慢するとはけちな男だこの眼色では餘程狂ふて居るな、親の心配するものも尤もだ」といふ、十兵衛大に怒り「愚僧此方を罵りに来たか殺してくれやう」と刃に手をかける、家來ははたでびく／＼して居る禪師は悠然として「お前は劍道に殺人劍と活人劍のあるのを知つてるか」「そんな事は誰でもしつてる」「そんなら四人

で討つて来たらどうする」「四方に當つて斬る八人ならば」「八方にきる」「十六人ならば」「十六方」「三十二人ならば」「三十二方」「六十四人ならば」「六十四方にあたつて斬りまくかなわぬ時は自害する」してみると天下の名人もたつた六十四人力しかないのかはてさてあはれな者ぢや「十兵衛大に怒り口は坊主だから、甘い腕をみせろ立ち會へど刀を取つてかゝる、禪師はまた十兵衛今こゝに歌がある之が劍道極意の歌だがお前が其を説明し得れば愚僧の頭をやる、もし又その説明ができん時には愚僧の弟子とならしつやい」と支度して来たこと見ると一枚の短冊をだした、

随分妙な歌である十兵衛もいくら考へてもわからぬそこへ禪師がごし／＼付こんであせる十兵衛たまらなくなつて短冊を握つて自分の居間へとびこみ机に向つて一心不乱に考へたがだん／＼氣が落ついて来たこと見えてつかれも出たものかすや／＼と寢入つてしまつたこちらは禪師さん／＼十兵衛をひやかしておいて「さあ！御家來今に十兵衛がわしの弟子になるわしはお前等の主人の師匠鄭重に取扱へ酒肴十分もつて來い、家來も驚いたがいかに禪師の顔色氣高い品位があるので十分もてなした、十兵衛は寢りがさめてあ……と氣がついた時夢が醒めた様に感じ家來をよんで今迄の亂暴發狂、老雲水の訪問、首をかけた短冊等の出來事をき、是は只の雲水ではない

イな立つなすわるなすわるな  
かつなまけるなしるもしらぬも

必ず父上の御師匠東海寺の澤庵禪師ならんと  
 禮服に着がへ客間に通つて禪師に厚く無禮を  
 謝した禪師も深く其の効のあつたのを喜び父  
 但馬守の苦心を見かねて命を嗜してお前を治  
 療に來たと話し是で一同祝盃をあげた事であ  
 つた、さて十兵衛が歌の意味をきくと、禪師  
 も「それは俺にも分らぬ」と仰せられた、か  
 くて禪師は十兵衛を伴ひ江戸に上り目出度父  
 子の對面をさせた、十兵衛之より禪師を師と  
 して深く禪の奥義を研め父のあこをうけ家名  
 をつき將軍の指南役とまでなつたが頭を剃り  
 衣を纏うて居られた相である、之は單に眠氣  
 ざまじのやうな話であるが禪師が精神療法を  
 以て十兵衛の發狂を治したのは之に注意すべき  
 事柄であります。

談叢

澤庵禪師短氣の治療  
 澤庵禪師の許へ一人の男が至りて申すやう  
 「私は短氣なのが持前で、いろ／＼と苦心す  
 れども中々治りません、時々これが爲めに過  
 つことがあります、願はくは禪師の御力を以  
 て之を御治し下され」と云ふた、禪師靜に答  
 へらるゝやう「それは如何にも御困りでござ  
 りませう、短氣は損氣と云ふて短氣ほどつま  
 らぬものはない、其短氣を治してあげますか  
 らさあこゝへ出して御覽なされ」と云ふた、  
 其男あきれたる顔つきして云ふやう「短氣は  
 持ち前とは申しますれど、今は折り悪しく起  
 りておりませぬから、御見せ申すことは出来  
 ません」と答ふ禪師此において論して云はる  
 ゝには「然らば短氣は御身の持前と云ふもの

之を自分の性分ちやと許すは以て  
 の外の誤りである、短氣は自分の誤りにて致  
 方なしと許せばこそ、時々おこりて止め兼ね  
 るのです、この性根直さでおくべきかと、つ  
 ぐめて抑へる心懸さるれば、治らぬ道理は  
 ありませぬ」と、くれ／＼誠められたとある  
 澤庵禪師と水野十郎右衛門  
 澤庵禪師は道德の聞へ高き人にて、世人の  
 渴仰大方ならざりしに、水野十郎右衛門と云  
 ふ人之を聞いていま／＼しく思ひ彼が禪學に  
 富めばとて何程のことかある何時か和尚に逢  
 ふたれば挫折してやろうと云ふておりました  
 一日、たま／＼澤庵に逢ひましたから、水野  
 は「地獄極樂はあるものかないものか」と問  
 ふた、すると禪師は「我も亦これを知らず」

と答へられた、其處で水野は烈火の如く怒り  
 「其有無を知らずして人に後生をすゝむるは  
 何故であるか」と詰問した、禪師曰く「貴所  
 は雨天に他行するときは如何なる装をなさ  
 るか」水野曰く「身には合羽を着け馬に乗り  
 傘をさして出てゆきます」禪師曰く「晴天  
 には如何し玉ふや」水野曰く「笠も合羽も用  
 ひませぬ」禪師曰く「もし急に雨ふり來らば  
 如何なさるゝ」水野曰く「其用意には常に笠  
 合羽を備ふることであるから降り來らば直に  
 之を用ゆるのであります」禪師曰く「雨具を  
 備ふるも雨ふらざる時は如何したまふや」水  
 野曰く「其儘もたらし歸るのみである」禪師  
 曰く「其儘もたらし歸らんよきは、寧ろ初め  
 よりもたらせざる方が勝れるにあらずや」水

野曰く「雨ふると否とは初めより知ること能はず、ヒヨット降る時に困るからそれで用意にいつも持ておるのである」、それを聞いて禪師は襟を正して仰せらるゝやう、「後生を願ふも此道理と同じことである、地獄極樂のあるなしは豫め知ることは出来なひかなれどももし有るときは困るからそれで平生に後生の用意をしておくのである」と論じられたら、水野も大に感じ入つたと云ふ話がある。

煩惱の雲はれやらぬ旅なれば

常にはなすな南無阿彌陀

歌

蜘蛛と毛蟲の話

澤庵禪師、或時門弟の人々に語りて云はるゝやう「大なる蜘蛛の檐にかゝりたるを地に落せば、足は収めて石の如くなりて死をのが

れむことを計る、彼れの小智にして人を計らむとす、少しなりとも走りのがるればその程も命存すべし、彼の計は人よく知れり、彼は思ふべし、人は知らじと、無智の人、有智の人を計ることも蜘蛛の謀略に同じ、又、毛虫の大なるもの地上に行く、これを犯すときは即ち憤然としてそりまがれり、斯くの如くなれども、人これを事とも思はず、小人の大人に向つて此の如き風情をなすこと毛虫に異ならずと。

澤庵禪師と花魁

東海寺の出入のもの澤庵禪師のところへ花魁を書ける掛物を携へ行き、是非一つ賛を願ひたいと頼みました、禪師はこれを一覽してニッコリ笑ひ「ア、よく書いてあるはい、と

「か斯様の美人を側に置きたひものぢやなあと、獨り言を云ひつゝ筆を取り、

佛は法を賣り、祖師は佛を賣り、末世の僧は祖師を賣る、汝四尺の真中を賣つて

一切衆生の煩惱を安んず、色即是空、空

即是色、柳は緑り花は紅の色々か

池水に夜なく、月は通へども

心も留めず影も残さず

と即座にもせられたとある、依頼した人は定めて澤庵禪師は困却せらるゝであらふと思ひの外、忽ちに、一氣呵成の賛をなされたることゆへ大に其禪師の洒脱の境界に驚いたことである。

逸話 澤庵禪師の辭世

澤庵禪師の臨終に、弟子達が辭世を乞ふと

タクアン

禪師は唯、

夢

の一字を書かれたとある。

歌 蕎麥粉と總嫁

澤庵禪師の許へ、或人が蕎麥粉を贈るとて

子供すら持たぬ法師の身にしあれば

蕎麥粉を以て申入れ候

と、一首の狂歌を添えて使はしましたら、和尚の返しに、

蕎麥粉とてたまわるからは我子なり

まゝ子にすなと申付け候

雜錄 澤庵禪師の法語

澤庵禪師の法語に面白い語がある

此世は夢なり、久しかるべからず、財寶多く集めて持て喜べども、夢の枕に金を

得て實の金と思ひ悦ぶこと限りなければども、覺める時金にあらざるが如し、夢の中にこれ夢なりと知らぬものなり、覺めて後こそ知れ、  
處世大夢の如し、夢中夢を説く、毀譽我に於て何かあらむ、禍福畢竟何爲るものぞ。

羅録 澤庵禪師の手紙

借金に苦む人に與ふるの書  
御手前萬事御才覺肝要に候、先書も天道次第の御文尤に候、其分なる義も候へどもたい天道より金銀米穀を興へたる事はなく候縦へば一石の米をかたはし食ひはて、其時天道より借銀借米有る間敷候、何事も人間の業と御心得あるべく候、天道は此方次第のものにて候、世上申す天道は、遙に違ひ申候

古今に蓮の葉は丸く、松の葉は細く候、其如く我身に應ずる天道をよくわきまへ、少年の者は引きがり華麗をせず、大名は夫程に身を持つ所則ち天道に任ずると申候、百石取る身に二百石とる人の體、天道に背き、身に不似合なる振舞をする人は一生貧乏神の責物にて候、鶉の眞似する鶉は水に溺れて死する、天道の罰にて候、鶉は鶉、鶉は鶉の働天道の本理にて候、箇様な謂を不知して、天道と計り、人毎にいふて、寝て、いつも天道より彼に食を被與候様に思ふ事、大なる誤也人は品々に世をわたる天道にて候、然るに細工人も定規なくてはならざるものにて候、人は人を定規にするが能く候、但我心の様なる人を定規にせば、三五の十八にて候、分限を

我と不申して、身を持つ分別、能く摺切ぬ人と申す事にて候、杓子定規如何、是は天道に御背き候間つまり悪敷候、半分笑止候、我等申事違ひ申しまじく候、冬は寒きものにて候若しあたかなれば明年涼しからず、夏暑からざれば秋萬事あしく候、物事に位の正しき處が天道にて候、大小ともに身の分限に應じて、十人抱て可然候得ば、七八人の心持、後悔少く候、月を御覽可有候、十五夜は圓滿に候へば、一分づゝかけ申候、是れ人間の見せしめなり、

思へたい、満つればやがて虧く月の十六夜の空や、人の世の中此歌至極の理に候、長文のてい、むつかしく候へども、兄弟に生れあひ、御爲よく候へか

しと如此候、何とぞふうを御かへ候て、借金のないように御分別專一に候、親類に遠さがり、したしき知音に恨を結ぶも、多分貧故にて候、

心だに、誠の道に叶ひなば

祈らすとて、神や守らん

皆是れにて候、尙後音の時を期し候、恐惶の

羅録 澤庵禪師の和歌

澤庵禪師 和歌に巧みなりし、左に二三を掲げてみやう、

歳暮

とやせまじかくやせまじとおもひつゝ、

今年も今日を限りとぞなる

釋教

夢破る心の月もひかりそふ

くもの林の曉の鐘  
嬰 麥

たらちねの生そだつるもかくばかり  
朝のめぐみの露のなでしこ

タケタシンゲン

武田信玄

【人名】

名は晴信、後薙髪して徳榮軒信玄と云ふ、勇武にして善く戦ひ詩歌を善くし痺痺を解す、實に名將なり、元龜三年四月平谷に卒す、年五十三、

談話

武田信玄の喪を秘す

武田信玄が甲斐に割據して居られた時は、武勇の人にくれた大將なれば、越後の謙信を初め、天下の人々皆かの信玄を恐れて、誰か一人むざく、敵たふ人はなかつた、後に病氣にとりあひ、此度は本復なり難しと云ふことを知つて、多くの白紙に自らの名判を書いてこれをのこし、我れ命終りたれども必ず

喪を發するな、人に死んだと云ふことを知らすな、諸方への手紙に我が自筆の名判を見せよと懇口に申おいて程なく命終られた、その時遺言を守りて信玄逝去の様子をつゝみかくし、諸方への手紙に信玄自筆の名判をつかはせば、謙信を初め信玄今に存命と思ふて、深くおそれたが、何程つゝみ隠しても信玄逝去のことがうすく世の中へ知れるやうになつたので、さうく隠しもならねば喪を發すると云ふて逝去の由を披露するや否、信玄の子息武田勝頼は信長に攻められて一時に亡びて、仕舞ふたごある、信玄の壽命さへあらばいつまでも亡びぬのみならず、ついに天下を掌握せられたであろうに、さてく思ふやうにならぬは婆婆の有様であります。

逸話

武田信玄の明言

武田信玄が或時隣國の北條氏康と戦ふたことがありますが、其時に氏康の臣下でありながら、氏康に不平を抱いて居た一人の武士が信玄の方へまいりまして申すやう、「ドーカ武田家の家來にして下され、さるかわり北條家の要害や氏康の人となりをよく心得ておりますから、それを逐一御土産として申上ませうと云ふと、信玄の云はるやう、「自分の主人をすて、敵國に入り、自分の國の事をどやかく申すやうなものは、又何時如何なることあつて此國を出て、敵にいろくなことを通ずるやも計られぬ、此やうな不忠實なる人物はあつて益なき武士なりとて、斬つてすてられ

逸話

武田信玄と兵法の極致

武田信玄、或時近習の人に「明日は兵法の極致を教へるから、身體を清め、禮服を着用して來い」と云はれたから近習の人はどんなことであろうかと思ふて、其翌日は齋戒沐浴して威儀をつくるひ信玄の前に出ると、信玄は約束通り兵法の極意を教へるといつて、イト莊重な口調で「油斷大敵」と呼んだばかりでありた。

油斷をば大敵なりとこゝろゑて

堅固にまもれおのがこゝろを

歌

人は城人は石垣人は堀

なさは味方あだは敵なり

これは信玄が自警の歌であります、この意は、一國の城主たるものは、城や石垣が何程

堅固になつてあつても、心になさげがないと戦ひには勝てぬ、故に城主たるものはなさがあつて臣下を撫育し民百姓をあはれむなれば、國中のものは、皆無形の城となり、無形の石垣となり、無形の堀となりて主の爲めに働いてくれるゆへに、ますく國が榮へると云ふ歌の意である、ケ様な心得で仁政を施されたものであるから、世を去られた後までも其徳があらはれて、勇者を出すやうになつたのである。

武田信玄の和歌

武田信玄曾て扇面に記して曰く、  
誰もみよ満つればやがて欠く月の  
十六夜の空や人の世の中  
又曰く、

夜なく寝られぬものを秋の夜半  
思ひ入るさの山の端の月  
又曰く、

人多き人の中にも人ぞなき  
人ぞなれ人人となせ人

武田信玄の家法

- 一 戰場に於て聊か未練たるべからざる事、吳子に曰く、生を必ずすれば則ち死し、死を必ずすれば生ず、
- 一 毎遍虚言すべからざる事、神託に曰く正直は一旦の依怙にあらずと雖も、終に日月の憐みを蒙る、
- 一 家中の郎従に對して慈悲肝要の事、三略に曰く、民を使ふ四支の如し、參禪爲すべきの事、參禪別に秘訣なし

唯生死の切なるを思ふのみ、

一 善悪能く正すべき事、三略に曰く、一善を廢すれば則ち衆善衰へ、一惡を賞すれば則ち衆惡歸す、

一 佛神信すべきの事、曰く佛心叶へば時々力を添へ、横心を以て人に勝てば露はれて亡ぶべし、傳に曰く、神は非禮を享げず、

一 隱居の時その子の力を借るべからざる事、碧巖に曰く、柳標横擔人を顧みず直に千峯萬峯に入りて去る、又曰く、是非を犯し來りて我れを辨するなし、浮世穿鑿相關せず。

タケノウチスク子

武内宿禰

人名

孝元天皇の皇子彦太忍信命より出づ、景行成務仲哀臨

タケノウチスク子

神仁徳の五朝に歷任し在官二百四十四年、

武内宿禰油斷を警む

景行天皇が百官を集めて夜宴を開かれた時天皇の第四子と武内宿禰の二人だけが出席せなんだゆへ、天皇も不審に思召され、何故に彼等二人は折角の催しに出席せぬぞと、少し御不興の体でありたが、其夜も遂に無事に宴會を終へ、翌朝早々兩人を召して欠席の理由を詰問せらるゝと、其時兩人の答に「酒宴は人の心を弛め氣に油斷を來すものであるゆへ皆が酔に乗じて寢入るものもあれば、現ぬかして躍り狂ふものもある、門番も酔ひ倒れ、殿衛も氣を弛めて居ては、もし悪人が居たら此油斷を窺ふて如何なる大事を起さんか計り難しと大に氣づこう處より、前夜は二人にて

御城の守護をしておりました」と答へられたれば、天皇は殊の外御感賞あらせられ、遂にこの第四皇子をば太子に立てられた、御嫡子があるにもかゝはらず、第四の皇子を太子となされたは、油断をせぬと云ふ御心懸一つが太子冊立の因となりたのである、この御方が後に成務天皇とせられたのである。

武内宿禰と神明の批判 「セイグワン」の下をみよ

ダテマサム子 伊達正宗 【人名】

左京大夫輝宗の子なり、秀吉家康に仕へてしばし戦功あり、後、仙臺城主となる、寛永十三年五月卒、年七十、

逸話 伊達正宗と不動明王

伊達正宗五歳の時に城下の御寺へまいりて佛壇の不動明王を見て、家來を顧み、「中々に

猛けくしい姿ちや、これは何と云ふものか」と問はれたから、家來が「これは不動明王と申して、顔はかく恐ろしく候へども、心は慈悲ふかくして衆生を救はせ玉ふ御方なり」と申上ぐると、政宗、うなづいて、これこそ武將たるもの、倣ふべきものちやと云はれたと云ふことである、手に降魔の劍を持つ軍人も亦この慈悲心を失ふてはならぬ。

羅録 伊達正宗の教訓

伊達正宗は、勇略當時の群雄を絶するのみならず、文學の才あり、嘗て耶蘇教徒の跋扈を憤り南蠻を遠征するの志あり、歌ふて曰く、

圖南鵬翼何時展 久待扶桑萬里風

又、左の如き教訓あり、

仁に過れば弱くなる  
義に過れば固くなる  
禮に過れば諂となる  
智に過れば嘘をつく  
信に過れば損をする

タヒラアツモリ 平敦盛 【人名】

參議經盛の子なり、其職掌なきを以て世に無官の大夫と曰ふ、一の谷に戦死す、時に年十六、

因縁 敦盛卿の求法

壽永二年三月上旬、法然聖人吉水の御庵室にて御化導の折柄、年はやうく十六の花のつばみの敦盛卿は供をもつれず唯一人、御庵室へ御出なされて、「聖人御在宿ならば御目にかゝりたい」と申入れられた、聖人はすぐ

タヒラアツモリ

に御出遇ひなされて、「ヨウこそ御入來下された、何等の御用向でござりまするか」と尋ねなされる、「イヤ別儀ではござらぬ、かねて御聞及びの通り源氏の勢ひは旭日の登るが如く、平家の運は少水の魚の如し、又しては打ち負け又しては敗軍、それがしも明後日は都出立仕り須磨の陣所へ趣かねばなりません間もなく合戦が始まりませう、今度の軍にはとても勝利は覺束ないが、必定戦死と覺悟をきめてみますれば、未來の程が眞闇黒でござります、筒様なものも未來助かるゆはれがましまさば、たつた御一言御きかせ遊ばして下され」と申上らるゝと、聖人御老眼に涙をこぼさせられ「五十六の老人でさへ出かける未來とふみしめてみれば未來の行く先がくら

いもの、十五や十六の御公達、打死と覺悟すれば、未來がくらしいとは御無理はござらぬ、左様ならば御話を申しませう、彌陀の本願六字のゆはれば、其間いを明るくしてとは仰せられぬ、其間いなりで彌陀をたのみ念佛するばかりで間違ふ西方淨土へ往生のとげらるゝのが、第十八願の御約束でござる」と仰せられたる御一言、その御一言の下に敦盛卿は廓然大悟、「さてはうれしや有難や、聞かりを願くしてと仰せられたら如何致しませう、聞いなりで本願を信じ念佛申すばかりで御助け下さることは、如何にも難有うござります、左様なら御暇申します、唯何事も未來蓮華の御座で御禮を申しませう」と、喜び〜歸へられたとある。

タヒラキヨモリ

平清盛 【人名】

刑部卿忠盛の長子なり、守領の國郡は天下に半ばし、寓、王室に倍す、衣服冠帽皆華麗を極むるを以て、時人六波羅様と云ふ、養和元年七月薨す、年六十四、

談話 清盛の事蹟

平清盛と云ふ御方は大層出世の早い人で、最初の處でみると父の忠盛と云ふは警衛の武士と云ふて身分の低い人であつたが、清盛は早く出世して安藝守、今で云ふ廣島縣知事位になつた、然るに段々此人の運がすゝみ官等が上つて、さう〜太政大臣になられました太政大臣は藤原家でなければならぬのに俄かに武士が太政大臣と成つた、今迄は大臣即ち藤原家から必ず皇后様が御上り爲さるることになつて居たから、清盛も自分の娘を皇后様にしたくてならぬ、さもないければ藤原氏の真似

が出来ないから、そこで幸ひ一人の娘があつたので、それをさう〜皇后様に上ることにした、これが建禮門院と云ふ方なのである、自分の娘を皇后様にしたまではよいが皇子がなくてはずまらぬ、さうか天子様の祖父になりたひと思ふてゐると、建禮門院が懐妊せられた、清盛は非常に喜んで、モハヤこの上の望みは是非男の御子様と云ふので、安藝の宮島へ願をかける、江州竹生島の辨天へ代參をたてる、いよ〜分婉と云ふ事になると、玉の様なる男の御子様が生れになつた、其時の喜びは非常なもので、清盛喜極而哭す日本外史に書いてある、嬉し泣きに泣いたとある、これが清盛の果報が十分に満たので、この御子が安徳天皇である、清盛は自分の娘

の生んだ男の子を早く天皇の位につけて見たくてたまらぬ、そこで父帝の高倉院様を押籠めて安徳天皇を御位に御つけ申した、これが平家の傾く初めとなつて、安徳天皇を御抱き申したまゝ、西海の藻屑とならんければならぬ事が起つたと云ふことは明かでございます、ケ様に清盛と云ふ人は十分を求めたものであるから、終りを全ふすることが出来ないのであります、徒然草にも、花は盛り月は隈なきを見るものかとはあつて、花が眞盛りになればモハヤ散る支度でございます、咲きも揃はず散りも初めず、即ち八分目の處が極めてよい、月を見るにも、チラ〜と雲のかゝつた處に味ひがある、すべてものは萬事ひかへ目にしてゆかねばならぬので、其八分目を過



すと云ふと必ず禍が起つて來ると云ふことは、この清盛の事蹟に徴して明白であります

タヒラコレモリ 平維盛【人名】

内大臣重盛の長子なり、容姿至りて美なりしを以て人呼んで櫻梅少將と云ふ、後、高野山に上りて僧となる時に年二十五、

因縁 維盛の憐れなる最期

小松の内府重盛公の嫡子權亮三位中将維盛卿は、一の谷没落の後、一門屋島へ引取りし時、抜けく粉川寺に至り法然聖人に謁して、念佛の法門を聴聞したまひ、それより高野へ登り、幸ひ以前の家來齊藤瀧口なるもの入道して居るに逢ふて、佛門に入り出家となり、それから熊野三所權現へ參籠まし、濱宮の王子の前から一葉の舟に乗りて、沖中の金島と云ふ小島へ上りて、松の木を削り自ら

姓名を書記し、元暦元年三月二十八日、生年二十七歳、

生れてはついに死ねてふ事のみぞ

定めなき世に定めありけり

此歌をかきつけ入水したまひたさある、ナントあはれなことではなひか。

因縁 維盛と法然聖人

平維盛卿が紀州の粉川寺へ參詣せられた事がある、これは去る治承の頃、小松殿熊野參詣の序に彼の寺へ參詣し、書き置きたまへる守札があることを聞かれて、一度父の手跡を見やうとの思召であつた、果して彼の守札は残つておるが、落つる涙に墨消れて文字のすがたは見へねども、重盛と云ふ字だけは彫つて墨を入れてあるからよく見へるので、泣

くく之を見玉ひ、實に手跡は千代の形見なりとは最もなること、思ひ今昔の感に打たれ玉ふたのである、それから御堂に入り觀音の御前に念誦して御座ると、僧一人出て來りて云ふやう、「何處より御參りぞ」維盛答ふ「京の方より」僧云ふ「法然聖人の入り給へるを聞き召して御まいりか」維盛は其事は知らぬ

タヒラシゲモリ 平重盛【人名】

清盛の長子なり、資性謹原深く佛教に歸し髪を削りて名を體空と改む、又は體籠大臣とも云ふ、治承三年薨す、年四十二、

因縁 重盛父を諫む

小松内府重盛は、清盛の長男でありますれど、生れ付が親にも似ないで、すべて萬事を控目にやる物の道理の分つた人でございませう、父の清盛が白河法皇に背き、法皇を相手にして戦ひをしようとする時に之を諫めたるは重盛一人でありた、佛の教に四恩と云ふことがございませう、あなたは御出家なされた御方であること云ふことを冒頭に於て、佛に仕ふる身

ものですから「何事に入寺し給へるぞ」と問ひ返すと、此間念佛法門の談議ありと答へました。

そこで維盛は丁度幸ひなことであるからと云ふので、聖人に御目にかゝり、色々身の上の御話をなされ、生死出離の近道を教へ下さるやう御願なされましたものですから、聖人も念佛の法門をこまゝと説き玉ひ、御教

が佛に背くことは出来ずまい、四恩の中ても國王の恩が第一である。釋迦如來か説かれた、然るに法皇に敵對申すとは何事ござるか。云つて諫められた時には、さすがの清盛も一言もなかつた、清盛は軍の仕度で緋緘の鎧をつけて居たが、重盛の姿を見るとき其上に黒衣を被て會つたと云ふ話でございます、重盛がいくら諫めても、どうしても聞き入れず謀反を企てたものです。だから重盛は自分の親を不忠な人にするは残念だが、さりとてそう云ふ人を親に持つたのであるから、これ又致方がない、君に忠ならんとすれば親に孝ならず、親に孝ならんとすれば君に忠ならず、忠孝兩全、君にも忠親にも孝と兩方を全ふすことが出来ぬ、と云ふて自分に切腹して死す

れば、親に對しては不孝になり君に對しては不忠になる、どうかして此儘一日も早く病氣で死にたいと云ふて、熊野權現へ私の生命を縮めて下されと願ふたと申すことございます、女々しいやうであるが其志を察しますれば、亦大に憐むべきことである、熊野からの歸り路に馬から落ちて怪我をした、それが病となつて遂に亡くなられたのが重盛である

**談議** 重盛の信仰  
平重盛は佛教信仰の篤き人でありました、平家物語の中に斯う云ふ記事がある、この大臣(重盛)は滅罪生善の志、ふかくおはしければ、當來の浮沈を歎き六八弘誓の願になぞらへて四十八間の精舎を建て、一間に一つづゝ四十八の燈籠をか

けられたりければ、九品の臺眼の前に輝き、光耀蘭桂を磨きて淨土の砌りに臨みぬるが如し、毎月十四日五日、經を轉じて大念佛あゝしかば、當家他家の人々の許より顔貌好く若く盛なりし女房を盛して一間に六人づゝ、二百八十八人の尼衆と定めて、かの兩日が間は一心不亂の唱名の聲怠らず、誠に來迎引接の悲願もここに影向を垂れ攝取不捨の光りも此大臣を照し玉ふぞと覺へたる、十五日の日に中を結願として大念佛ありけり、大臣行道の中に交はりて、西方に向ひて手を合はせ、南無安養世界の教主、彌陀善逝三界六道の衆生を遍く濟度したまへと廻向發願したまへば、見る者慈悲心を起し聞く

もの感涙をぞ催しける、それよりしてこの大臣を燈籠の大臣とは申しけれ、又、源平盛衰記の中には、

行歌曲  
心のやみの暗きをば  
燈籠の火こそ照すなれ  
彌陀の誓をたのむ身は  
照さぬところはなかりけり

**タヒラタタノリ** 平忠度 **人名**  
刑部卿忠盛の子なり、力業に邁れ馳名一時に震ふ、又、藤原俊成に學びて和歌を善くす、壽永二年一谷に戦死す、年四十一、

**談議** 忠度の歌道熱心  
安徳天皇の御宇、壽永二年には木曾義仲は京都に打ち入りました、平家の一族は、殿大臣を始めとして、皆共に棲みなれし都をすて

西海へど落ちゆきました、其時に薩摩守平忠度は、一族と共に淀の川尻まで落ちゆきました、再び都に立ちかへり、情深き女御とあかぬ別れを惜みつ、夜更けて後、當時絶世の歌人三位藤原俊成を五條京極の寓居に訪ひました、かゝる世の習ひ、いぶせき夜半のことなれば、三位には戸をば細目にかけて對面せられました、忠度「かゝる身として憚りあれども、所詮一門の榮華つきて都に安住する能はず、今や正に西海に落ちんとす、承りますれば、卿には勅撰の御沙汰ありしと、コハこれ年ごろ讀み集めたりしわが詠草であります、身と共に西海の藻屑とするに忍びませぬから、願くばさりぬべき歌もあらば、一首なりとも御残しを蒙りたし」と、泣く々

々鐘の引合より百首の巻物を取り出しました俊成は其熱心に感じて、快く之を諾しましたかくて忠度は「屍を野山に晒さば晒せ、憂名を西海の浪に流さば流せ、今は浮世に思ひ置くと更になし」と、直に落ち行く一門のあとを追ひました、

故郷花  
 昔ながらの山櫻かな  
 波や志賀の都はあれにしを  
 忍戀  
 ねにのみなげど知る人ぞなき  
 いかにせん宮城が原に摘む芹の  
 これ後鳥羽天皇文治三年藤原俊成が千載集にワザト讀人不知として加へたる忠度の歌であります、歌道に熱心なるものは死に瀕するま

で歌を忘れず、俊成亦其遺志を空ふせずして後世に傳ふ、共に斯道の美談と云ふべきことである。

タリキ 他方 【術語】

彌陀の本願力によりて報土に生るゝを云ふ教行信證に言二一者如来ノ本願力也とあり、

詩 汲水 疑山 動一揚帆 覺岸 移一

谷川の流れには萬峯の影おちて、その潭水を汲まうとすれば、山の影が皆動いて見ゆるゆへ、山が動くかと思へば其實山が動くではなうて水の動くのちや、又帆を揚げて行く船にのれば岸がうつるやうなれども、岸のうつるではない、舟の動くのちや、今我々が妄念悪業の水の動くときは、これでは如来の御助け如何あるらんと疑ひの心を起すものもある

タリキ

りが、たとひ妄念悪業が思ればとて、攝政不捨の御約束の山に動きはせぬ、また南無阿彌陀佛の帆をあげて御慈悲を喜ぶのは我が心の岸の移るやうなれども、我が心で働くのではない、大悲佛智の御本願の舟の働きちや、それゆへ一生涯念すれども、自の行を行すのではない。

三五夜中新月色  
 二千里外古人心

金殿玉樓の中におらるゝ貴顯紳士でも、菜摘水汲む匹夫匹婦でも、生活に高下の差別はあれど、ながむる月にかはりはなる、御廻向の信心が其如くで善悪の凡夫ともに佛の方よりたまはる信心なれば、御師匠も弟子も本願の月をながめるに違ひはなるのである。

歌 朝顔の花は垣根を他力にて

唯一筋にたのみつるかな  
朝顔は垣根によつて花を咲かせ、人を樂ませる如く、我等は彌陀大悲の御呼聲によりて信心の花を咲かせ、往生一定の身となるのです、

花は葉影に朝顔の

其やさしさをみるにつけ

聞いたつもりは憍慢やめて

御慈悲の葉影にはいかいむ

これ朝顔の花が念佛行者に與へたる、無言の教誨であります。

歌 濁り江に咲くや蓮のたねしあれば

水の心はよし澄ますとも

蓮は花の徳として清水の中に咲いたも濁水

に咲いたも色香にかはりはない、他力廻向の信心も其如く、貪愛瞋憎の我等が胸の中の信心も、智者聖人の信心も少しも違ひはないとの事ぢやが、御座の同行方は祖師聖人と一つ領解に基いてござるかや、御學問や御徳やはあなたは一宗の開祖なれば中々覗いてみることもなるまいが、此度の御淨土まいりばかりは、歴々の祖師善知識よりも淺間しい我れ々々が御目當ぢや。

歌 加ればさぞ使ふところと思ふらめ

つかはれて世をわたる猿引  
兎角此世は使はれて渡らねばならぬ、使ふと思へば直に苦を使ふことになる、その使はるゝとは如何なることであるかと云ふと、孝行だては子より親を使ふになる、たい親心に

まかせて事ふるが使はれて世を渡るといふものである、主人に事ふるにも、此方より忠義だてをすると、家來より主人を使ふことになら、たい主人の心にまかせ、身を忘れて大切と思ふばかりにて魚略なきが、使はれて世を渡ると云ふものである、これは娑婆五十年の世渡りの心得、今これを御安心に合法してみると、我等の方より阿彌陀如來に向ひ、孝行だて、忠義だてをするのを自力の運心と名く唯佛意に順ひ己れ忘れて、身も心もまかせ奉るが他力信心の領解と申すものである、これ即ち大悲の親様に使はるゝ身となつたことでもあります。

歌 花ならばはるく行かん吉野山

月は須磨でもこちの裏でも

一目千本の櫻花を見ようと思へばはるく吉野山まで歩みを運ばねばならぬとも、月を見るのには手足を勞せは我家の裏でもよく詠めらるゝと云ふ歌の意、聖道自力の修行なら出家發心捨家棄欲と自力の足を運ばねばならぬとも、他力本願の月見をするには、出家發心のかたちを本とせず、捨家棄欲の相を標せず、その氣のなりで名號のゆはれをきゝひらく一つぢや。

歌 我はこれ澁柿なればいつまでも

接ではいかに甘くなるらん  
實生の柿の樹には、菓か産ても澁ふて食ぬ處で其木を截 甜菓の穂を接は、其れが成長して甜菓となる、我等が身は罪業深重の柿澁煮ても焼ても食ぬものを阿彌陀如來の御方便

本願名號の利劍を以て「横截五惡趣」と罪業の本莖を切はなし、往相廻向の甜菓を接て下されたは、今は往生一定と、信心の芽を出し、追付無上涅槃の甜柿を結ひうる身となり

或人の實驗談に曰く、我れ嘗て接木をしたことがあるが、杏を接くに桃の木を臺にすれば杏あまし、梅を臺とすれば杏酸し、これ杏に異はなければ、酸と甘ひとは本莖の故なり、信者も亦然りて天性柔和なる信者もある、思ひの外慳貪なるものもある、柔和なれば信者ほどあると云ひ、慳貪なれば信者に似合はぬと云ふ、これ御廻向の信に異りはなければ、も稟くる性質に異りがある故である、其中、柔和なれば觸光柔軟の御利益も見へて一し

は貴く、もし慳貪な人ならば御冥見に慙ぢて随分慎まねばなりません、本莖から芽を出してはならぬ、

近頃、他宗の尼僧の語に澁柿の歌をいへりあしくとも唯一すじに捨つるなよ

澁柿を見よ甘ほしとなる

これは聖道門の漸々修行悉到成佛の義に當る、煩惱即菩提生死即涅槃と談じて、澁柿を其儘食ふことはならぬ、にわか甘くすること出来ぬ、してみれば、末法五濁の今は成佛の捷徑、他方本願の接木に如くことはいのである。

其日さへ暮せば其夜月見かな

その日ぐらしの貧き人、藁筵を釣り下げて吹き込む風を防ぐやうな小屋住居しても、差

問なく弄ばるゝものは窓の前の月、「散善修し難し廢惡修善の故に、定善修し難し息慮凝心の故に、何れの行も及び難き身なれども、差問なく持たれ稱へらるゝは本願の行なればかゝる機までも助け玉へるは彌陀大悲の誓願にてましますぞと、難有信じ奉り、目の前の物でさへ暗ふては見へぬのに、大空の月を見れば何故ぞ、月の光りを眼にうけて受けた光りて月を見る如く、夫婦兄弟探り合ふ様な心中に「佛語に虚妄なし本願豈あやまりあらんや」と深く誓願を信じたは、「佛の御慈悲にて候間」とも「二尊の大悲によりて」とも「釋迦彌陀の慈悲よりぞ」とも示させられて、決して我が賢くて信じたでないほどに、いよく佛恩の深重なることを念じ、ねてもさめても

と何時と云ふ時にゑらびはなる、念佛相續するばかりぢや。

とりつかぬ方にうかぶ蛙かな

これは芭蕉門下十哲の一人たる丈草の句である、魚は鰭を水中に動し、鴨は水かきを水中に動かす、ひとり水中に浮んでいさゝかも動かす、水力のみにまかすは蛙である、今われらも佛力のみまかせてとりつく所なきを他方と云ふのであります。

強ひられてにげ處なし舟の酒

陸上の宴會なれば、僕も酒はいけないと云ふて逃げる所もあるけれども、舟遊びの際にはいくら強ひられても逃げどころがないと云ふ句のころ、落る地獄は閉塞諸惡道、まいる淨土は廣開淨土門、後にかへらぬ不退轉、

向ふへ進むが正定聚、おちぬゆはれが攝取不捨、往生人の手を引いて、それでかへるが他力引導「かへるときは親子の燕やら」どれが彌陀やら衆生やら。

俗語

せまい窓から大きな高い

月の光りで月を観る

闇の夜であつたなら自分の鼻をつまゝれても分らぬやうな眼でありながら、遠く中天にかゝつた月輪が、よくも明かに認め得ることの出来たるは、全く月光によつて月光を見たのである、今も丁度その如く、貪瞋煩惱の心の中へ、佛の威神力が到り届いて下されたたのむべきは彌陀一佛なりと、明かに安心安堵の身の上と御定めに預かるのでたのむ心は御助けの届いたすがた、御助けの親心のしら

れたまゝがたのむ一念の御領解であります。

格言であるが、その意は、教育と云ふのにも

いろいろあつて、家庭教育とか學校教育とか社會教育とかの種類もあれども、自分々々の蒙りたる艱難はご多大の教訓を與ふるものなる、「可愛い子には旅させよ」で、可愛い一人子か旅へ出して、難義な丁稚奉公をさせ、他人の飯を食はせるのは何の爲めぞならば、世間も知らず我儘に育つと、金銭は湧き出るものゝやうに思ふて成人の後に驕りに長じ、親の譲りの財産も失ふて、終には我身一つの立場のなひ様になる、それを親が案じて、金銭はたやすく得らるゝものではなぬ、勤めを

して之を知れよと、丁稚奉公につかはしたり旅の憂目をみせるのが、最も優れたる教育である云ふことぢや、今在座の各々方も、南無阿彌陀佛は天から降つたか地から湧き出たやうに大様に聴聞しては、いつまで立つても信心は得られぬ。

まことに往生せんと思はゞ、衆生こそ願をもおこし行をも勵むべきに、願行は菩薩の處にはげみて感果は我等が處に成す、

自力でなろうと云ふたら容易に佛にならるゝものぢやなぬ、花は折られたし梢は高し、佛になりたし修行は出来ず、淨土の菩提は如何せん、彌陀の大悲がましますば、地獄は一定住家であると、我が行く先に驚きが立つて

みたれば、たのめよ必ず助くるの御一言が骨身に徹して難有う頂かるゝ。

寝て食はゞ夢にも思へ親の恩

御蔭なりけり御蔭なりけり

親や先祖が汗水流して働いて下された御恩があればこそ、我身は今日樂をさせてもらうのであるから、親や先祖の御蔭を大切に喜ばねばならぬ如く、一念發起平生業成、たのむばかりで佛になると云ふ我が身が樂な淨土まいりは、彌陀大悲の親様が、諸苦毒中我行精進忍終不悔と、長い間の御苦勞の御蔭であること氣がついたら、今まで信じ奉らざることの淺間しさよと、昔を悔ひ今を喜び、ねてもさめてもへだてなく、稱名相續せらるゝが何よりの肝要である。

探幽の書

京都の人、探幽の書を秘蔵して居りました  
が、落款がなかつたものですから、名筆の人  
をたのんで「探幽」の二字をか、せましたの  
で、書はこれが爲めに底物となりましたと云  
ふ話がある、他方はどこまでも他力である、  
自己二分の計ひの加へると遂に障となつて、  
往生することが出来ないのである。

小供と大車

大車に重荷をつけて小供に引かすには、  
親が後から己れがおしてやる程に、さきへま  
わりて車を引くと云ふ、小供の力で車の動く  
筈はなけれどもあとから親が力を出しておす  
ゆへに、親の力が子の力になりて、重き車も  
動くなり、其子に力はなけれども、親の力が

我が力になりて車がゆくゆへに、子がひくけ  
れども子の力は親の力なり、今も後生ほどの

大事が衆生のたのむので助かる筈はなけれど  
も、阿彌陀さまの方に大願業力あるゆへに、  
その願力で衆生に與へて下さるゆへに、願力  
が衆生の力となりて浄土へ往生をさげるなり  
人多く法をきけば、衆生の方に助かる力が出  
来て往生することおもへども、しからず、法を  
きけば衆生の方に助かる力のなきことが知れ  
るなり、ゆへに彌陀をたのまねばならぬ、彌  
陀の御力のみをたのめば浄土に往生するなり

紙鳶

鳶飛 至天と云ふて、活て羽ある鳶でさ  
へ風の力を借らねば天へ昇ることは出来ぬ、  
況んや紙で造つた紙鳶が羽はなし風なくては

昇られぬ、然るに小供が風のなるのに紙鳶を  
あげると川の中へおどすか、又は木に引きか  
けて破つてしまふ、智行兼備の聖者でさへ他  
力をたのますには昇られぬが佛果である、況  
んや智目行足の欠けた我等は他力をたのます  
は往生はならぬ筈ぢや、他力をたのますに  
往生を望むは小供が風のなるのに紙鳶をあ  
げることくで、三塗の大河に落ちるか、死出の  
山の木にかゝるか、とても往生の昇道は成就  
せぬ。

伊勢参宮

金満家の息子が伊勢参宮するので隣家へ告  
別に行た、隣家の爺は、大に随喜して云ふ様  
「それはよく思ひ立たれた、私等も五十年程  
以前にまいりたが旅をしたものでなければ旅

の味はわからぬ、マア何より角より脚半甲掛  
は一つでも多く持つてゆかしやれ、雨降によ  
これもすれば失ひもする、それから合羽から  
提燈、これらも忘れてはなりませんと、獨  
り合點して喋々と饒舌るから「イヤ私の父  
さんや母さんは脚半甲掛などの用意をして居  
りませぬ」と云ふと、爺は厄鬼となりて「サ  
アそれぢやから旅をせぬものは氣がつかぬ」  
脚半甲掛の用意もせずして、素足でまいるつ  
もりか、よもやそうもなるまい、ごれく私  
が出て行いて注意をしてあげませう」とわざ  
く金満家の宅へ出かけてゆき「只今承れ  
ば御息は伊勢参宮ぢやそうですが、先々御  
目出度うござります、それに付て御注意を致  
します、脚半甲掛の御用意をなされておらぬ

このこと、それは全體何故でござりますか  
 と云へば「ハイ御親切は難有うござれど左様  
 なものは邪魔になりますから……」「ハテそれ  
 がわからぬ、ナゼ邪魔になりますか」「ハイ御  
 承知の通り息子は虚弱な質でござるで、とて  
 も歩行なんどは出来ませぬから、往復とも汽  
 車や人力車に乗せるつもりです」と聞いて、  
 爺はあいた口がふさがらなんだ「フン左様か  
 随分御機嫌能う」……と云ふてまのわる  
 そうに孤鼠々々と逃げてかへりたそうな、隣  
 家の爺と噂へたは傳教大師に弘法大師、此度  
 極樂まいりについて、功德善根の脚半や甲掛  
 はあるかと仰せらるゝと、此方の法然様や御  
 開山様は、ハイ邪魔になる、雜行ぢや入りま  
 せぬ、それは又何故でござる、ハイ無始曠劫

よりの虚弱な質、無願無行の足弱ゆへ迷ひの  
 沙婆から南無阿彌陀佛の氣車で往生させま  
 する、願力他力の氣車旅行なれば功德善根の  
 脚半甲掛はいりませぬとあるが、弘願別途の  
 御勸めである。

醫諭 北塞り

一人の娘を南隣りの家へ嫁にやりたが、實  
 母が九死一生の大病にかゝりたので、毎日々  
 々娘が看病に来るのに、表へまわると道も遠  
 くなり人目に立つから、ごうぞ垣を破りて裡  
 に道をつけて下されと云ふた、夫の云ふには  
 「それはいとやすいことなれども、當年より  
 三年の間北塞りぢやから、塞りの北に向ふ  
 て垣をやぶりたり、道をつけたりすると、た  
 りがある」と云ふて道をつけてくれぬゆへ

是非なく表へまわりて親の看病に行いて居た  
 或時實家の親に此事を申しましたら、父親の  
 云ふには「なるほど唇の上では三年の間北塞  
 りと書いてあるから最もなことぢやが、其方  
 の處から道をつければ北へ向ふゆへつけられ  
 ぬも御最もぢやが、それなればおれの處から  
 垣を破りて道をつけてやろう、其方の處から  
 は北なれどおれの處からは南ぢやから道をつ  
 けてもよかろう」と云ふて、垣を破りて道を  
 つけたと云ふ話がある、今日の我々は三年位  
 の塞りぢやなる、永不成佛必墮無間、無量永  
 劫淨土まいりの道がふさがりてあるゆへ、凡  
 夫の方からはつけられぬで、彌陀如來の方よ  
 りつけて下されたが、本願一實の大道である  
 歸命の命の字に道なりとあるがこの味ぢや

醫諭 頑是なき小供

頑是のなる小供が、古着を脱いで晴着をき  
 かへさせたも、前を合はせたも、帯をしめた  
 も、皆母親の手一つ、雜行すて、後生助け玉  
 へと彌陀をたのみ、御助け一定と帯しめたは  
 凡夫に違ひはなれども、雜行雜修の古着を  
 脱ぎ、助け玉へと晴着を着て、御助け一定と  
 帯しめかへる、信する心のおもかわらず稱名  
 相續の出来るのも、一から十まで大悲の彌陀  
 の御手一つで育てあげられた丸々他力信心で  
 ある。

醫諭 砂中の油

河原の砂を取りて来て、如何程縮木にかけ  
 て絞しても、油は一滴も出ぬ、各々方や我々  
 も、悪業煩惱の外に心はなる、如何程善知識



の綿木にかけてしぼりても、誠の油は一滴も出ず、今日までどうしたならば信せられう、どうしたならばたのまれふと、助け玉への油を出すことにかゝりはてたゆへ、道理はわかりても臍落ちて助け玉へとたのむ思ひは起らぬ、砂の中より油の出る道理はなけれども貪瞋痴の砂の中へ、聞其名號と善知識の御教化より、南無阿彌陀佛の油をさしこんでもらへば、貪瞋痴の沙の中に、助け玉への思ひが起り、晴れ兼ね、疑の闇のはれたのは、光明の母の力、たのみかねた後生を、助け玉へと遠慮なく、たのむ心の起りたは、凡夫の胸の中なれど、全く我が力ではなひ、光明名號の父母の御力ゆへ、御當流に御勸めあらせらるゝは、自力の信心に選んで他力の信心と

仰せらるゝ。

因縁 吉原の遊女

昔 吉原の女郎が向ふ島の櫻を見にゆき、「此川は何と申します」「これは江戸名所の隅田川」あそこに居る鳥は何と申します「あれは隅田川の名物で都鳥といふ」、其時今の女郎が、

故郷の名もなつかしき都鳥

流れの身とて浮む瀬もなし

と短冊にかけて木にくくりつけてかへつた。翌日、徳川家の御姫様が花見にゆかれて、此歌を見て、この女は京都より賣られて来て今は女郎屋の住居、都鳥と云ふ鳥の名で故郷の事を思ひ出し、流れの身とて浮む瀬もなし、年が明かねば故郷へ歸られぬとは不便なこと

、早速吉原中御吟味に相成て其女を御召出し、委細御尋につき、京都には母も御座る、兄弟も御座る由を申上たれば、其時御姫様から一首の歌

ことたらぬ身にはあらねど故郷の

名もなつかしき都鳥かな

其方も故郷は京都みやこの空が、戀しふてならぬもの、嘸や母に逢ひたからふと御姫様が身受けを遊ばして、母と娘へ扶持を御つけなされ、道中は駕に乗せられ、公儀の御用で警護の人に守られ、やすく國元へ歸つたのである、流れの身とて浮む瀬もない女郎が、御慈悲ふかき御姫様にめぐり合ふたりやこそちや常没常流轉の我々が二十五有界の廓を出て他力本願の駕に乗り、目出度う往生とぐるのは

我が力であらばこそ、佛力他力の御手柄で、故郷へは錦をかざる往生とは……………。

因縁 法隆寺の本堂再建

或山僧が法然聖人へ對して、どうも他力本願と云ふことに、疑が晴れませぬが如何したら晴れませうと御尋申上たら、其時の仰せに神社佛閣に祈れと仰せられた、それから所々方々の靈佛靈社へ參詣して祈つた所が、大和法隆寺の本堂再建の所へ詣でた、さて二十人も三十人もかゝらにや動かぬやうな大木、あれをどうして小屋組へ上るかと思ふて居たらやがて大工や人足が来て、轆轤でぐるぐると巻きあげ、空にぶら下げて自由自在に扱ひ、ほぞ穴へ十分にはめた、それを見てあきれはて、さてく不思議なるかな、大工番匠の智

惠さへ斯くの如し、況んや大願業力の阿彌陀  
如來の御計ひちやものをも、初めて他力本願  
と云ふことに疑はれたとある、十方三世の諸  
佛菩薩が百人二百人かゝらせられても、動き  
もせぬ極悪深重の大盤石を、光明名號の轆  
轤で極樂淨土へするく、御引上げとは、ア  
佛智の不思議でござると信するより外はな  
い。

因縁 溪温の妻と山賊

唐に溪温と云ふものあり、甚だ富貴なり  
しが、或時夫婦づれにて花見遊山に行きける  
に、山賊出で、衣類雜品を奪ひ去らん爲めに  
溪温を一討に殺し、妻は狼狽せず、喜  
びの相をあらはし、賊に向ふて云ふ様「我に  
密夫あり添ひたしと思へども夫が邪魔になり

て意の如くならず、折を以て殺さんと思ひし  
も今迄思ひをどげず、然るに今日は思ひもよ  
らず各々方の力にて手を濡らさずに心易ふ殺  
せしこと、この上なき我が本望、依て何なり  
とも御望み次第に禮物を進すべし、まづ我が  
宅へ御出下さらば御酒一献進せし」とまこ  
としやかに申ければ、賊共それをまことと思  
ひ、宅へ至れば奥座敷へ通して饗應す、賊等  
大に樂みて酒宴に心を奪はれ居る際に、密か  
に人を遣はして役所へ右の様子を一々言上し  
早速彼等を搦めとり下されたしと願ひければ  
多勢の捕手屋敷をとりまさ多くの賊を搦めと  
り、首尾よく夫の敵を取りしとなり、時に此  
妻の頓智につき上中下の働あり、下の働と  
云ふは夫の殺されし時當惑して狼狽するなら

ば夫と共に殺されるゆへ、只殺されるが怖さ  
に喜びの相をあらはせるは下の分別なり、夫  
の敵を打たんとて刀を以て向は、賊は多勢な  
り、殊に女の身なれば殺さるゝに違ひなしこ  
心得たは中の分別なり、欺して我家へつれか  
へり、御上の威勢を以て我力いらすに夫の敵  
を打たんとせしは上の分別と云ふものなり、  
今この三分別を法義の上に準へて云は、煩  
惱の賊に取り圍まれ所詮佛にはならぬと後  
生の大事に氣もつかず、只此世の煩惱賊に愛  
嬌して空しく地獄に落ちる人はこれ下の分別な  
り、又八萬四千の煩惱賊を亡さんと自力をは  
げむも女同前の力弱き身の上、終に煩惱の賊  
に惠命を取らるゝは必定なれば、これを中の  
分別と云ふ、役人の威勢を借りて敵をうつて

もらわんと我家へつれかへる如く、妄念煩惱  
の怨敵を亡してもらはんと他力にすがる領解  
になりたのが上の分別と申すものである。

因縁 大伴黒主と枯木紅葉

大伴の黒主は名高い歌人である、或時朝廷  
より枯木の紅葉と云ふ難題が出た、この趣向  
をめぐらしてみて、すこしも趣向がつかぬ、  
しばらく散歩しようと思ふて山へ行き、そこ  
かしこと眺めて居ると、向ふの山に夫婦の鹿  
が居る、そこへ獵師が出て来て、これを打た  
うとするを、黒主はいろく、にたのみて、着  
て居た上衣をぬいで與へたれば、獵師は鹿を  
撃つを止めて歸りた、彼是して居る中にハツ  
タリ日が暮れた、如何せんと思つて御座ると  
遙か向ふに一穗の火が見へる、其所へたより

て行いて一宿をたのんだら快くこめてくれ  
 た、さて黒主は座敷ですわりておると、臺所  
 の方で夫婦のものが和歌の話をして居る、夫  
 が云ふには、今日は枯木の紅葉と云ふ難題が  
 出た、何か面白い趣向はなひか云ふと、妻  
 が「葛まごふ」と云へばついよまるゝであろ  
 うと、話して居るを聞いて、さて〜賤しき  
 夫婦なれども歌道の達人であると思ふなり、  
 クワラリト夜は明けて、あたりを見れば家も  
 なき元の野原、向ふを見れば先刻助けた夫婦  
 の鹿が尾をふりてにげて居る、日はまだ午後  
 四時頃でありた、そこで黒主が気がついた、  
 ハ、アこれは先冠着物一枚をぬいで鹿の命を  
 助けてやりた恩を知り、其禮にわれにこの難  
 題の趣向をさづけたのであらうと、それから

案じつけて、枯木の紅葉とよまれたが、左の  
 歌である。  
 葛まごふ深山の枯木そのまゝに  
 己が葉ならでもみじにけり  
 これは實に名歌なりとて、時の天子様の御  
 褒美に預り、歌道に名をあげられた、この歌  
 の心は枯木に葛がまごふて自ら紅葉した  
 と云ふことぢや、今各々や我々も、長々の間  
 だ瞋恚の煩惱の爲めに佛因を焼き焦し、枯渴  
 の凡夫と枯木同様のこの者が、無上圓滿の妙  
 果を得るは、全く自分の力ではなひ、如來廻  
 向の他力の信心が此胸へまごふて下されたれ  
 ばこそ、己が葉ならで紅葉しにけり安心安堵  
 の身となられたのぢや。  
 親鸞聖人と御手水の湯

親鸞聖人、關東にましくし時、御手水の  
 湯を差上しに、

たつ湯氣も水の力にあらばこそ

火は見ねねども火のちからなり  
 と詠じたまひて、水の性は冷かなれども、火  
 の力を借りて冷き水より湯氣のたつ程にあつ  
 くなりたるは火の力なり、凡夫の性は蛇蝎奸  
 詐なれども、往生一定と信じ、心に領解のあ  
 たゝまりがつき、口に稱名の湯氣のあらは  
 るゝ願力廻向の火の力なり。

智光と頼光

南都の東大寺に智光頼光と云ふ二人の僧が  
 あつて、二人とも至つて親しい友達であつた  
 或時智光が座禪堂に入り座禪をしておると、  
 傍で何やら音がしたので何事であらうかと云

りかへつてみると、頼光が一心に瓦を研いで  
 おるゆへ、智光いぶかしく思ひ、其由を尋た  
 るに、頼光の答ふるやう「私は瓦を研ぎて及  
 物にしようと思ふ」と云ふた、其一言をきいて  
 智光は大に感心せられ、金屬なれば研げば及  
 物になるは當り前ぢやが、土を焼きたる瓦が  
 及物になる道理はなひ、我が行ずる所何ぞこ  
 の理にもれぬ、我が心中は悪業煩惱の土でつ  
 くりたものが佛果菩提の及物になるべき道理  
 がないと大に慨歎せられ、この外に何ぞ成佛  
 すべき捷徑があるまいかと頼光に尋ねられた  
 ら、されば南無阿彌陀佛が其近道ぢや、其ゆ  
 へは悪業煩惱の消ゆる仕掛も、善根功德の出  
 来る仕掛も、名號六字の中に封じ込めて御廻  
 向下さるゝのであると、懇に示されたので

智光もよろこんで他方門に入られたとある。

因縁 桓公と馬の智恵

桓公が管仲と云ふ臣をつれて戰場から歸られた時、大雪の爲めに野も山も平ら一面に白妙となりて道がしれぬ、其時管仲のおもふやう、馬と云ふものはよく道を知るものぢやと聞いておるから、老たる馬を先にたて、諸軍勢もろともに馬の後ろに順ふて行きましたら遂に本街道へ出られたとある、此事を歌に讀んで。

夕ざれば道も見へねば故里へ

もと來し駒にまかせてぞ行く

又、大和物語に此歌をかへて、

駒にこそまかせたりけりはかなくも

心のくると思ひけるかな

と詠み直した、これを云ふのも外ではない、管仲ほどの智者が畜生に道を習ふて漸く故郷へ歸つたとて、誰一人笑ふものはない、たとひ馬でも道を知つた者に順へとの教へである後の歌は、それをどうも思はずに、馬に任せずして我心にまかすとは愚かな事ぢやと云ふ戒め、五濁亂漫の雪空に、極樂まいりの道が知りたくは善知識の御教化に順へよ、我心にまかせば必ずくあやまりあるべきなりとは朝な夕なの御勸めである。

東海惠源師の法語

東海惠源師の法語に曰く、

君にまかす臣に征罰なし、

親にまかす子に不孝なし、

主にまかす家來に不忠なし、

號す、禪宗の開祖、

談義 達磨と武常

達磨大師、支那に佛法を弘めんことを思ひ立ち、王に別を告げ、舟に乗りて支那へ向ひ玉ひしに、波荒く三年の間海に漂ひて漸く南の濱邊に達し玉ふた、時に梁の普通元年である、梁の王武帝大に歡びて直に使をつかはして迎へ玉ふた、武常達磨に問ひ玉ふやう、朕位につきてより以來、寺を建て又は經を寫し又僧を供養せしこと數へきれぬ程なり、此等は何の功德あるべきかと、得意の色をあらはして尋ねられた、達磨これに答へて「一も功德なし」と云はれたので、帝怪みて「それはまた何故であるか」と問ひ返さるゝと、達磨の答ふるやう「これは只小さき功德にして誠

師にまかす弟子に惑ひなし、  
夫にまかす女房に不義なし、  
風にまかす柳に風おれなし、  
世間すら尙斯くの如し、況んや佛法に於てをや、

佛にまかす衆生に迷ひなし

されどまかすまじきこと一つあり、蓮如上人曰く、そのまゝ我心にまかせば、必ずあやまりあるべきなりと、我は流を異にすといへども、其源一なれば、聊か他方本願の尊さをかへりみて、

月影のうつらぬ水はなかりけり

すむも濁るも照るにまかせて

ダルマ 達磨 人名

具には菩提達磨と云ふ、南天竺國香至王の子隣闍氏と

の功德にあらざれば無きに同じ、帝重ねて、  
「然らば誠の功德とは如何なるものぞ」と尋  
ねられたから、達磨は禪宗の法門を以て答へ  
られたけれども、帝は其意を悟り兼ねられた  
から、未だ大法を弘むる時にあらずとなし、  
ひそかに江北を指して去り、嵩山の少林寺に  
止りて終日壁に向ふて座禪ばかりをしておら  
れた、これを九年面壁と云ふのです。

穆山禪師の圖贊

穆山禪師、某の依頼に應じて、達摩と妓女  
との對面の圖に、ものせられたる、贊に曰く  
九年面壁なんのその、  
わたしや十年浮き勤め、  
煩惱菩提の二筋に、  
わたしや誠の一筋を、

加へて三筋で日を暮し、  
糸が切れたる成佛と、  
客の相手にのむあみだ、  
濟度なさるとなさらぬは、  
それはあなたの御了簡、  
外に餘念はないわいな。

ダンリンコウゴウ 檀林皇后

檀林皇后は嵯峨天皇の后なり、篤く佛教を信じ  
檀林寺を建つ、故に此稱あり、嘉祥三年五月崩す、年  
六十五、

檀林皇后の林葬

檀林皇后とは嵯峨天皇の御后にして嘉知子  
と云ふ、絶世の美人にして婦徳の正しき御方  
でありました、かゝる美人のこゝゆへ、誰彼  
と想を懸けたなれど、さらに婦徳にもとる様  
なことはなされぬ、且つ又佛教信者でありた

ゆへ、御崩御の時、仰せらるゝには「おれが  
屍骸を西山の林にすて、おけ屍骸の腐れ爛れ  
たる姿を見たならば、世の色慾に耽けるもの  
ゝ感ひを解くことが出来るであらう」とて、  
野にすてさせられた、これは四葬の中の林葬  
と云ふのである、これは現今の生理學者が難  
病にでもかゝると云ふと自己が身體を解剖し  
て病源の所在を知り、學術界に貢獻したいと  
云ふて死ぬる如くで、檀林皇后は屍體を以て  
世を教化せんとしたまひたのである。

チクサアリコト

有名なる歌人にして千々廻舎と號す、官は權中將正三  
位に進み、歌は藤原忠實有栖川熾仁親王等に學ぶ、安  
政元年八月歿す、年五十八、

千種有功と時鳥の歌

千種有功、或時朝廷よりの勅使として關東

チクサアリコト

へ下られたことがある、今の旅行とは違つて  
昔は中々大變なものぢや、京都から東京まで  
今でならば東海道百三十里の道も急行列車に  
乗れば、十二時間か十三時間でゆかるゝけれ  
ど、昔は中々ツウ簡單にはゆかれぬ、一日に  
十里づゝ歩んでも十三日、其中に雨でもふり  
て川止めなどになると、十五日かゝるやら二  
十日かゝるやら分らぬと云ふ有様で、「今日に  
限つて此大雨、天道様きこねませぬ」と口説  
いた朝顔や、「紅葉のあるのに雪がふる、さぞ  
寒むかつたで御座んせう」と歎いた初花の轆  
をふまねばならぬのであつたが、今は文明の  
利器が備はりたで、今晚の九時に京都で汽車  
に乗ると、静岡あたりで夜があける、停車場  
には手水をつかう湯がわいておる、顔を洗ふ

て食堂へ行けば、和食でも洋食でも御望み次第、「ドーモ富士山は絶景ですチー、白扇倒懸東海天かなど、ビールや正宗で管巻きながら、午前の十時にはハヤ新橋々々云ふ聲を聞くのであるが、現今の時節に朝顔や初花をつれて来てこのありさまを見せたなら何と云ふでありませうか、實に思へば思ふ程、現今の旅はど氣樂なものはありませぬ、ホイ飛だ横道へ這入りかけましたが、旅行談は閑話休題とさしおいて、本文へ立ちかへりて御話し申ませう。

千種有功も澤山な伴人足をつれ、路を東山道に取りて關東へ向はれたが、生憎梅雨の時節であつたので木曾山中にて雨に降りこめられ、五日立つても七日立つても雨は晴れぬ、

御話なされた、後家も此地方の風俗談、盆踊りの事や村社の祭禮のこと、終には五年以前に夫に別かれて誠に女の腕一つで三人の子供を養育するのには骨が折れると云ふ身の上話まで後や先きと申陳た、ケ様なシンミリとした話が一段落を告げると、勅使の云はるゝやう「御前は歌や發句は詠まぬか」と御尋ねなされた、すると後家は「私共は百姓の事でござりますから、歌を詠み詩を作るより田をつくれとやらで、芋や大根は作りますれど、歌や發句なご云ふやうな六ヶ敷ものは中々無學文盲な私共の手にあいませぬ」と云ふた、「サア其六ヶ敷いものと云ふのが大きな間違ひぢや、歌でも發句でも六ヶ敷いことはない、只興に乗じたとか、心に感じたとかし

退屈で、致方はなければ、片田舎の事とて和歌俳句の友達もなければ、圍碁將碁の相手もない、無聊のあまり、宿の主人にあふて地方の風俗話でも聞かうと思召して、主人に挨拶に出るやうにと申されましたが、主人も五年以前に亡くなりて、今では其後家が三人の子供を育てながら細々營業をしておるとの事「それでは其後家にあひたい」と仰せられたのでむ止むなく其後家が恐るゝ御挨拶に出た、次の間に手をついて「一度御挨拶に出ます筈ですが、田舎の不束者の事ですから、つい失禮を致して居りました、永々の雨ふりですぞ御退屈で御座りませう……」と叮嚀に申上ると、勅使は殊の外御満足なされ、長々の雨降りて退屈で困ると云ふが序幕で、いろ

た場合に、只其ありのまゝを口にあらはすのが歌となり發句となるので、御前でも咲きみだれた櫻の花を見たなら、ア、奇麗なと思ふであろう、其奇麗なと思ふたら、思ふたまゝを口にあらはしたが歌發句と云ふものぢや」と、御話になると、後家の云ふやう「それでは御前様、昨夜私が寝ておりましたら、彼是夜明前と思ふ頃に、向ひの山で時鳥が鳴きました、その時鳥の聲を聞いて、五年以前になくなりました夫のことを思ひ出しまして……」と、ホロリと涙ごほしたすると勅使は、「それでは何か、昨夜向ひの山で時鳥の鳴いた聲を聞いて、五年以前に亡くなつた夫のことを思ひ出したと云ふのぢやナ、それは如何にも最も至極なことぢや、其時に其方は何と

か思ふたであらう」と膝をすゝめて尋ねられた、「ハイ其時に私は夫を思ふのあまり、時鳥其方は冥土の鳥ぢやげな

こちの八兵衛殿にあやせなんだかご申しました」と云ふと、次の間に聞き居た御伴の人達は互に顔を見合せて、クス／＼と笑ひましたので、後家はあまり調子に乗りすぎて下らぬ事を饒舌つたと思ふたものか、サツト顔を赤らめて、時ならぬ紅葉を散らししました、勅使は兩眼に涙を湛へて深く感じ入りサテ／＼其方は貞節な女ぢや、それでは八兵衛と云ふのは其方の夫ぢやな、時鳥の聲を聞いて夫八兵衛の事を思ひ出したとは、誠に殊勝な精神ぢや、其夫を思ふ一片の赤心があるから、夫に別れて五年以後の今日まで、此

家に青畳を敷きつめて居ることが出来るのぢやぞ、世には随分不貞節の女があるもので、赤い信女の木魚講とやら、夫に別れてから男狂ひを初める後家花の咲くもの、多い世の中に、其方の貞節を聞いて誠に感服致した、其心をイツ／＼までもかへぬやう、三人の子供を見事に育てあげて、天晴貞女の鑑と人に褒められるやうにしてくれよ、しかし歌には雅言俗語と云ふことがあつて、其方の云ふたのは俗語であるから、心はよくわかつておれど何かが變に聞へるで、これを雅言に直して、時鳥よみじの鳥と聞くからは我が亡き夫にあひやしぬらんとすれば、非常に名歌となる」と賞讃せられたと云ふ昔話がある、婦徳養成の資料とし

ては、大に有益なる教材であらうと思ふ。

チゲツ 智月 【人名】

近江國大津の人なり、芭蕉の門下にして俳句を以て名あり、

雑録 智月の俳句

智月は近江大津の人、俳句を芭蕉の門に學

び、頗る造詣する所ふかし、その

我が年のよるごもしらす花盛り

鶯や手もとやすめんながしもと

我がなりもあはれに見ゆる枯野かな

の如きは 人口に膾炙する所なり、

チシン 智眞 【人名】

京都清閑寺の住僧なり、篤行を以て著はる、

談義 智眞禪師と活ける佛教

清閑寺の智眞禪師が大黒屋傳兵衛と云ふ人

を導いて佛教の眞精神を悟らしめ、傳兵衛は其悟り得た佛教の眞精神を應用して、社會に貢献せられたと云ふ名高い一條の物語りがある、今は其概畧を申陳ることゝ致しませう。これは二百年程以前の話である、大黒屋傳兵衛は其時分には名高き金満家であつたようですが、只習慣的に佛教を奉じて居ると云ふだけのことで、別に深い信仰などはなかつた人で、禪師は大に之を遺憾に思召し何ぞか好き機會を得て、この傳兵衛に佛教の眞精神を會得せしめたいものであると、始終心にかけて居られた、處々果して其好時機が出来たそれは外でもないのです、この傳兵衛が實父の三十三回忌の法事を勤めようと思ふので、平素御歸依を申して居ることであるから智眞禪

師を招待せられた、禪師はこの期會を利用し  
て、今日こそこの傳兵衛を導きたいものであ  
ると楽しんで出かけられた、讀經もいつもの  
違ふて非常に鄭重に勤められ、又御法話も長  
々と致され、佛前に於ける法事の儀式は終り  
てイヨ／＼御饗應を申すと云ふ一段となつた  
元より一世一代の大法事と云ふのであるから  
十二分の御馳走がある、數十名の來客と共に  
禪師はこの饗應を受けて居られた、傳兵衛は  
禪師の前へ出て尋ぬるやう「ケ様に法事を營  
めば其功德が亡父の處へ届くものでありませ  
うか」と云ふた、禪師答ふるやう「おれはそ  
んなことは知らぬ、今日つとめた讀經の功德  
が三十三年以前に亡くなつた父の許へ届くや  
ら届かぬやら、己れはそんなことは知らぬ、

死んだものゝ事はわからぬからさしおいて、  
生きた佛になれ、生きた佛を拜め」と、頻り  
に生きた佛／＼と云はるゝ、そこで傳兵衛が  
「私は木佛や金佛はいつも拜んでおりますれ  
ど、生きた佛は一度も拜んだことは御座りま  
せぬが、實際生きた佛と云ふものが世にある  
ものでせうか」と熱心に尋ねた、すると禪師  
が「あるとも／＼澤山にあるよ」と答へた、  
「實際あるものなれば私にも只の一度位ひは  
拜まれそうですが、それに一度も拜んだこと  
は御座りませぬ、これはどうした譯ですか」  
と問ふと「それは徳の眼がつぶれて居るから  
拜めないのよ、月の照り輝いて居ても、盲人  
は見ることの出来ぬのと同じことだ」と答へ  
らるゝ、「それでは禪師、貴師は御徳の高い方

であるから定めて生きた佛が拜まれるでせう  
と云へば「拜めるとも／＼己れには生きた佛  
がよく拜めるよ」と云ふ、「それでは禪師、私  
に一の願があります、貴師の御力を以て私  
に生きた佛を拜まして下さることは出来ませ  
まいか」と頼んだ「ヨシ／＼承知した、しか  
し其方の徳の眼の開いてない盲目ぢやで全分  
は拜まれぬかもしれぬが、御手の先か御足の  
先ぐらゐは拜めぬこともあるまいよ、しかし  
此家では拜ませることは出来ぬから、己れと  
同道して寺へ來い、今日拜ませてやろう」と  
云はれた。

でくれと云はるゝものですから、云はるゝま  
ゝに竹の皮包み二個をこしらへて差出すと、  
遠慮なく兩の袂へねじこまれた、御布施を差  
上ると、こんな手輕い金銀はいやだ、一文錢  
にかへてくれよと云はるゝ、これも云はるゝ  
まゝに一文錢にかへて五貫からげを差出すと  
それも亦兩方の袂から懷中や背中へねじこん  
で、サア歸ろうこれだけ貴様持つて來てくれ  
と云ふて、御經文と袈裟とを投げ出された、  
傳兵衛は羽織袴で威儀を正し、御經文と御袈  
裟とを恭しく持ち居るのに引かへ、禪師  
は木綿の白衣に麻の衣、それに脊中から懷中  
から兩方の袂まで五貫の一文錢と大きな竹皮  
包みを入れて居る爲め、それは／＼奇態なす  
がたで、まるで一種のポンチ畫の如くである



道中では如何なる人も之を見て笑はぬものはなかつた。

さて三條の大黒屋の宅を出て清閑寺の方へ歸らるゝのであるが、清水の近傍へ來ると多數な乞食が居る、其乞食共が禪師の相を見ると、合圖の鈴をチリン／＼と振るなり、我も／＼と集まりて來た、禪師は其乞食達に向ふて云はるゝやう、「今日は大黒屋の法事で御馳走だよ」と云つて竹の皮包みを出して與へ、五貫の一文錢をそれ／＼に分配してやられた乞食は喜んで、皆兩手を合はして禪師を拜んで居る、傳兵衛は其慈悲心のあつきに感じ入り、「さすが御大徳のなさることは違つたものだ」と思ふて感心した、それから歩みを進めて清閑寺へ着すると云ふと、大きに御苦勞で

あつたと云ふて袈裟と御經を受取り、禪師は奥の間へ這入つて仕舞はれた、待てども／＼出て來られぬ、そこで傳兵衛の思ふやう、「さては和尚は逃げられたに違ひない、生きた佛を拜ませるなごゝ、よい加減なことを云ふて此處までつれて來ておきながら、大きに御苦勞であつたと捨せりふを殘して逃げるとはあまり殘酷だ、禪坊さんはするいから仕方がない、生きた佛は極樂の蓮臺に御座るので此世で拜まれよう筈がないで、大方此位なことであらうとは思ふて居たけれど、あまりでドイも人を馬鹿にするにも程がある、これから御目にかゝつて手詰の談判をしよう」と決定し禪師の御居間へ行くと、禪師は平氣な顔してすはりておらるゝ、傳兵衛「モウ何も御用事

はござりませぬか」と、ぼけて尋ねると「ア、何も用事はない早く歸れ」と冷淡なる御返事そこで傳兵衛は手詰の談判を持ちこんだ、「和尚様、貴師は先刻私の宅で云はれたことよもや御忘れはなさるまい、生きた佛を拜ませてやるから清閑寺まで來いと云はれましたので私はワザ／＼これまで來たのですよ、それに何ぞや、用事はないから早くかいれどは人を馬鹿にするにも程があります、サア早く拜ましてもらいませう、生きた佛を拜まぬ以上はこゝ一寸も動きませぬ」と血相かへて申込んだ、すると禪師は机の上にあつた如意を取つて立ち上り、大喝一聲「この馬鹿野郎まだわからぬか」と云ふて傳兵衛を一撃し、鬼の手を見せてやろう」と云ふて、三つ四つ打ちす

へた、「この馬鹿野郎」で一撃せられ、「鬼の手を見せてやろう」と、三四回打撃せらるゝなり、傳兵衛は満身に汗を流して「和尚様、たしかに拜めました」と答へたとある。  
諸君、此話の意義が御わかりになりましたか、佛心者大慈悲是とありて、佛心とは大慈悲である、慈悲とは拔苦與樂である、そこで智真禪師が清水附近の乞食に向ふて、法事の御馳走やら、五貫文の小錢を與へられたのは乞食の爲めには拔苦與樂であります、飢へたものは御馳走を食ふて、飢の苦を抜いて満腹の樂が與へられた、家賃が永らく滞つて居るのちやが之を拂はねば何時追ひ出されようも知れぬと云ふ心配のあるものも、五貫の錢の分配を受けたで、心配の苦を抜いてやれ

「これで安心だと云ふ樂が得らるゝ、この拔苦與樂の佛心を事實上にあらはして見せておいたのに、また生きた佛を拜ませよ」と云ふゆへ、この馬鹿野郎まだ拜めぬかと云ふ叱責を加へられたのである、鬼の手を見せてやろうとは、鬼は佛の正反對で、佛が拔苦與樂なら、鬼は拔樂與苦であるから、そこで三回の大打撃を加へて苦痛を感せしめたは、即ち鬼の手があると云ふの意味です、拔苦與樂の佛心がわからずば、其正反對たる拔樂與苦の鬼の手を見せてやらうと云ふの活説教である、この活説教によりて傳兵衛は始めて佛教の眞精神を悟り、所謂大悟徹底と云ふの妙境に到達せられたのであります。

それから以後の大黒屋傳兵衛はこの佛敎の

眞精神たる拔苦與樂を社會に應用せられたのである、其最も顯著なるものは昔の交通機關として東海道方面より來る荷物は天津の濱で車に積み、それを手に引かせて伏見に送り、伏見から三十石で大阪へ下し、それから中國西國の方面へ送つて居たものであるから、大津伏見間はいつても牛車が澤山に通ふて居たものだが、雨が降ると牛や馬が困難することはなかく、不容易なことであつた、それを見ても傳兵衛は大慈悲心を起し、大津より京都を経て伏見に至る間に石を敷きて牛馬の困難を助けられた、この敷きたる石は今に残りておる處もあるそうです、又加茂川から東を繁昌せしめようと云ふので加茂川から東に借屋を澤山に造り、それを非常なる安直段で人に貸

されたので鴨東は今のやうに繁昌の地となつた、今現に大黒町と云ふがあるのは、つまりこの傳兵衛が借家を立てられた處を名けたものだそうです。

上來御話を致しました處で、傳兵衛の信仰状態と云ふことはほゞ御分りになつたでせう最後に至りて逸話を一つ掲げて筆を擱くことゝ致しませう、禪師が或時、大黒屋の前を御通りになりますと傳兵衛は店の帳場に座して頻りに帳簿を繰つて居る、そこで禪師が「今日にはなかく精が出ますな」と云はるゝと、「ハイ大般若經を轉讀して居ります」と答へた、すると禪師は横手を打つて「佛敎の極意にかなふた」と云ふて稱賛せられたといふことである、一度信仰の門に入つたものは、起

居動靜一として佛敎ならぬものはないのです帳簿を繰るのが大般若經の轉讀なら、算盤はちくのは即ち珠數をつまぐると同じことだ、商法の取引交渉も活きた説教である、何一つとして佛敎の仕事でないものはない、これではなければ活佛敎ではない、生命ある信仰とは申されぬ、

編者曰く、或書に大黒屋傳兵衛の慈悲的行爲を記せるあり、曰く、文化の頃の洪水に私財を投じて窮民を救ひたること數しれず、嚴冬には夜毎に都下を徘徊して極貧の者に米錢を恵むこと多年なれども曾て我名を語りたることなし、又三條より大津まで三里の間に常夜燈を建て、往來に便にし、車道には敷石を設けたり

己れは常に儉約を守りて人の爲めに飽くまで力を盡くしたりと、亦以て参考に供すべき事なり。

リチク 知足 【術語】

一 安分と熟して足ることを知り、我が分限に安するを云ふ、

談話 芝山の奇行

徳川幕府の頃に芝山と云ふ士人が居つた、性質朴にして武藝に達した者であつた、俸祿は至極卑くかつたが、種々の武器を蓄へて居ることは権門大族にも譲らぬ程で、なかくの物持であつたが、平生は木綿の魚服を着用して決して飾らない、射的が上手に、屢賞典を受けた事もある、庭園の草などは少しも剪らないで、馬に喰はせて置くのである、毎朝其

馬に乗て市にゆき、米鹽其外日用品を澤山購求して、其れを鞍に繫ぎ山の如くつまかさねて、家に運ぶのである、其様が如何にもおかしいので、道路の人々が笑ふて居たが本人は平氣である。

この人の住宅の入口に槐樹が一本ずつこ以前からはへて居るので、この槐樹が右側の柱に代用されて居たが、年たつにつれ樹が段々生長して來たから、衡木が漸次左に傾いて來て、入口が誠に見苦しくなつたにつけて、家内の人々がそろ／＼と不足を云ひ出して、遂にはこんな家はいやだから普請をしては如何ですとねだり出した、芝山は早速これに賛成して宅を建て直す事にきめた、そこで一つの繪圖面を書いた、いよく家を壊はして普請

にかゝらうと云ふ前日に、家内のものどもを

集め、其繪圖面を廣げ、兼て貯蓄して居た金子四五百圓を持ち出し、圖面の上に並べ置きさて云ふやう「おれの見込では座敷には何拾圓、臺所には幾拾圓、奥間には若干圓、漏廁には幾圓をかける豫算であるがどうだ、これで善からうか」と、家内一同異存のあるべき筈はない、皆喜び勇んで居た。

忽ちにして芝山大に叶んだ「火事だ、火事だ、そら皆にげよ、なせ逃げぬのかと云ひながら、例の圖面を巻き、金子も懐に納め、走り出で、書房に入り、蒲團を蒙りて臥て居たあまりの事に家の人々も、且は驚き、且つは笑ひ、主人の深き心を察し、遂に以前の通りあばら家に安んじて、其れからと云ふものは

決して普請の話は出なかつた。

談話 文侯と宋陵子

支那の魏の國に文侯と云ふ王様がありました、良き臣下を得やうと思召して當時の賢者なる宋陵子と云ふ人を尋ねられたことが三度にも及びました、けれども宋陵子は出で、仕へやうともしませぬ、そこで文侯が宋陵子に向ふて仰せらるゝには、「見受くる所、汝は餘程貧乏をして居るやうに思ふが、何故に早く予に仕へぬぞ」と問はれました、時に宋陵子が左の説話を以て御答を申しましたが、これが羊に關する面白き一の譬話であつたのであります。

昔し楚といふ國に大富豪がありました、羊を飼ふこと九十九匹に及びましたが、今一匹

にて百といふ數になるといふ所で、中々に羊が見當りませぬ、所が其大富豪が偶然故郷の友人を見舞ひました時しも、其友人の隣家に一匹の羊を飼つて居ることを見附けました、そこでこれ幸であるといふので、大富豪は早速隣家へ出掛けて主人に逢ひ強て頼むやう、「御迷惑ではあらうが貴下の羊をどうか拙者に譲つて下さい、實はかういふ譯にて今一匹あれば丁度百匹になりますゆへに」と、さも氣の毒さうに物語りました、所が隣家の主人は貧しき生活であるにも拘はらず「よろしい左程御懇望ならば差上げませう」と、早速に承知しました、それゆへ大富豪は大に喜びましたが、又一つには貧者の平氣なのに驚きました。

この話をよく味ひて見ると、富者必しも富んで居るのでなく、貧者必ずしも貧いのではない、何故ならば、富める者は富めるが上にも未だ一匹の羊が欲しいとて満足をして居りませぬが、貧しき方は唯一匹の羊をさへ惜まずに與へる所を見ると、此人の方が餘程満足をして居るものといはねばならぬからであります。

所で宋陵子が今此説話をしたといふは、自分はこの貧者と同じく、文侯の目よりは貧しくも見へやうが決してこれを心配に思ふて居ない、自分はこれにて充分居るのであるゆへに、別に御仕へ申さうとも思はぬのであると、この譬喩を引いて、己が志を述べたものであります、何故人には知足といふこ

この必要であるといふことが、これにて判るではありませぬか。

**神田香平と書畫骨董**

神田香平と申す人は大層書畫骨董を愛玩せられたとの事で、始めは其嗜好に應じて種々なる古書畫や珍奇なる骨董品を購ふことは不可能であるご悟りまして、其後は自己の所有品と他人の所有品との差別を見ずして、單純に書畫骨董其物を愛するの方針を立て書畫の買入れを中止しました、それより他人の家にゆきて、當家には狩野法眼筆の三幅對がある由を承りましたが拜見を願ひたいと申入ると主人は大に喜び、自慢タラしく秘藏の畫を見せします、神田氏は之を見て亦大に樂みを極めて後、世にも稀なる名畫なりと賞賛

し、随分大切に珍藏したまへといへば、主人の恐れ少からずして、結構なる茶菓子など出して篤く待遇する、又他の家を訪問して、當家には名匠甚五郎の作なる大黒天の像があるご承りてまいりました、何卒拜見を願ひたいと申入ると、主人はよくこそと一間へ請して例の大黒天を見せします、神田氏は十分に之を見て眼の保養をして後、これは天下一品とも申すべき日本美術の精粹でござります、幾重にも珍重せられたしと云ふに、主人の歡喜一方ならず、最早十二時にも近ければとて山海の珍味を以て神田氏に饗應すると云ふ有様であつた、斯くの如く神田氏は書畫骨董を我物にしやうと云ふ慾心を絶ちしより、天下の書畫骨董が皆我物となり壹錢も費さずして